

独立行政法人福祉医療機構 令和4年度 社会福祉振興助成事業

「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」報告書

孤立を防ぐ「地域づくり」ガイドブック



特定非営利活動法人

全国コミュニティライフサポートセンター

独立行政法人福祉医療機構 令和4年度 社会福祉振興助成事業
「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」報告書

孤立を防ぐ「地域づくり」ガイドブック



特定非営利活動法人
全国コミュニティライフサポートセンター



はじめに

「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」という今回の事業のテーマは、昨今の地域共生社会の実現という文脈からも総論的には肯定的にとらえられる考え方であると思います。一方で、「(社会的) 孤立」に関する個別の事例に関わる時、ついつい「支援困難(事例)」といった表現で、あたかも、「(社会的) 孤立」の原因が本人やその世帯にあるかのように捉えてしまうことがあるようにも感じます。

2000年に出された、「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」の報告書では、「すべての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合うこと」をソーシャルインクルージョン(社会的包摂)と定義づけました。この考え方は、「(社会的) 孤立」とは、地域社会の在り方そのものに起因するものであり、だれもが陥る可能性を秘めた事柄であり、まさにすべての人が“我がこと”として捉える問題であると考えます。

今回、全5回のオンライン研修でご報告いただいた実践報告は、本人の困りごとや地域の課題に着目し、本人自らがその解決に向け前に向かう気持ちを醸成する関わり続ける支援と、それを応援しよう・見守ろうとするそこに暮らす人々の気持ちを育てる取り組みです。

オンライン研修では、個人の参加はさることながら、今後の連携の契機となるよう自治体ごとのグループ参加を推奨させていただきました。私的な話になりますが、私が所属する淡路市社協においても行政、地域住民の方々と全5回延べ約110人で参加しました。それぞれの立場や経験年数等によって受け止め方に差はあったかもしれませんが、実践報告を聞き、お互いの意見を述べ合うことにより、役割の違いはあっても相互の理解は深まったと感じています。今回ご参加いただいた皆さんともこのような思いを共有できていることを願って止みません。

また、本報告書を手にとられてこのような研修があったことをご存知になられた方には、本事業のホームページよりアーカイブ映像の視聴が可能ですのでお役立ていただければ幸いです。

凧 保 憲

「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」運営委員長
淡路市社会福祉協議会 事務局長

目次

はじめに	2
事業概要	4
有職者からのコメント	6
孤立を防ぐ「地域づくり」実践	7
「就労支援と地域支援」 東近江圏域働き・暮らし応援センター “Tekito-”（滋賀県）	7
「生活支援体制整備事業から多世代交流へ」 上士幌町社会福祉協議会・ママHOTステーション（北海道）	21
「全世代の活躍支援」藤里町社会福祉協議会（秋田県）	35
「若い世代のつながりづくり」久留米10万人女子会（福岡県）	49
「就労支援と地域支援」にしはらたんぼぼハウス（熊本県）	63
事業実施状況	77
開催要綱	79
委員名簿	

●本書の読み方●

このガイドブックは、実践をもとに、研修当日の実践資料と研修内容、グループワークで出された意見、受講者へのアンケート調査結果、後日開催したフォローアップ意見交換会でのご意見をもとに構成されています。

全5か所の実践と、それにもとづくテーマが設けられていますので、気になるページから読み進めてください。

社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業

事業概要

コロナ禍で、生活困窮やひきこもりがクローズアップされ、同時に高齢者の困窮も深刻な課題になっている。共通することは、仕事が見つかりにくく、頼れる家族や友人がいないことによる社会的孤立だ。しかし、地域の中に、さまざまな住民がともに活躍できる役割や居場所を生み出し、そこでつながりや自信を取り戻し、ともに地域づくりを進めている地域がある。こうした実践を学び、活かすことで地域づくりを通して社会的孤立の解消の一助となることを目的に、学び合い、専門職自身が孤立しないゆるやかなネットワークづくりを推進し、社会的孤立の解消に役立つガイドブックを作成する。

おもな事業実施地域

研修会はオンラインを基本とし、全国から参加者を募る。また、研修に登壇いただく講師も地域の偏りをなくし、各地の講師とのネットワークづくりができるような支援も行う。さらに、当事業の委員は北海道、東北、関東、近畿、九州から依頼をする。なお、本事業の事務局は宮城県仙台市に置く。

事業内容

1. 委員会の開催

① 目的

本事業を実施するために、委員会を設置し、委員を委嘱する。委員には生活困窮者支援やひきこもり支援にあたる者、行政経験者、地域づくり NPO、子育て支援の実践者など各分野から招聘する。

② 内容

委員会においては、本研究事業全体の方向性、本事業で実施する研修についての内容および登壇、作成するガイドブックの内容・構成等についての討議、決定を行う。

③ 実施場所（拠点：全国コミュニティライフサポートセンター／宮城県仙台市）

オンラインを基本として実施する

2. 研修事業

① 目的

生活困窮者・ひきこもり者が地域で役割を持ち、活躍する居場所をつくり地域づくりを進める先駆的实践を学び合うこととゆるやかなネットワークづくりを目的に実施する。講師からは、生活困窮者やひきこもり支援から地域づくりにつながるポイントやノウハウを具体的に提示いただき、参加者の明日からの実践に役立ててもらえるような内容を構築する。

② 内容

(1) 研修：テーマごとにオンラインで年5回の研修を実施。参加形式は1自治体でのグループ参加（1グループ6人程度）を基本とし、なるべく多岐にわたる関係者との参加を促し、自治体内

連携の契機とする。なお、研修に先立ち、その素材となる事例を取材、8ページ程度の情報紙を作成してWEB公開することで、事前に事例を読んでもっと知りたいことを事前に聞き取り、研修で取り上げて理解を深め、具体的な取り組みにつなげる示唆を与える。研修内容は、後日アーカイブでの視聴も可能とする。

(2) フォローアップ：研修各回から、参加した1自治体程度にフォローアップのオンラインヒアリングを実施。研修の満足度を測り、ニーズを再確認して、ガイドブック作成に反映する。

③ 実施場所（拠点：全国コミュニティライフサポートセンター／宮城県仙台市）

(1) (2) オンライン

3. ガイドブック（事業報告書）の作成

① 目的

本事業の研修内容や製作した情報紙を、全国の自治体で組織内研修などでも役立てていただくことを目的にガイドブック（事業報告書を兼ねる）を作成する。

② 内容

研修で製作した情報紙を再編し、研修や委員会での議論の成果を基にして、生活困窮者やひきこもり支援が地域づくりに与える視座を事例などでわかりやすく解説しながら、理解・取組みを促進するガイドブックを作成、全国の自治体の孤立・孤独対策担当主管課および社会福祉協議会などへ送付するとともにホームページに公開する。なお、ガイドブック作成においては学識者への協力も依頼する。

③ 実施場所・方法 拠点：全国コミュニティライフサポートセンター／宮城県仙台市

拠点にてガイドブック編集作業を行う。

④ 実施期間・日時


2023年3月完成

事業の特色

オンラインで研修を開催することの利便性を活かし、映像、情報紙、講話の3つのコンテンツを含む研修を実施。後日アーカイブでの視聴も可能とする。研修には他部署や住民と協働でのグループワークをとおして自治体内の相互理解も促す。一方、オンラインでは研修後に講師との対話や質疑応答の時間を十分に取れない、参加者同士のつながりがつくりづらいという課題を、フォローアップのヒアリングで補足し、ゆるやかな顔の見えるネットワーキングにつなげていく。さらに、ガイドブックを作成し、研修のアーカイブ視聴も活用して実践を普及することで、各地で取り組まれているアイデアを広めていく。

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修
<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>





有職者からのコメント

高橋 誠 一

(東北福祉大学総合マネジメント学部 教授)

新型コロナウイルスの蔓延とともに、人と人が顔を合わせ、つながり合うことに一定の制限をかけられた約3年の間、私たちは今まで以上に「孤立」「孤独」という言葉を多く耳にするようになりました。

経済的な貧困だけではなく、つながりの貧困が人から生きる力や生きる気力を奪い取ってしまうことは、残念ながら多くの人たちがこの期間に学び取った事実でもあるかと思えます。

しかし、そんな閉塞的な時代のなかで、その「孤立」「孤独」に抗う実践が、地域には多数あることも、また、私たちは学び取らなければなりません。そしてそれは、すでに「孤立」し、「孤独」に陥っている人のつながりを取り戻すだけでなく、現在の「つながり」を維持することで、「孤立」「孤独」に陥らせない取り組みも、同様に重要であることを本事業で報告いただいた5つの実践から学びとることができました。

さらに、5つの事例からは、それぞれ実践を特徴づけるキーワードをいただいています。

7ページから紹介する東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”の実践からは、「課題解決型ではなく資源活用型」のたいせつさを、21ページから紹介する北海道上士幌町の実践では、生活支援体制整備事業をとおして「高齢者の支援から高齢者の活躍の場づくり」という発想の転換に気づかされました。35ページから紹介する秋田県藤里町社会福祉協議会の実践からは、「ひきこもっている人たちの支援から全世代が活躍できる地域づくり」を、49ページから紹介する福岡県の久留米10万人女子会の実践からは、「自由な発言機会が保障される場」のたいせつさや、「つぶやきから生まれる柔軟な発想で企画が生み出される」というすばらしさを感じ取りました。63ページから紹介する熊本県のにしはらたんぽぽハウスの実践からは、「ごちゃまぜ支援」という言葉に表されるように、今後の包括的支援体制の構築に向けた示唆をいただく機会になりました。

本書を読み解くことで、参加された方々にとっては振り返りの1冊として、参加が叶わなかった方々にとっては、実践を学び、各地でそのエッセンスを取り入れる一助としていただければ幸いです。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践

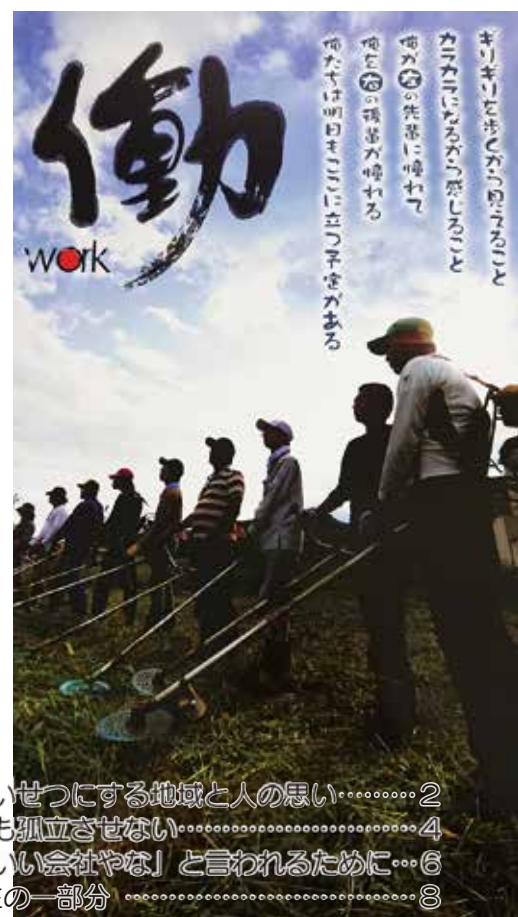
滋賀県東近江圏域

2022年12月15日開催号

就労支援と地域支援 ～東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”～



野々村光子さん(左)の
相談風景



Tekito- カレンダー



目次

Tekito- がたいせつにする地域と人の思い	2
その人も家族も孤立させない	4
100年後も「いい会社やな」と言われるために	6
「働く」は人生の一部	8

《研修のご案内》

2022年12月15日(木) 14:00～16:30

「就労支援と地域支援」

ゲスト……………東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-” センター長 野々村 光 子
コメンテーター……………NPO 法人地域の寄り合い所また明日(東京都小金井市) 代表 森 田 眞 希
コーディネーター……………淡路市社会福祉協議会 事務局長 凧 保 憲

480社に及ぶ企業・事業所と連携し、障害のある人やひきこもりの人の就労と生活の支援を行っています。

市民活動が活発な東近江市の地域性を活かし、さまざまな企業・事務所・市民活動との出会いから、障害分野以外の地域課題にも取り組んでいるのが特徴です。「その人の適当を大切に。すべての人がその人らしく働き・暮らせること」が信条。

お申込み方法は
こちらから

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>



Tekito- がたいせつにする地域と人の思い

東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”は、滋賀県の南東部に位置し、東に鈴鹿山系、西に琵琶湖に挟まれた東近江市、近江八幡市、竜王町、日野町の2市2町をエリアとしています。

東近江市は、安土城の城下町として栄え、市内には、臨濟宗の大本山である永源寺、湖東三山の1つの百済寺などの名所旧跡があることでも有名です。

近江八幡市は、安土城を擁し、中山道の武佐宿としても栄えてきました。また、琵琶湖の有人島である沖島を有しています。

近江牛発祥の地と言われる竜王町は、豊かな自然に恵まれたまちですが、近年は名神高速道路の竜王インターチェンジを核とした交通網の整備も進められています。

日野町を発祥地とするカブラの一種「日野菜」は、室町時代には天皇に献上され、以後、現在に至るまで日野町の特産品として人気を博しています。850年以上も続く「日野祭」は、湖東地方最大の春祭りです。

このように、自然に恵まれ、歴史の重要な基点ともなる東近江圏域は、中世には交通の要衝の地として栄え、江戸から明治時代にかけては、「買い手よし・売り手よし・世間よし」の「三方よし」を理念とする近江商人が活躍しました。近江商人は、現在に至るまで多くの企業家を生むと同時に、現代にも「相手よし・自分よし・みんなよし」とその精神が受け継がれています。

東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”

住 所：滋賀県近江八幡市上田町 1288-18 前出産業ビル 2 F

電話番号：0748-36-1299 FAX：0748-36-1344

【東近江市】

2022年10月末日現在

人 口 112,672人
世 帯 数 46,381世帯
高齢化率 27.1%
年少人口率 13.2%

【近江八幡市】

2022年10月末日現在

人 口 82,008人
世 帯 数 35,102世帯
高齢化率 27.7%
(2020年10月1日現在)
年少人口率 14.0%
(2020年10月1日現在)

【日野町】

2022年11月1日現在

人 口 21,005人
世 帯 数 8,578世帯
高齢化率 30.6%
(2020年10月1日現在)
年少人口率 12.3%
(2020年10月1日現在)

【竜王町】

2022年10月末日現在

人 口 11,600人
世 帯 数 4,497世帯
高齢化率 28.1%
(2020年10月1日現在)
年少人口率 12.8%
(2020年10月1日現在)

働き・暮らし応援センターの業務

「働き・暮らし応援センター“Tekito-”」（以下、Tekito-）は、滋賀県東近江圏域（東近江市・近江八幡市・日野町・竜王町）における障害者就業・生活支援センターの機能をもつ相談支援機関として2006年に開設されました。厚生労働省の委託事業である障害者就業・生活支援センターは、障害者の身近な地域において就業面と生活面の一体的な相談・支援を行う支援機関で、2022年4月現在、全国に338か所（滋賀県内には7か所）が設置されています。

すべての人がその人らしく働き、暮らせる地域づくりを目指し、一般企業での就労を希望する障がいのある人と、障がいのある人の雇用に取り組む（これから取り組もうとしている）企業に対する相談・支援を行い、障がいのある人の雇用の促進及び安定を図ることを目的としています。

働き・暮らし応援センターは、滋賀県および市町からの補助事業として実施しています。障がいのある人の「働く」と「暮らす」ことを一体的にサポートする専門機関です。

就業面での支援としては、たとえば、就職に向けた準備支援（職業準備訓練、職場実習のあっせん）、就職活動の支援、職場定着に向けた支援、障がい特性を踏まえた雇用管理についての事業所に対する助言、関係機関との連絡調整などが挙げられます。

また、生活面での支援として、生活習慣の形成や健康管理、金銭管理などの日常生活の自己管理に関する助言、住居・年金・余暇活動など地域生活や生活設計に関する助言、関係機関との連絡調整が挙げられます。

働き・暮らし応援センターには、就労支援ワーカー、生活支援ワーカー、職場開拓員、就労サポーターなどが配置され、関係機関と連携して支援に取り組んでいます。

「働きもん」を応援する

Tekito- では、「働きたい」という障がいのある人だけでなく、自宅で充電中の人の「働きたい」こと、そして「働きたくない」ことも応援しています。彼ら・彼女らのことを Tekito- では「働きもん」と呼び、働きもんたちと「働きたい」や「働きたくない」を毎日、一緒に考えています。

2006年、Tekito- は、センター長の野々村光子さんが一人でスーパーマーケットの一角に相談窓口を構え、スタートしました。「働くことに少しの応援と工夫があればその人らしく働けることを応援できる」という信念のもと、「働きたい人」を募集します。すると、80歳代の女性が来て、「うちの息子は『働きたい』と言っているけれど、いま50歳で、30年くらい家にひきこもっている」と言います。そうした人が次々に訪れると、「働きたいという人が地域にこんなにたくさんいる。なんてラッキーなんだと思った」と野々村さん。

ですが、企業にとって障がいのある人の雇用は想像以上にハードルが高いことに、間もなく気づくことになりました。「企業は障がい者を雇用することは想定していない、障がい福祉の現場でも、障がい者を企業で働かせるなんてとんでもない、という風土だったんです」と振り返ります。

働きたい人のニーズが確実に高まっているなかで、「福祉よりも、企業の社長たちと話し合っって一緒にやっていったほうがスピーディーに進むのではないか」と考え、企業の社長たちと話し合いの場を持つようになり、現在約720社の地域の企業とつながりをつくるまでになりました。

人生を切り取らない

困っている人が相談窓口に来るということは、世間体が悪い、と考える風土があり、「特に生活に困っているという相談はなかなか届くことが難しい」と野々村さん。ですが、「働きたい」ということならば相談がしやすい。スーパーマーケットの一角から、企業のビルの2階に窓口を移した現在も、「相談に来るのではなく、仕事に来ているような顔で入ってこられる」と言います。

「働きたい」をキーワードに、たくさんの働きもんが Tekito- に集まり、現在は約1,000人が集まっていますが、その多くは制度の対象にならない、障がい者手帳を所持していない人たちです。ひきこもり歴が20～25年という人が働きもんの大半を占めています。

Tekito- で一番たいせつにしていることは、「働くということを、人生から切り取らないこと」。働くことを人生から切り取って考えるのではなく、その人の人生のなかに、本人にとってちょうどよく、少しのゆとりがあって自分に合っているという働き方を応援したいと考えています。

その人も家族も企業も孤立させない

その人の「素敵」を見つける

とはいえ、相談の面談の時間に、「今日は何をしていた？」と聞いても、「テレビを観ていた」。「昨日は？」「テレビを観ていた」。「明日の予定は？」「テレビを観ます」という会話がが続くと、「その人のカッコいいところ」「この人の輝いているところ」を見つけることは簡単ではありません。「この人のいいところはテレビを毎日観られる、という以外に見つけれない、それではあまりにしんどかった」と野々村さんは言います。



図書館の葉刈り作業

そんな折、東近江市内の図書館の庭の葉刈りの仕事の依頼がありました。「契約書にハンコを押してしまった。やらなきゃならないから助けてほしい」と働きもんたちに声をかけ、清掃に取り組むことになりました。

当初は、「そんなことできない、やったこともない」と言っていた人たちが、「次は何をしますか？」と聞いてきたり、人が通るときにホウキを掃く手を止めるなど、「この人の『素敵だな!』」と思えるところをたくさん目の当たりにした。それが見つけられるのが地域なんだと実感した」と言います。

さらに、「次回はいつやるの？」と聞かれたときに、「この人の人生に、次の予定が入った瞬間でした」と野々村さん。働きもんたちの思いに背中を押され、「手作業でやるからには、どこよりも美しくしよう」という Tekito- の仕事ぶりが評判を呼び、「ニンジンを書いてほしい」「空き家をなんとかしてほしい」という依頼が増えていきます。任意団体の「チーム困救」を設立し、地域の困りごとを解決するチームが始動する契機となりました。



近江牛の世話をする

「たとえば、少年院を退所したその日に、地域の草刈りの仕事があればそこで働いてもらっている。地域にその人を応援するアイテムがたくさんあることは、その人のためではなく、地域のためなんです。地域が存続していくための仕事をその人が担っている、ということを、本人が自覚して取り組んでいくことがなによりも大事なこと」と野々村さんは語ります。

本人から見える景色を考え抜く

Tekito- では、「本人から見える景色がどう見えているのかを考えて考えて考え抜こう」と言っています。障がいとはなにかを教えることもなければ、決まったやり方もありません。それは、一人ひとり持っている物語が違うこと、そして、その人の暮らしを制度の枠にあてはめないということを大事にしているからです。

Tekito- では、課題解決型でもなく、ステップアップ方式型でもなく、オーダーメイドの応援を大事にしています。仕事には適材適所があり、その人にとってのちょうどいい働き方があり、さらに人生という長い物語のなかで働くことだけを切り取らない。

「あいさつができたから次」ではなく、「あいさつはできなくてもニンジンも引ける」。「まず居場所に来て」では、居場所に来たら次はここでおしゃべりをしましょう、その次は軽作業、その次は就職相談、という「支援者側から見たステップアップになってしまう」と言い切ります。

家にひきこもっていたBさんに、「なんで出てきたの?」と聞いたところ、「野々村さん、僕がなんでひきこもっているかに興味なかったでしょ」と言われたことも。Bさんは、「誰もが僕が部屋にいることに興味を持っていて、部屋の外に僕を連れ出そうとしていた。僕は、部屋のドアをあけたら、その先に階段があると思っていた。部屋を開けたら次は親と食事をしましょう、その次はお風呂に入りましょう、その次は外出しましょう、その次は買いものをしましょう、そんな階段があると思っていた。だから、僕はドアを開けることはできたけれど、開けなかった。だけど野々村さんはそんなことには興味がなかったでしょう。部屋に入ってきたときに、『20年も部屋にいるのにきれいにしてるなー』って言ったんです。野々



介護施設で働く



ニンジンの収穫作業

村さんが開けたドアの隙間から見えたのは、階段ではなくて廊下だった。だから出られたんです」と。

本人にとってのオーダーメイドを考えるために、「目にしたもの、聞いたこと、感じたことはすべて情報。そうでないとやり方はわからないし、そのためにひたすら考えます。それでも、失敗することが多いんですよ。失敗したら、また考える。考えて考えて考え抜く。それが Tekito- です」と野々村さんは続けます。

家族以外の人との会話

Tekito- への相談がつながる経路は、親戚や民生委員、さらに軽犯罪を繰り返してきた人は弁護士からつながる場合もあります。もちろん、同居する親からの相談があれば、支援のなかで親と関わる場面もたくさんあります。

そんな関わりのなかで、家族からは「もう来ないでください」と言われたことも。「本当に来ないでください、来たと知られたら夫に私が怒られます、と言われても、

また明日来ますね、と言って行くんです」と野々村さん。「昨日、来ないでと言ったのに、なんでまた来るんですか?」と言われて。その繰り返しですよ」と言います。

来るなと言われても行って、お茶を飲んで帰ってくる、そんな野々村さんには、ひとつの思いがあります。

「家族の会話を、2階でひきこもっている子どものことだけにしたらいけない。子どもは子どもの人生を生きている、その場所はたまたま2階の自室であるけれど、両親がそこに人生をささげるのではなく、自分たちの人生を生きなければならない。そのためには、「たとえ『今日もあの迷惑な人が来た』と言われても、実はそれが20年ぶりの、息子以外の他人のことの会話だったりするんです。親にしかできない応援はもちろんあるけれど、親がしてはいけない応援もあって、そういうことははっきりと伝えています。そして、誰の人生にも、人生にミスは1個もないということは必ず言い切ります」と胸を張ります。



丸太をチェーンソーで玉切りする

100年後も「いい会社やな」と言われるために

地域の会社をつぶさない

Tekito- が行う企業とのマッチングの特徴的なところは、本人のタイミングに合わせていつでも見学ができる事業所を数多く持っていることにあります。たとえば、家から出ずに長い時間を過ごしている人にとって、工場がどういうところかを想像することは難しい。求人票を見せて面接や実習をするのではなく、「工場って油のにおいがするの知ってる?」「どんなにおいが見に行ってみようか」と声をかけています。

とはいえ、最初から順風満帆だったわけ



薪割りの風景

ではありません。「働いた経験のない人や障がいのある人は、一緒に働くために工夫が必要。そうした人をわざわざ雇用する意味は何や」と言われてしまいます。

野々村さんは、この言葉を「地域の危機」ととらえました。20年前、人口減少が叫ばれ、このままいけば地域経済の崩壊が目に見えていました。でも、地域経済を担う地域の社長たちが、「1日8時間フルタイムで働ける経験者」など、自分たちの求人にも合致する人しか雇用しないという考えでは、地域経済、果ては地域が崩壊すると考えたのです。



地域祭りへの出店

Tekito- と出会った以上は、「社長の会社は絶対につぶさない」と話し、Tekito- の働きもんとの出会いで、社長が変わり、企業風土が変化していきます。現場で働く人が、「午前中、彼ら・彼女らが手伝ってくれることで、ほかの仕事ができるようになった」と声をあげてくれたことから、午前中だけ、一日のうちの朝の1時間だけ、という求人の幅ができてきました。

「障がいのある人の雇用を達成しましょうという目標ではなく、『社長の会社が、この地域で100年後もええ会社やな、従業員たちもこの会社で働いてよかったなと思う会社づくりを一緒にやろう』と言っています。地域にずっとあり続ける会社にしかできない、働きもんの応援の力です」と野々村さんは断言します。

社長から見える景色とは？

Tekito- では、ケース会議を「応援団をつくるわくわくタイム」と考えています。本人の行動を問題行動ととらえると、「本人の生活を変えなければならない、本人のことを問題行動を起こさないようにしなければならない」と考えがちですが、Tekito- では、まず本人の思いに「共感する」ことからスタートします。



お疲れさん会

Tekito- では、本人から見える景色を考え抜くことは前述のとおりですが、企業の社長から見える景色は、「その人が働く姿」と言います。「ある会社の社長は、働いたことのない人の履歴書を見て、『(職歴がなく何も書かれていないので)きれいやな。うちの会社が最初にそこに入るんや。辞めてもらったら困るな』と言いました。その人が働く姿を社長と一緒に想像して、一緒に見るのが大事だと思っています」と野々村さんは話します。

「働く」は人生の一部

地域の古民家に集まる

「働く」だけでなく「暮らし」も応援するために、「そこにいれば誰かがいて、気になることを聞けたり、しゃべったりして過ごせる場所がほしい」と考えた野々村さん。さっそく応援団の社長たちに相談をすると、ほどなく物件を見つけてきてくれました。

野々村さんが出した条件は、「できるだけ結束の強い地域であること」。地域の人同士が顔見知りで、昔ながらの人たちの強いつながりのある地域を希望したそうです。

そこには、働きもんを応援するだけでなく、もうひとつの意味が込められていました。「若い職員は、家に固定電話がなかったり、ご近所づきあいを経験したことのない時代に育ってきています。そんな環境で生まれ育っている彼ら・彼女らでなくても、『地域を耕す』ということは簡単なことではありません。しんどい、でもその先にとってもおもしろいことがある。そうしたことを経験してもらいたかった」と言います。

たとえば行き場のない出所者がこの民家に来て叫んだりすると、そのことを近所に話に行かなければなりません。話に行くためには、普段からあいさつをし、関係性をつくっておく必要があります。「職員の自治参加の練習の場所であり、ここで地域に入り込む練習をしてもらう。苦情が来たらみんなで謝りに行きます」と野々村さん。

宴会をしたり、一人暮らしをしたことがない人がそこで住まう練習をしたり、DV親子のシェルターとなり、働く場所を見つけてここから仕事に通ったり。

いつの間にか、「誰かがトイレトペーパーを持ってきてくれていたり、布団を持ってきてくれていたり。ただお昼を食べているときもあれば、相談に使うことも」。地域の古民家に優しさと気にかけて合いが持ち寄られる、そんな場所に育ってきています。

60歳を超えた働きもんの場所

約20年間のひきこもりののち、Tekito- 設立当時の18年前に知り合い、就職した人たちが60歳を超えて、定年を迎え始めています。がんばって働いてきていても、なかなか自分の地域とのつながりを持っていません。定年後の居場所を考え、企業の社長たちが株式会社を設立し、農業を始めました。ビニルハウスをたてて、収穫した野菜は道の駅やホテルへの納品も決まっています。

出会ったときに60歳、という人もいます。この年齢から草刈りに出るのではなく、「ちょうどいいタイミングで出会えた」と、農業を手伝ってもらっています。

人口減少から、このままでは地域が崩壊するかもしれない、という危惧もあるなかで、「ひとり勝ちするのではなく、ちょうどいい場所までみんなで降りられることが大事」と野々村さん。「この人たちが自宅にいたからうちの地域が守られている。そう考えると、働いているかいないかではなく、この人が地域の応援団になるんです。応援する人も、される人も、一緒くたの地域、それがいいんだと、地域が学んでいるんです」。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践 東近江圏域働き・暮らし応援センター “Tekito-”

2022年12月15日開催号

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」

発行元：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1階

TEL 022-727-8731 FAX 022-727-8737

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修「就労支援と地域支援」

開催日 2022年12月15日(木) 14:00～16:30

開催方法 Zoomによるオンライン研修

申込者数 個人参加 51人、グループ参加 38団体

登壇者

ゲスト

東近江圏域働き・暮らし応援センター Tekito- センター長 野々村 光子

コメンテーター

NPO 法人地域の寄り合い所また明日 代表 森田 眞希

コーディネーター

淡路市社会福祉協議会 事務局長 凧 保憲

プログラム

- | | |
|-------------|------------------------|
| 14:00～14:03 | 開会・趣旨説明 |
| 14:03～14:35 | 野々村光子氏による実践発表 |
| 14:35～14:55 | 野々村氏、森田氏、凧氏によるディスカッション |
| 14:55～15:05 | 休憩 |
| 15:05～15:35 | 参加者によるグループワーク |
| 15:35～15:55 | グループ発表(約20グループ) |
| 15:55～16:15 | 発表へのコメント |
| 16:15～16:30 | まとめ |
| 16:30 | 閉会 |

委員からのコメント

塚本秀一 委員 (社会福祉法人湘南学園 専務理事/滋賀県)

滋賀県は、糸賀一雄さん、田村一二さんなどによる障がい福祉の考えが地域に浸透し、大きな影響を与えています。先人によって地域で障がいのある人もそうでない人も一緒に過ごす風土を醸成してきたという障がい福祉のあり方が、長い時間をかけて就労支援と地域支援＝地域づくりにつながってきているのだと思います。

池谷啓介 委員 (NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長/大阪府)

受講されている皆さんのそれぞれの地域性は合わせたアプローチや、それぞれの立場でどんな思いを持って地域を見ているか、研修をとおして考えていただくことに意味があります。「一人前に働くことが正しい」とされている価値観に問題があるかもしれません。視点を変えながら見ることの重要性をキャッチしていくことで少しずつ変わっていく。そのプロセスを各地域でぜひ見つけていってほしいと考えています。

ディスカッション

森田真希 野々村さん、貴重なお話をありがとうございました。野々村さんのお話では、制度をどう活用しているか、などのお話はあまり出てきませんでした。制度で見るのではなく、その人をどれだけ見ているか、その中から一人ひとりの物語をどう見つけているか、紡いでおられるのか、ということかと思えます。

風保憲 その人の物語、ストーリーを知れば、その人と関わってしまった者、知ってしまった者としての役割や使命があると思います。野々村さんの原動力はどんなところでしょうか。

野々村光子 人の人生を「とらえ次第」と言えるのは、おそらくこの仕事くらいではないかと思えます。私たちもある意味、制度や事業で守られているからこそできるということもあります。

Tekito-には、罪を犯してしまう人がたくさんいます。先日は下着泥棒をした50歳の男性がいました。「50歳で下着泥棒をして会社をクビになりそうだ」というこの人を、なんとかしなければならぬという就労支援にあてはめるのか、「50歳で下着を盗めるなんてずっと青春やん」と、罪を犯してしまったけれども、その人の良さも含めて応援団をつくっていくのか。この応援団力は、「就労支援」という4文字だからこそできることだと思っています。

制度の中にいるからどれだけ物語をとらえてもいいという概念があると思っています。制度の中にいるからこそ人と出会えて、その人を抱きしめることができる。ただ、制度には報告が必要です。その際に、何件就職に結びついたかという数字だけではなく、私たちしか知らないたくさんの物語を伝えていくことが、私たちが現場で働く就労支援という意味だと思っています。そうした物語を届けて、行政の人目も目を閉じたらこの人の物語や地域が見えてくるのではないかと。そう考えるとわくわくしませんか？だからこそ私たちは、その人たちから教えてもらったことを言葉にして応援団に広げて、応援団で笑って、そして泣く。それが大事なのではないかと思っています。

「不登校の子どもたちは将来働けないのか」という相談も受けます。それは、「学校に行かないという選択をした子どもたちをカッコいい」ととらえられないこちら側の問題でもあるのです。いろいろなことが課題解決型でないほうが地域を豊かにするのではないかと思っています。

風 11ページにある、「課題解決でもステップアップでもなくオーダーメイド型」「本人から見える景色を考えて考えて考え抜く」というフレーズが印象的です。いまのエピソードをもとに紐解くと、大家さんから見える景色、社長から見える景色、従業員から見える景色、働きもん本人だけでなくその人に関わるすべての人の景色を考えることなのだろうと思っています。

野々村 「自分の会社ではいろいろな働き方できて、いろいろな人が働いている」と社長から見える自分の会社の景色の変化は、私たちがどれだけ話をしていても伝わりません。私たちには力がありません。働きたいけれどうまく働けない彼らの力で、その会社はどんどん変わっていくのです。

参加者によるグループワーク発表（一部抜粋）

◎

行政だと制度や縦割りが優先になってしまうので、協力できる横のつながりが必要だ。誰が主となってネットワークを構築していくのか考えていかないといけない。行政では難しい部分があり、NPO 法人等に協力依頼する必要がある、どの法人がどの部分に強いのか、信ぴょう性はあるのか、情報を普段から取っていないといけない。といった意見が出ました。（地域包括支援センター／個人参加）

◎

ステップアップから始めるのではなく、オーダーメイドの支援。「それができなくてもいいじゃないか」という支援があるということ。お金を稼ぐという観点ではなく、地域貢献や社会的に自立できるという評価軸を持つということに気づきました。また行政からどのようなバックアップが必要なのかについて深めたいと思いました。（市高齢企画課、市保護自立支援課、市障害者支援課、市地域包括ケア推進課、市社会課、市社協によるグループ参加）

◎

野々村さんの事業所のお話がとても楽しかったです。「資源活用型支援」という新しい形での支援の方法に気づくことができました。ひきこもりの方は、本市にもたくさんいらっしゃると思いますが、このような支援ができればもっといい地域になっていくのではないかと思います。（市社協、地区社協、地域包括支援センター、生活支援コーディネーターによるグループ参加）

◎

それぞれの実践が聞けてよかったです。野々村さんの話を聞いて、民間を巻き込むというところをもう少し、聞きたいなと思いました。民間側としては、巻き込まれたいけど巻き込んでもらえない悩みがあり、ヒントがあればお伺いしたいです。（行政、地域包括支援センター、住民によるグループ参加）

◎

まちづくり、福祉、行政・社協では、「地域での良いことをいかに制度に合う形に落とし込んで報告できるか（翻訳できるか）が腕の見せどころになるのでは。そういうことが深められたら」という話が出ていました。また、「企業からこども食堂への支援窓口として社協とつながりができ、今後そのつながりをどう深めるかということも考えたい」という意見も出ていました。まちづくりでは、野々村さんの活動を聞いて、「今後さまざまなネットワーキングに生かしたい」という話も出ていました。（市まちづくり中間支援担当、市社協、生活困窮相談支援相談員（家計）、行政重層支援担当によるグループ参加）

◎

ご本人が見えている景色を大切にすること、応援団を増やすことのたいせつさに気づきました。応援団をつくっていく具体的な実践をフィールドワークのように体験できるとよいなという意見が出ました。野々村先生の講義を聞くことで、楽しみながらやられているのがわかり、もっとお話を聞いてみたいと感じました。（市地域福祉課、重層的支援体制整備事業担当者、生活困窮者自立支援事業担当者、地域包括支援センターによるグループ参加）

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修『就労支援と地域支援』アンケート結果

(2022年12月15日)

設問1 あなたのことについてお尋ねします。

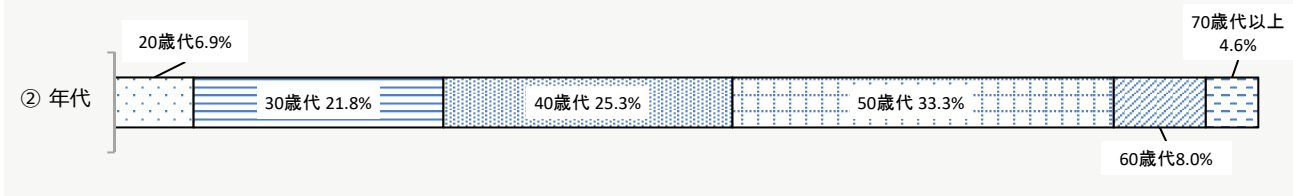
①お住まいの都道府県を教えてください

59件の回答

都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数
北海道	5	栃木県	1	新潟県	1	大阪府	2	高知県	1	鹿児島県	2
青森県	2	群馬県	2	長野県	6	兵庫県	16	佐賀県	1	沖縄県	2
秋田県	1	千葉県	4	愛知県	3	和歌山県	1	長崎県	1		
福島県	1	東京都	4	京都府	1	広島県	1	熊本県	1		

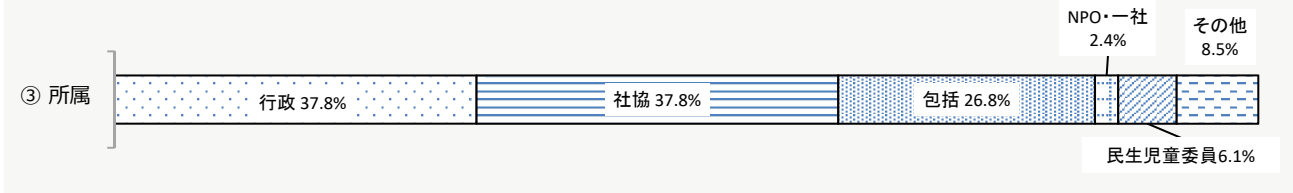
②あなたの年代を教えてください。グループ参加の方はメンバーの年齢構成をチェックしてください（複数選択可）。

59件の回答（総回答数87件）



③あなたの所属を教えてください。グループ参加の方はメンバーの所属構成をチェックしてください（複数選択可）。

59件の回答（総回答数82件）



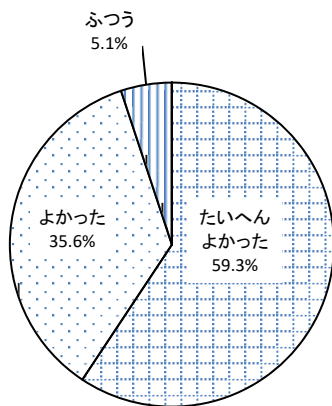
その他回答【7回答（各1件）】

一般市民（自営）、高齢者支援センター、葛生地区社会福祉協議会、札幌介護予防センター月寒（札幌市の委託事業）、
[行政（公民館主事）、社協、民生委員、包括センター職員]、若者サポートステーション、サロン開設予定者

設問2 本日の研修内容についてご意見をお聞かせください

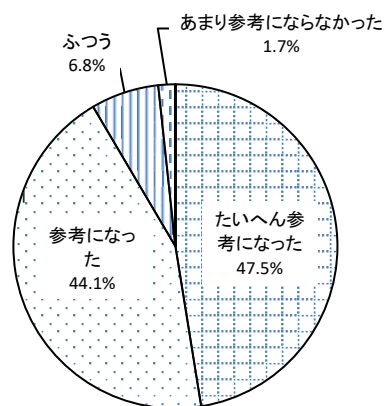
①今回の研修に参加されてよかったですか。

59件の回答



②研修の開催資料は参考になりましたか。

59件の回答



●研修や資料のなかで参考になったことや役立ったことを教えてください。
(自由記述／一部抜粋)

- 野々村先生の話が、とてもすんなりと自分に入ってくる話し方・内容で、難しい言葉が連なった研修よりも、より深く理解できました。自分がかかわっている高齢者のみならず、多世代で力を合わせる地域の応援団を、少しずつでも増やせたら良いなと思います。
- かかわる人も支援しているスタイルでなく、その人のちょうどいい働き方だったり、時間の過ごし方を探りながら、寄り添いながらその人らしさに気づいて受け止める寛容さ、とらえ方が素敵でした。
- ご本人の見えている景色をとことん考えること、本人のとらえ方をいろいろな角度からとらえて共感してもらえるように発信すること、資源を活用しながら支援することを学びました。野々村先生の事前資料が、後から振り返ったり同僚と学びを共有したりする際に役立つと思います。
- 野々村さんの実践報告がたいへんおもしろかったです。どうしても、その人の課題、それも自分たちが感じる課題から支援を考えてしまうのですが、それは結局私たち支援者にとっての“理想”であって、本人にとっての“ちょうどええ”ではないことを実感しました。本人への働きかけ方についても、“支援しにきました”ではなく“助けてくれないか？”といったスタンスも、自分が対象者だったら後者の方に気持ちが動く気がしました。
- 就労支援の実践のお話であったが、本来のソーシャルワークの価値、本質を話されているように感じました。我々の仕事は、その人や地域の“素敵”を見つける仕事で、本当はワクワク、楽しいもの。そのことを体現してくださった野々村さん、森田さん、凧さん。ありがとうございました。また組織内連携が課題だが協議が進まない本会にとって、グループ参加というしかけはたいへんありがたかったです。

●運営についてのご意見やお気づきの点がございましたら教えてください。
(自由記述／一部抜粋)

- すべてわかりやすく、スムーズでした。ありがとうございました。
- 全国各地をオンラインでつないでの開催、グループ討議、すばりしかったです。
- グループワークは進行役を決めていただいた方がよりスムーズに話し合いが始まったと思います。
- 猫も一緒に参加できるアットホームな雰囲気研修会で、こちらもリラックスして参加でき、グループ内でも自由な意見が飛び交ったと思います。
- 今後も視点が変わるような研修をお願いします。Zoomで全国の人と話ができ、便利さを実感しました。
- オンライン研修の仕方を学ばせてもらっています。ご準備など含めてありがとうございました。

●その他のご意見や感想などがございましたらお聞かせください。
(自由記述／一部抜粋)

- だれもが住みやすい地域づくりを目指し、縦割りではないかわり合いがたいせつになってくると思いました。たいへん参考になりました。
- 地域のお助けマンや受け入れ企業、そして困りごとが自然と集まってくるような交流の広さを獲得していきたいと思います。
- 個人的に、「パンツ盗るなよ～」と言える（言い合える）社会（矯正しようとしたり、無視したり無かったことにしたり、をしない社会）は、すごく明るいと感じました。みんなが安心して下りていける地域、私もそんな地域をつくりたいしそんな地域に住みたい。
- 就労支援の考え方、イメージの幅が広がりました。研修に参加して、考え方が少しポジティブになれた気がします。また、コーディネーター間で考え方が共有できるように伝え続けていきたいなと思います。
- 地域での取り組みがすばらしいのはもちろんのこと、支援に対する考え方も勉強になり、今後活かしていきたいと感じました。

フォローアップ意見交換会

日時 2022年12月19日(月) 16:00～16:30

開催方法 Zoomによるオンライン

参加者 **秋** 第2層協議体委員会(秋田県)

市生活支援コーディネーター、協議体の委員と参加

栃 市町村社会福祉協議会・地区社会福祉協議会(栃木県)

地区社協の会長、地区の2つの民児協の会長、地域包括支援センターの職員、
第1層生活支援コーディネーターと参加

沖 市町村(沖縄県)

村役場、地域包括支援センター、社協、民生委員と参加

●研修を受けて、参加者の反応は？

秋 野々村さんのお話に惹きつけられ、勉強になりました。野々村さんのお話では「応援してくれる人がいること」に触れていましたが、まだそういう風土にたどり着けていないのかもしれませんが、応援できる人は、もっと声をかけて、声を出していけばもっと地域が良くなっていくのかもしれない、という話が出ました。

沖 社会福祉協議会では、就労支援B型事業と地域生活支援事業という2つの就労支援事業に取り組んでいます。担当職員も参加していたので、「担当者や運営側も辛抱よく根気強く、コミュニケーションを大事にしながら接する」ということが共通していると話しました。

栃 参加した皆さんは、「とらえ方がおもしろい、こういうとらえ方ができるんだ」と感心しておられました。市内にもひきこもりの方はいますが、何ができるのかに悩んでいました。研修を受けて、「まずは知ることから」と考え、「今度一緒に行って話しかけてみましょう」と話しています。

●今後について

秋 第2層の協議体として、自分たちの地域をよく見て、暮らしの部分で自分たちに何ができるか、何をしていかなければならないかを考えていこうと思っています。研修で各地の実践から学び、吸収して、自分たちの地域にあるものを見つけて、自分たちらしいものをつくっていけるように頑張っていこうと思います。

沖 村社協で昨年、就労支援活動を立ち上げましたが、地域の方から「ちゃんと就職ができるのか」という疑問が寄せられ、担当者は、心のどこかにもやもやとしたものを抱えていて、自分たちの地域には何が足りないのかを悩んでいたようです。今回の野々村さんのお話で、「就職を目標にしない」と言っただけたことが自信につながったようで、研修をとおして発見した見方やとらえ方を、これからの地域支援につなげていきたいと考えています。

栃 地区社協の会長がバイタリティのある方で、地域が動いていきそうな予感がしています。私は4月にこの地区を担当となったばかりです。こうした研修の機会を活かして、地域住民の皆さんと学び合う機会をつくって行ければと思っています。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践

北海道上士幌町

2022年12月20日開催号

生活支援体制整備事業から多世代交流へ！



地域事業者を訪問するヨチヨチ隊



まちなか農園での交流



目次

北海道上士幌町の生活支援体制整備事業	2
上士幌町社協が取り組む生活支援体制整備事業	4
ママのHOTステーションが取り組む生活支援体制整備事業	6
双方向からの体制整備で目指すまちの姿	8

《研修のご案内》

2022年12月20日(火) 14:00～16:30

「生活支援体制整備事業から多世代交流へ」

ゲスト……………上士幌町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター 小泉 彰 宏
ママのHOTステーション 生活支援コーディネーター 倉嶋 香菜子
コメンテーター……………宝塚市社会福祉協議会 地域支援部長 兼 企画経営部長 山本 信也
コーディネーター……………全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

生活支援体制整備事業は無限大！高齢者の居場所、子育てママたちの居場所、そして双方が交わってまちが元気に。長年暮らす住民も、移住者も、まじわりながら楽しいまちのかたちが見えてきた！子育て支援が高齢者の介護予防に、高齢者の生きがいや役割が子どもたちの未来のために、そんな実践を北海道上士幌町からお届けします。

お申し込み方法は
こちらから ➡

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>



北海道上士幌町の生活支援体制整備事業

北海道のほぼ中心部、十勝地方の北部に位置する上士幌町は、町内の約76.5%が森林地帯に覆われています。大雪山国立公園、ナイタイ高原牧場など豊かな資源を活かした観光業や、畑作や酪農もさかんです。毎年8月にはバルーンフェスティバルが開催され、全国から多くの観光客が訪れます。

1955年の13,608人をピークに2014年末には4,884人まで減少した人口も、子育て支援や定住促進に力を入れたことから2015年以降は増加に転じ、以後、微増減を繰り返しています。

【2022年7月末日】

人口	4,931人
世帯数	2,611世帯
高齢化率	34.3%
	(2021年1月)
年少人口率	11.3%

生涯活躍のまち・上士幌町の生活支援体制整備事業

北海道上士幌町は、誰もが健康で充実した生活を送ることができるよう、住民同士のつながりや生涯学習機会の創出、起業支援、多世代交流等の居場所と役割のある地域コミュニティづくりなど、「全世代型生涯活躍のまちづくり」を掲げています。

上士幌町では、2016年度より生活支援体制整備事業に取り組みはじめました。「まずは生活支援コーディネーターを置いて事業を始めなければ」と地域包括支援センターで地域おこし協力隊を募集し、地域づくりについて一緒に考えるところからスタートしました。

2018年度からは町社協に第1層の生活支援コーディネーターを配置。道内で取り組まれていたまちづくりカフェを参考に、住民が気軽に立ち寄れる場づくりを始めました。また、2017年に上士幌町や関係機関が出資して設立されたまちづくり会社「株式会社生涯活躍のまちかみしほろ」に、2020年、第2層の生活支援コーディネーターを配置し、住民が住民を支える仕組みづくりを目指しました。上士幌町保健福祉課健康増進・介護支援担当主幹の佐藤眞由美さんは、「社協は長年、地域の高齢者などの支援業務に関わり、既存の活動とのネットワークができています。まちづくり会社では、新たな交流やつながりづくりなどの活躍の場の創出が期待されています。その双方がこれからの上士幌町に重要で、それぞれの得意な分野を活かしていくことで、町全体の生活支援体制整備事業となり得るのではないかと考えました」と話します。

「あったらいいな」から生まれた活動

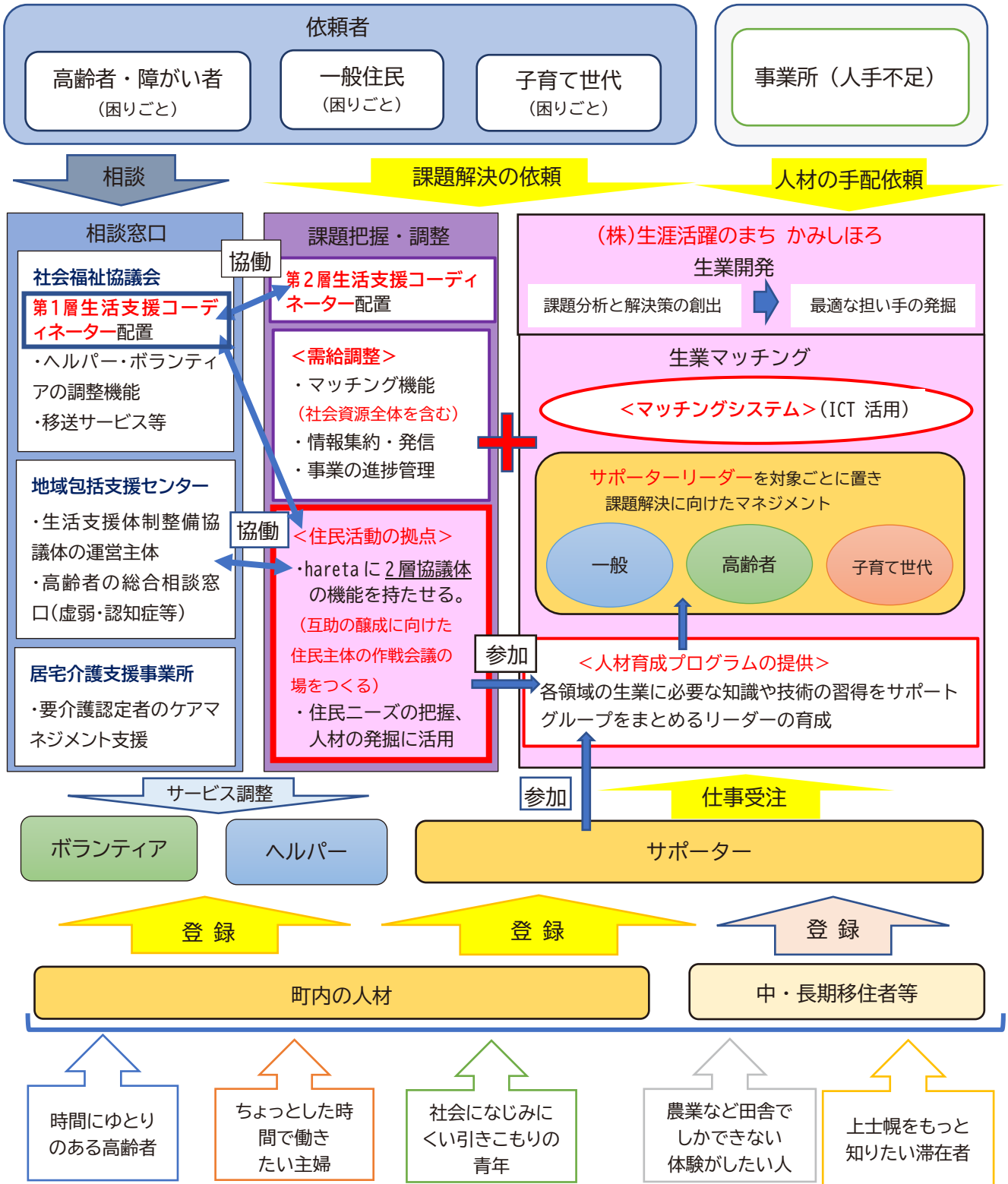
2019年度は、生涯学習センターで開催したグループワークを皮切りに、長年、町に暮らす高齢者や若者、移住者など多様な町民が集い、「自分たちのまち・上士幌がこうなったらいいな」「もともと住んでいる人も、新しく移り住んだ人たちも輝けるまちにするには」を話し合う「かみしほろあすわがミーティング」を開催。まちの未来を考え、交流やつながりを醸成するための意見交換をカフェ方式で6回にわたって実施しました。そこで意見が出た、「男性の居場所がない」という課題に対し、町社協の生活支援コーディネーターが、町内に「まちなか農園」を開設します。

また、町の子ども子育て支援計画策定時のアンケート結果の「乳児を抱えるママたちのほっとできる場所が必要」という思いから、まちづくり会社の生活支援コーディネーターが、「ママのHOTステーション」を立ち上げます。

現在は、それぞれの活動をつうじて、子ども、高齢者、地域との接点を面的に展開し、顔の見える、お互いさまの地域づくりへと進んでいるところです。

令和4年度版

上士幌町の生活支援体制整備事業概要図（生活支援サービスを関係機関で一体的に提供）



<期待される効果>

- ・福祉的なサービス調整から一般依頼者からの受注対応まで広い範囲の課題に対応できるようになる。
- ・福祉関係機関とまちづくり会社の連携により、各種サービスを必要に応じて組み合わせ提供できるようになる。
- ・遊びや趣味では社会参加につながらない高齢者層へのアプローチが可能に
 働く⇒人の役に立つ⇒報酬が得られる⇒満足感・生きがい・生活に余裕が生まれる。
- ・町民以外の参加も可能にし、働きながら町の良さを知ってもらえる機会にもできる。観光と就労体験の組み合わせ。
- ・地域包括ケア体制構築に向けた「介護予防」と「生活支援」の中核的な事業になりうる。

上士幌町社協が取り組む生活支援体制整備事業

地域に根づいた「かあちゃんばあちゃん野菜市」

上士幌町には、20年以上前から続く、農家の女性たちによる「かあちゃんばあちゃん野菜市」があります。もともとは国道沿いでテントを張っての野菜販売でしたが、2015年からは町内の高齢者施設内の地域交流スペースで、週1回、開催するように。メンバーのなかに調理が得意な人がいたため、当初はメンバー同士でお昼ご飯を食べていましたが、近隣の高齢者住宅に住む一人暮らしの高齢者が野菜市に来ることもあり、一緒に食事を楽しんでいました。料理は評判を呼び、町外からも来客があるなどの人気ぶりでした。

しかし、新型コロナウイルスの流行のもと、高齢者施設を利用することが難しくなりました。それでも「楽しいから続けていけるんだよ」の言葉どおり、野菜市は町内の別の場所に移転をして、現在も週1回の活動を続けています。



かあちゃんばあちゃん野菜市

男性の居場所「まちなか農園」

2019年度に開催した「かみしほろあすわがミーティング」で、「男性の居場所がない」という課題に対し、2020年に入職した町社協の第1層生活支援コーディネーター、小泉彰宏さんは、町内の旧生きがいセンターの敷地内に「まちなか農園」を立ち上げます。「上士幌はもともと家庭菜園に取り組んでいる人が多いまちです。地域の人の気軽な通いの場として、顔の見えるつながりづくりを野菜づくりをとおして実現できれば」と小泉さん。野菜づくりに興味のある人や地域の高齢者ら10人が、おしゃべりをしながら野菜づくりを楽しんでいます。ときには敷地内の枝切剪定や草刈りをすることもあるそうで、まちなか農園の周辺は美しく整えられています。



まちなか農園で子ども園の園児との交流

農園の近くに住むある高齢男性は、身体の調子を悪くして自宅に閉じこもりがちでした。近所の人や農園参加者もその人のことを気にかけていました。その人の実家が農家で、野菜づくりの知識があることがわかり、「作業は難しくても農園にアドバイスをもらえないか」と声をかけ、メンバーとして活躍しています。

「体制整備事業で取り組む以上、単なる畑活動ではなく、つながりや交

流を目的とするために、当初から認定子ども園の園児との交流を活動に組み込んでいました」と小泉さん。高齢男性と園児との交流も、子どもたちの笑顔の様子に「元気でよかったね」という声が聞かれると言います。園児とともに育て、収穫した野菜は、園児たちが持ち帰るだけでなく、給食センターなどに寄付をするなど、地域貢献にもつながっています。園児たちが野菜を持ち帰るときは、地域の野菜料理名人による野菜レシピも添えられ、家庭でもおいしく調理できるような工夫もしています。



まちなか農園の皆さん

「実は、野菜が苦手なんです」と語る小泉さん。まちなか農園が始まったときもなかば困惑し、「苦手意識もあり、何から手をつけていいのかわからなかった」と話します。協議体と相談をしながら、場所、植え付け作物、誰に声をかけたら教えてもらえるかなど「ひとつひとつ聞きながらの、手探りでスタートでした」と振り返ります。

さらに、まちなか農園の参加者から「こんなことやりたい!」と立ち上がったのが、2022年4月にスタートした、20～70歳代の住民による「かみしほろ地域食堂うれしか」です。月1回、第3土曜日に子どもから高齢者まで、地域住民誰もががつどえる場になっています（18歳までは無料、大人は100円程度の活動応援を呼びかけ、各回30食を提供）。まちなか農園に来ている調理師が活躍するほか、農園の野菜も活用されています。

農園を中心に、地域の交流がゆるやかに温かく、広がっています。

気にかけて合う地域づくりへ

大自然に包まれた上士幌町糠平地区は、約100年続く温泉地としてその名を響かせています。旅行者な



わんわんパトロール隊

ども多いことから、地域での安心・安全のために、犬を飼っている町内会長が中心となって、わんわんパトロール隊が始まりました。犬の散歩ついでに地域を見守っていこうというものです。

ほかにも、コロナ下でも気にかけていけるようにと、2022年には65歳以上を対象としたスマホ教室を開催し、16人の高齢者がつどいました。スマートフォンにLINEのアプリを入れ、2人1組でLINEの交換をしてみるなど、操作をしながら新たなつながりの手段を学び合いました。好評のため、定期的な開催へとつなげていく予定です。

ママのHOTステーションが取り組む生活支援体制整備事業

子育て世代のネットワーク化から多世代交流へ

倉嶋香菜子さんは、地域おこし協力隊として2020年4月にまちづくり会社に配属と同時に第2層生活支援コーディネーターに任命されました。3児の母であり、そして保育士として障害のある子どもの預かり施設などで勤務経験のある倉嶋さんは、「子どもだけでなくママの元気を支えることが大事。預かっている間の子どもたちが楽しく元気に過ごすだけでなく、帰宅したあとに家族で笑い合えるようなサポートが必要」と言い切ります。

生活支援体制整備事業で目指したことの1つは、多世代交流の地域づくり。そのためには、まずは子育て世代のネットワーク化が必要と、アンケート調査を実施します。そこから見えてきた「ママたちがほっとできる場所がほしい」という願いにこたえて、産前・産後のママがほっとできる居場所、「ママのHOTステーション（以下、ママHOT）」を立ち上げました。



体操教室の合間に赤ちゃんに会いに来る高齢者

交流から生まれる気かけ合い

ママHOTでは、毎週金曜日にふれあいプラザでママサロンを開催しています。おもに0～3歳までの乳幼児とママたちの交流の場ですが、同

日、同会場の別部屋で開催されている介護予防教室に参加している高齢者たちと触れ合う機会が自然に生まれるようになってきました。サロンに赤ちゃんの様子を見に来たり、あやしてくれる高齢者が増え、自然な交流が始まりました。「ここで赤ちゃんに会えることが楽しみ」と話す高齢者がいるように、教室参加への大きなモチベーションともなっているようです。

月1回発行しているおたよりを地域の事業所などに届けるのは、子どもたちとその保護者。ママHOTに来る子どもの写真を大きく掲載し、ようやく歩き始めた年齢の子どもたちが手配りでおたよりを渡します。その姿に、地域住民もにっこり。上士幌に長く住む親子だけでなく、転勤などで移り住んだ親子もこうして知り合い、会話が生まれ、成長を喜び合ったり体調を気にかけるなどの自然な交流が生まれています。「子ども世帯が独立して町外に住んでいるため、『野菜をつくっても消費できないから』という高齢者から家庭菜園で収穫した野菜のおすそ分けをもらうこともあるんですよ」と倉嶋さんは話します。

「ない！」から「安心した暮らし」へ

「倉嶋さんが広げる子育て世代のネットワークが活性化したことで、行政や認定こども園、子育て支援センターも刺激を受け、母親の意見を取り入れながらサポート事業を展開するようになりました」と佐藤さんは話します。「都会とは違い、子育て世代には『〇〇があったらいいのに』というものはたくさんあります。たとえば、小児科病棟のある病院もその1つですが、ないものをねだるよりも、自分たちでどう

解決できるか、どうすれば安心できるかを考えることがたいせつです」と話す倉嶋さん。万一のときに安心できるようにと消防署と相談し、救命講習の講座などを企画します。「私たちは切実な思いを持って消防署に出かけましたが、実は消防署も住民に身近な存在でいたい、私たちと顔の見える関係をつくりたい、という思いがあったことも、同時にわかったのです」と続けます。

ママHOTは、利用者を町住民に限定していないことから、隣町から利用に来る親子連れもいます。なかにはママHOTの利用から移住を決めた人もいます。さらに、ママHOTができて3年目、設立時に一人っ子だった子どもたちに弟妹が生まれ始めています。いずれも「ママHOTがあるから安心して子育てができると感じた」と言うほど、ここで育まれたつながりが大事なものであることがうかがえます。

役割と生きがいを引き出し、地域で活躍

そんな豊かなつながりを生み出してきた倉嶋さんですが、「生活支援体制整備事業は介護保険の事業なので、その財源を使って子育て支援をすることに反発があったことも事実です」と話します。だからこそ、目指す多世代交流の姿は単なる居場所やイベントに留まらず、「その先にどうつながり、関係性をつくっていくかがこの事業。子育てママも高齢者も、笑顔でまざり合い、役割を持って活躍し合う将来像を描いています」と言い切ります。

10月からは「ベビチア」さんの募集を始めました。ママHOTの救急講習の際などに、その場で一緒に子どもを見守ってくれる人を募る仕組みです。「チラシを渡すと、80歳代の女性が『私らが声かけといてあげるから！』と動き出してくれたり、体操教室に来ている女性が『私たちみたいな年齢でもできること

を探してくれてありがとう。こんな嬉しいことないよ』と言ってくれたり。何歳になっても誰かの力になりたいという思いは一緒で、それが果たされてこそやりがいを感じ、生きがいにつながっていくのではないかと思います」と話します。

子育ての大先輩から「よくがんばっているね」とかけられた一言で子育てに自信が持てたり、子育てに追われているときに地域の人からの差し入れで元気になれたり。そして赤ちゃんの無償の笑顔がまた高齢者の笑顔や元気を引き出しています。自然な交流のなかで、高齢者が子育て中のママたちを気にかけるだけでなく、ママたちもまた高齢者を気かけ、できることをお返ししていく、そんなお互いの持つ力が循環を生み出し、活躍しながら支え合う上士幌町の未来を、子育て世代と高齢者の交流の先に見据えています。



赤ちゃんに手遊びを教えてくれる地域高齢者



おたよりを配るヨチヨチ隊と地域高齢者

双方向からの体制整備で目指すまちの姿

2022年度は、まちなか農園にママHOTの親子が訪れ、一緒にタマネギの苗植えを行い、その後にお茶の時間を楽しむなどの新たな交流も生まれました。子ども園の園児よりもさらに低年齢の子どもたちでしたが、まちなか農園のメンバーが優しく寄り添い、子どもたちにとっても忘れられない一日となりました。

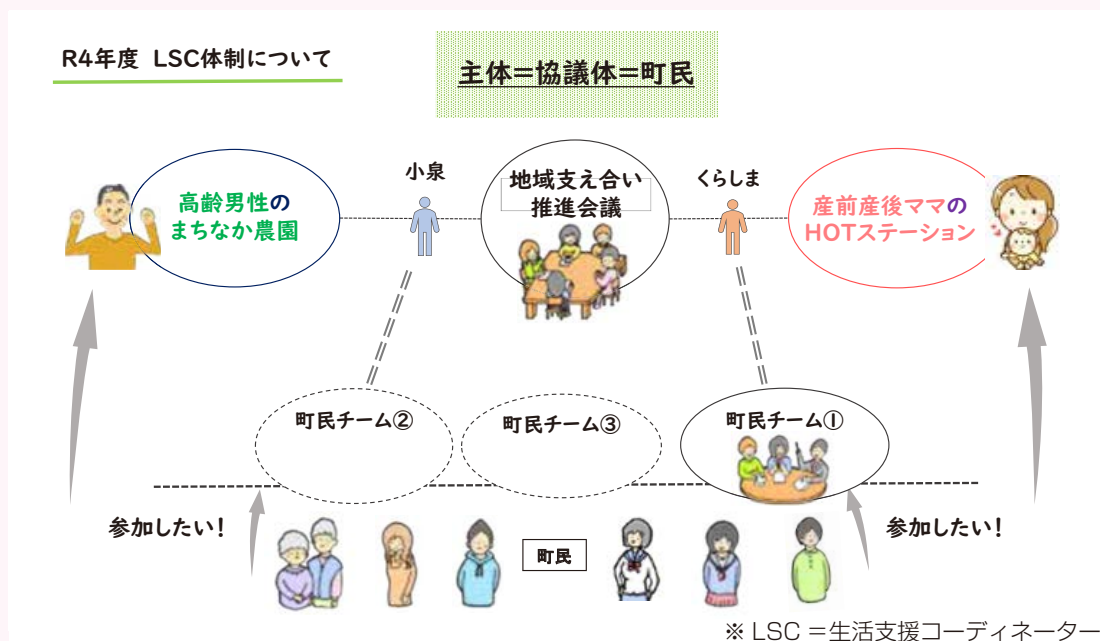
「生涯活躍のまち」を目指す上士幌町で、生活支援体制整備事業も生活支援コーディネーターである小泉さんと倉嶋さんの二人で進めていくわけではありません。それぞれの活動を支える町民チ



女性だけの第2層協議体

ームを地域にたくさん生み出し、そこにたくさんの住民が関わっていただけるようにと考えています。

たとえば2021年度は、月1回、働く世代が集まる町民チームを結成し、互いの強みを伝え合うワークや、地域に貢献したい若者へのアドバイスを実施するなどしながら意見交換を重ねてきました。「昨年度はコロナ下でもあり、人を集めるイベントはできなかったのですが、それぞれのコミュニティをつなげることができたと思います」と倉嶋さん。今後は、さらに「本音で話し合えるために、集まる時間やメンバーを工夫して開催していきたい」と意気込みを語ってくれました。



孤立を防ぐ「地域づくり」実践 北海道上士幌町 2022年12月20日開催号

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」

発行元：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1階

TEL 022-727-8731 FAX 022-727-8737

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修 「生活支援体制整備事業から多世代交流へ」

開催日 2022年12月20日(火) 14:00～16:30

開催方法 Zoomによるオンライン研修

申込者数 個人参加 67人、グループ参加 47団体

登壇者

ゲスト

上士幌町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター 小泉 彰宏

ママのHOTステーション 生活支援コーディネーター 倉嶋 香菜子

コメンテーター

宝塚市社会福祉協議会 地域支援部長兼企画経営部長 山本 信也

コーディネーター

全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

プログラム

- | | |
|-------------|----------------------------|
| 14:00～14:03 | 開会・趣旨説明 |
| 14:03～14:45 | 小泉彰宏氏、倉嶋香菜子氏による実践発表 |
| 14:45～15:00 | 小泉氏、倉嶋氏、山本氏、池田氏によるディスカッション |
| 15:00～15:10 | 休憩 |
| 15:10～15:40 | 参加者によるグループワーク |
| 15:40～16:00 | グループ発表 |
| 16:00～16:15 | 発表へのコメント |
| 16:15～16:30 | まとめ |
| 16:30 | 閉会 |

スペシャルゲストからのコメント

佐藤眞由美氏（上士幌町保健福祉課健康増進・介護支援担当主幹／北海道）

「あすわがミーティング」は、道南地区で開催されていた「まちづくりカフェ」の手法に着想を得た社協の前任の生活支援コーディネーターから、「会議ではない、みんなで話し合う座談会のようなかたちでまちづくりを考える場所があったら」と提案があり、実現しました。いろいろな世代の方が気軽に参加できるように、まちづくり会社のカフェのようなスペースを使って、みんなでお茶を飲んだりしながら遊んだり語り合ったりしながら、地域の課題ややってみたいことを話し合う場として機能をしていました。

倉嶋さんから「子育て支援」という言葉を聞いたときに、私自身も生活支援体制整備事業は介護保険の事業なのになぜ子育てなのかと違和感があったことも事実です。ですが、同時に高齢者のなかだけで高齢者に元気になってもらう、活躍していただくのは限界があるとも感じていて、事業のなかで子育てを考えることに可能性を感じました。「子育て中のママたちがつながる場をつくり、そこから高齢者がいずれつながっていく。長い目でやっていこう」と関係者に説明を繰り返しながらサポートをしてきました。実際、そこに来ている高齢者の顔を見ると、「力を貸してもらおう」ということがこんなにも高齢者が輝いていくということなのだ、と感動しています。

ディスカッション

池田昌弘 生活支援体制整備事業というところから考えると、第1層が高齢者、第2層が子育て、という役割分担をしているのも新鮮です。小泉さんからお聞きした「まちなか農園」の取り組みは、特に高齢の男性の活躍の場で、居場所を求めてつくられてきた。そういうなかで子どもたちとの交流などから子どもと高齢者がつながり、広がり、元気になっています。倉嶋さんからの報告では、生活支援コーディネーターの報告で、これだけ赤ちゃんの写真が出てくるものはなかなかないと思いますが、聞いているとなるほどな、とつながってくる話ではないかと思います。「私たち、このくらいだったらできるよ」という声を活かすということは、高齢者の元気を引き出していくことにつながるのだと思いました。高齢者支援ではなく高齢者の活躍という視点でとらえていくと、より広がっていくということが具体的に見えてきました。

山本信也 お二方の報告で共通していたのは、「ありがとう」という言葉だったことが印象的でした。宝塚市社協でも、これからの社会参加のかたちとして、高齢者の活躍をどう展開していくが非常に大事だと話しています。これから地域づくりを考えたときに、高齢者と赤ちゃんだけがつながるというわけにはいかない。究極の社会参加とは、みんなが言葉をかけ合って、つながり合うということだと改めて考えさせられました。そうした日常の交流のエピソードを教えてください。

小泉彰宏 まちなか農園の取り組みも3年目になりました。まちなか農園に参加されていて、交通指導員もされている高齢男性は、以前に農園に来ていた小学生との交流がその後も続いているという話を聞いています。

倉嶋香菜子 いままで地域で声をかけられることがなかったママたちが、「買い物に行くとき声をかけられるようになった。それがとても心強い」「地域にたくさんおじいちゃんやおばあちゃんができたい」とうれしそうに話してくれています。

山本 いまお話いただいたようなことが、生活支援体制整備事業や、孤立をなくす地域のつながりづくりのヒントだと思います。生活支援コーディネーターは、しかけることに力を入れがちですが、そのあとの「どういつながりができているか」を確認していくことは、地域共生の社会づくりに向けて非常に大事なことと考えています。

池田 赤ちゃん便りを持っていくことで子どもの成長を一緒に喜んでくれる住民が増えてます。赤ちゃんや子どもたちだけでなく、子どもをつうじてお母さん世代が、自分の親や祖父母世代の住民とつながりができています。若い人たちにとっても、自分たちが高齢になったら支え合っていかなければならないんだ、ということ学ぶ場にもなっていると感じます。なにより、だれかに頼ってもいいんだ、頼ってみたら頼られた人も元気になるんだということに気づくことは、私たちにとって大きな発見ですね。

参加者によるグループワーク発表（一部抜粋）



高齢者の支援をするという視点から、互助とか活躍の場をつくるという視点に転換することに気づけました。企画力や実行力がすごいと思いました。ヨチヨチ隊や「ありがとう」と言ってもらえる場はすごく良い機会だと思うので活動に活かしたい。（地域包括支援センター／個人参加）



参加者に地域活動者があり、その圏域のことについてお話ししました。そこでは新幹線の高架下にて、個人的に植物を育てている方や井戸端会議的な集まりの場になっており、その方々を巻き込んで「野菜やお花づくり」をテーマに活動の場にしてはどうか、という話になりました。（市社協、市地域包括支援センター、町会によるグループ参加）



生活支援体制整備事業とは何ぞや？ということ まずは地域の人たちに深く浸透させる必要性を感じました。そのための生活支援コーディネーターや行政と、社会福祉協議会との連携を経て、民生委員や区長を始めとした地域住民への浸透の方法をどうすれば良いのか？というのが自分たちの課題としてあがりました。（市高齢者福祉部門、第1層生活支援コーディネーター、第2層生活支援コーディネーターによるグループ参加）



高齢者と子育て世代の交流の場をつくり、地域の高齢者と子育て世代が顔の見える関係になるところから始めることができればいいのかという意見が出ました。地域での活動内容を周知するところから始めてもいいのかという意見が出ました。転入者が多い地域より、古くからの住民が多い地域のほうが地区での活動も盛んなため、そういった地域性もスムーズに進めるためにはまず必要なのかという意見が出ました。農園の維持費などの予算はどうされているのか気がなりました。（区地域支えあい課、区社協によるグループ参加）



【わかったこと】事業所とLINEなどを活用してつながる方法がある。高齢者と赤ちゃんの共通点の多さ。高齢者対象の支援という意識が無意識にあり、多世代の情報などをキャッチしにくくなっているかも。よく地域を見ると多世代交流の活動がある（大学生×子育て世代）。【深めたいこと】公民館と保育園のマッチング。もっと地域の多世代の情報を収集していきたい。中心地の薬局やその他企業とのつながる方法。区の子ども会や老人会との連携（イベントを通して）。（市福祉事務所、市地域包括支援センター（第1層生活支援コーディネーター、第2層生活支援コーディネーター）によるグループ参加）



一定の所属から多世代へ事業を展開した素敵な事例を聞き刺激を受けました。一方で、①つながることが苦手な対象群をどうつなげていくか、②全世代交流するための財源問題など課題が上がった。福祉担当でない課の職員も参加したので、各課にてフィードバックしていきたい。（市企画課、市福祉事務所、地域包括支援センターによるグループ参加）

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修『生活支援体制整備事業から多世代交流へ』アンケート結果

(2022年12月20日)

設問1 あなたのことについてお尋ねします。

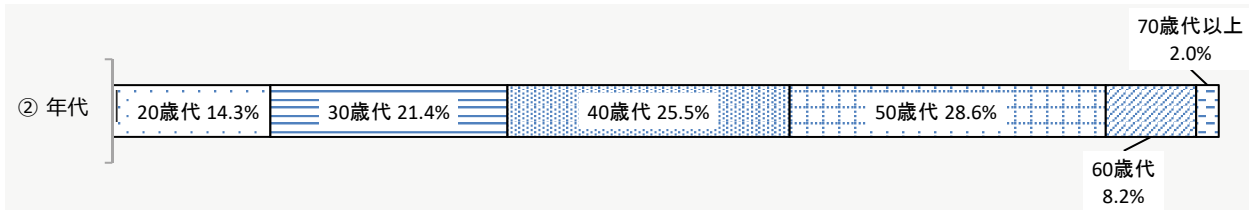
①お住まいの都道府県を教えてください

67件の回答

都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数
北海道	3	福島県	1	石川県	1	愛知県	5	広島県	2	熊本県	1
青森県	1	栃木県	1	福井県	1	京都府	2	山口県	2	大分県	1
岩手県	1	群馬県	2	長野県	6	大阪府	4	愛媛県	1	鹿児島県	1
宮城県	1	千葉県	3	岐阜県	2	兵庫県	16	高知県	1	沖縄県	2
秋田県	2	新潟県	1	静岡県	1	和歌山県	1	福岡県	1		

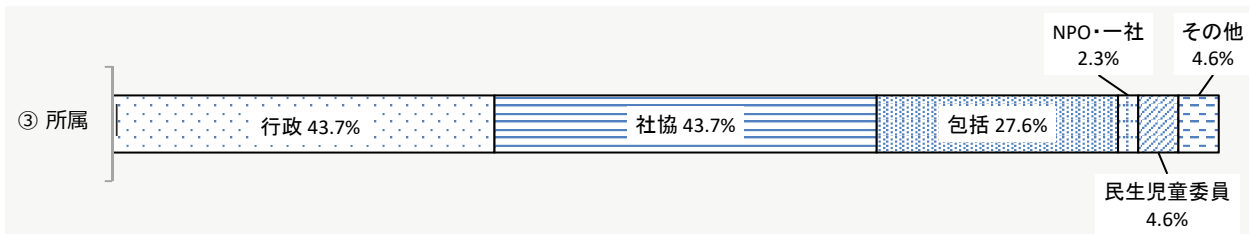
②あなたの年代を教えてください。グループ参加の方はメンバーの年齢構成をチェックしてください（複数選択可）。

67件の回答（総回答数98件）



③あなたの所属を教えてください。グループ参加の方はメンバーの所属構成をチェックしてください（複数選択可）。

67件の回答（総回答数87件）



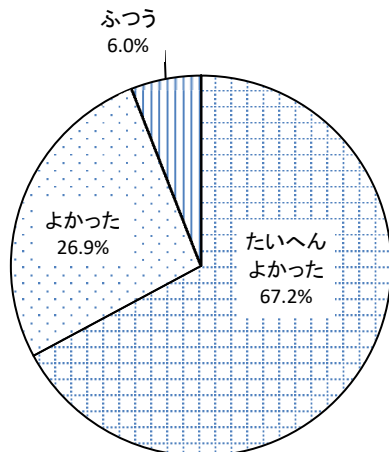
その他回答【4回答（各1件）】

[行政（地区公民館）、包括、社協生活支援員、大学生]、地域住民、介護予防センター（札幌市の委託事業）、葛生地区社会福祉協議会

設問2 本日の研修内容についてご意見をお聞かせください

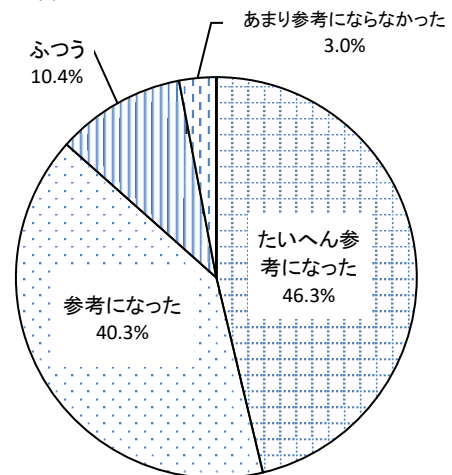
①今回の研修に参加されてよかったですか。

67件の回答



②研修の開催資料は参考になりましたか。

67件の回答



●**研修や資料のなかで参考になったことや役立ったことを教えてください。**
(自由記述／一部抜粋)

- 高齢者への支援というとらえ方から活躍を考えると、今行っているサロン一つにしても何か工夫ができそう。また、持続可能な支援を考えると、高齢者だけではなく世代を超えた交流や活動と聞き、地域の祭りを思いおこした。祭りは担い手がいなくて悩んでいる現状と、この事業も絡んでくるのかなと。ありがとうございました。前向きになる研修発表でした。
- うちの地域と人口規模も同じくらいなので、そのなかでの動きがとても参考になりました。『高齢者支援から高齢者活躍』の視点が、今後の私にとってとても役に立つと思っています！
- 高齢者を支援するという視点から、どうしたら活躍する場がつかれるのかという転換する視点の気づき。また、高齢者にちょっとしたお願いや役割を担うことで、生き生きとした生活へつながるきっかけにもなることがわかった。
- 新しい視点を与えていただき感動しっぱなしでした。持続可能で、とても希望を持てる内容だと感じました。数年後の自分の地域もこのように皆がイキイキ明るく過ごせるようになっていたらいいなと思いました。
- どこも同じで、人と人とのつなげ方だけの違いだと思った。つなげるツールが違うだけなんだと思えました。地域性があるから同じことを真似するだけではうまくいかない。地域にあったやり方を見つけていくことがたいせつ。
- 「まちなか農園」が取り組んでいる農作業をとおした居場所づくりや「ママのHOTステーション」のシニア世代と子育て世代が集まって多世代交流が気兼ねなくできるコミュニティがあるのはとても魅力的だった。工夫一つで今ある活動や地域資源を組み合わせ、いろいろなイベントができるなと参考になった。
- 生活支援体制整備事業における高齢者支援のあり方が大きく変わったような気がします。多世代交流が高齢者支援に必要なこととの根拠となる資料づくりがたいせつだなと思いました。
- 多世代間交流を通じて、地域の福祉力向上につながっていることが理解できた。また SNS を活用して、若い世代との情報交換ができていたので、SNS の使用を検討してみたいと思えた。

●**運営についてのご意見やお気づきの点がございましたら教えてください。**
(自由記述／一部抜粋)

- グループワークへの切り替えも、自動的にスムーズに切り替えられていた。
- 楽しく素晴らしい事例をいつも発信してくださりありがとうございます。日本全国のいろいろな事例を、どうやって集めているのでしょうか。
- グループ発表の際、音声聞き取りにくいグループがいくつかあった。運営側で聞こえにくいなと感じた場合は、相手方にその旨を伝えるなど工夫が必要ではないかと感じました。
- グループ参加の方法だったので、研修のなかで話しあえたことが良い。会議では学習したことや感じていることをなかなか話し合えない。

●**その他のご意見や感想などがございましたらお聞かせください。**
(自由記述／一部抜粋)

- 質疑応答でより具体的なことが聞けるのでとてもいい研修だと思いました。もっと質疑応答の部分が長く持てたらいいとも思いましたので、今後よろしくお願いたします。
- 地域包括支援センターに入職してまだ日が浅く、知らないことや学ばせていただくことがたくさんありました。グループワークでも皆さんの地域への思いを聞くことができて良かったです。
- グループで参加すると、実践報告を聞いたあとの意見交流会が、どうしても身内の話に偏る面がいなめないなと思いました。他市町村の人と話したい場合は、あえて個人参加にするほうが良い部分もあるなと思いました。

フォローアップ意見交換会

日時 2022年12月26日(月) 11:00～11:30

開催方法 Zoomによるオンライン

参加者 **北** 高齢者支援等に携わる専門職有志のグループ(北海道)

介護予防センターの職員、病院勤務のPTなど、さまざまな所属による有志チームで参加

栃 市社会福祉協議会・地区社会福祉協議会(栃木県)

第1層生活支援コーディネーター、地域包括支援センター職員、市社協、地区社協会長、民児協会長と参加

香 市町村(香川県)

町役場、生活支援コーディネーター、地域包括支援センター職員と参加

●研修を受けて、参加者の反応は？

北 私たちのグループでは、介護保険制度の範囲では65歳以上の高齢者を目的としていても、その当事者が当事者を支えても意味はなくて、多世代を交えていかなければ持続性のある支援は成り立たない、ということが共通の意見でした。ただ、それを実現するためには何からスタートすればいいのかかわからず、若年層と高齢者がお互いを遠巻きに見て、実際に混じって何かを活動するという場面がなく、ここをどうつなげばいいのかを考えていかなければいけないね、と話をしました。

栃 高齢者の活躍の場所をまず見つけるということに感銘を受けました。「まちなか農園」の取り組みは、自分たちの地域にも耕作放棄地がたくさんあるので、そうしたところに人が集まるようになるというのでは、という意見が出ました。

香 上土幌町の人たちは、もしかしたら「子育てをみんながやってるまち」ということが誇りになっていくような取り組みを始められているのでは。それが本当の地域づくりで、みんなが活躍できていることがまちの誇り、となることが大事だと思いました。そして、そうした誇りにつながるような活動を確かめながら取り組んでいくことが大事だという話をしました。

●今後について

北 上土幌町の取り組みは非常にのびのびと展開されていて、非常にうらやましくも感じましたが、その地域独特の暗黙のルールや、いろいろな課題などとも戦いながらされておられるのだろうと思います。私たちも、いろいろな地域の話聞きながら自分の地域にどうアウトプットして落としていけるか、前向きに取り組んでいきたいと思っています。

栃 本市は2層の生活支援コーディネーターの配置がなく、社協で雇用した3人の地域福祉推進員がその役割を担っています。その人が地元にも精通しているので、商店に人が集まっていると聞けばそこに行って話をし、集まりの場づくりを話しています。活用できる助成金をお伝えして、集まっているところをサロンにつくり上げるようなコーディネートの役割をしています。

香 活動の会を立ち上げようといっても簡単にいかないところも多く、生活支援コーディネーターが地域にあるものと、高齢者が活躍できる場所をつなぎあわせて、その人が地域の中で元気になっていることを一緒に経験できる機会を積み上げていくことも大事だと思っています。必要な居場所を立ち上げるということと、こうした個人的な元気になっていくエピソードを両輪で、まちの中で経験できるような一歩を踏み出していきたいと思っています。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践

秋田県藤里町

2023年1月17日開催号

全世代の活躍支援 (藤里町社会福祉協議会)



楽しくフキの処理作業中



野焼きの合間にお茶のみ



目次

地域共生社会に向けた、活躍支援事業	2
「支援される人」＝「活躍できる人」へ	4
特産品づくりで活躍	7

《講座のご案内》

2023年1月17日(火) 14:00～16:30

「全世代の活躍支援」

ゲスト……………藤里町社会福祉協議会 会長 菊池 まゆみ
事務局長代理 門田 真

コメンテーター……………一般社団法人釧路社会的企業創造協議会 代表理事 櫛部 武俊

コーディネーター……………全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

ひきこもり者への支援や独自の特産品開発で知られる藤里町では、高齢化率が5割目前となり、「生涯現役のまちづくり」を目標に掲げて、2017年に全世代対象の「プラチナバンク」をスタートさせました。足腰が弱くなっても、誰もが活躍し出番のある地域を目指して、人づくり・仕事づくり・若者支援に取り組んでいます。

お申込み方法は
こちらから

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>



地域共生社会に向けた、活躍支援事業

人口減少社会のトップを走る秋田県藤里町。中山間地の小規模自治体であるこの町で、高齢者や障害のある人、ひきこもり者などが、特産品となった「白神まいたけキッシュ」の製造・販売に携わり、人手不足の畑仕事やお祭りの神輿担ぎ、用水路の泥かきなどに従事して活躍しています。

「高齢化がすすむなか、町民が『生涯、地域の役に立ちたい』と言うならば、それを応援するのが私たちの仕事

です」と熱く語るのは、藤里町社会福祉協議会会長の菊池まゆみさん。生涯現役のまちづくりを掲げ、年齢や障害の有無にかかわらず、誰でも人材登録ができる「プラチナバンク」を2017（平成29）年に立ち上げました。現在、町民の1割を超える約400人が登録し、足腰の弱い人も、認知症状のある人も、多様な活動方法で活躍しています。

「支援する対象」ではなく、「活躍する人材」と捉え、言葉で表現できるようになるまでには、35年にわたる町社協の試行錯誤がありました。

支援が必要な人は、支援する側にもなれる！「藤里方式」

活躍支援の原点は、秋田県下で「一人の不幸も見逃さない」を合言葉に、1980（昭和55）年から取り組まれたネットワーク活動事業です。ご本人の同意を得て、その人の暮らしを支える仲間づくりがすすめ



町民みんなが生涯現役！

られました。当時を振り返り、菊池さんは、「地域の人を支援する側・される側に分類する不都合や、『不幸を見つけ出す運動』に陥る危うさがあった」と話します。老人クラブやボランティア活動への理解も乏しく、『うちのおじいちゃんは毎日、老人クラブで遊んでいる』という認識が一般的で、地域に貢献していることを周知する必要もありました。個々のソーシャルワーカーの力量に左右されるとい課題もあり、組織として取

り組む必要性を感じていたと言います。

事務局長に就任した菊池さんは、2005（平成17）年、地域福祉トータルケア推進事業に着手します。「支援が必要な人は、支援する側にもなれる」という発想のもと、「藤里方式」と名付けて、地域の役に立ちたいという思いに寄り添う支援を、組織として始めます。あわせて、ワンストップの総合相談体制をつくるため、地域包括支援センター、地域活動支援センター、社協のコミュニティソーシャルワーカー（CSW）の3者で一体的に取り組み始めました。すべて社協が運営していたこともあり、報告・連絡・相談を密に図ることで、相談支援をスムーズにすすめられるようになりました。

一方で、個別の相談を地域課題と捉えて地域支援や施策につなげる視点や、地域の社会資源を十分に活用できる人材が必要だと考えるようになりました。

また、事業を通じて地域の声を拾うなかで、所属する場所をもたない若者への支援が急務と感じ始めます。



右から、事務局長代理の門田真さん、会長の菊池まゆみさん、就労継続支援B型事業所管理者の菊地孝子さん

【藤里町の概況】

秋田県の北部にある藤里町は、面積が282.13平方キロメートルと広大で、その9割は山林原野です。世界遺産である白神山地の南側に位置し、白神山地を水源とする藤琴川と粕毛川が町内に流れています。誰でも容易にブナ林・亜高山植物・湿性植物の観察ができ、キャンプ場を含めて、多くの観光客に親しまれています。

【2022年4月1日】

人口	2,989人
世帯数	1,329世帯
高齢化率	48.67%

藤里町社会福祉協議会 〒018-3201 秋田県山本郡藤里町藤琴字三ツ谷脇40 総合福祉センター内
TEL 0185-79-2848

キッシュやうどんのご注文はこちらから⇒ <http://fujisato-shakyo.jp/>

事業内容：

- 活躍支援：プラチナバンク、ボランティア活動、まち自慢クラブ、こみっと（研修センター）、藤里グッドデリ
- 発信・推進：藤里町体験プログラム、食を活かした交流、福祉座談会、でらっとプラン
- 安心・安全：地域包括支援センター・地域活動支援センター、ヘルパー・デイサービス・認知症グループホーム・居宅介護支援事業、生活支援ハウスぶなっち

職員体制：49人

法人運営4人、地域福祉活動推進5人、相談支援・権利擁護8人、介護・生活支援サービス32人

「支援される人」＝「活躍できる人」へ



福祉の拠点「こみっと」

そこで、2010（平成22）年4月、福祉の拠点「こみっと」で活躍支援事業を始めました。ひきこもり者及び長期不就労者、在宅障がい者などの若者を、地域ぐるみで支え、誰もがキャリアアップやキャリアチェンジを目指せる場です。

「こみっと」には、就労訓練にも使える調理室や食事処のほか、地域住民が使える共同事務所、会議室、サークル室などがあり、活動・交流の場としての機能があります。2006～2008年の実態調査で把握した、学校にも職場にも所属していない18～55歳未満の町民113人を訪問して登録を

呼びかけ、こまめに情報提供を行いながら、週1回のレクリエーション活動やパソコン操作の訓練、食事処の調理・接客などで活動し始めました。

また、地域の農家や事業者等から依頼を受けて、こみっとの登録生が必要に応じて職員の支援を受けながら仕事を行い、登録生に工賃を支払う「こみっとバンク」に取り組みます。さらに、藤里の新しい特産品として社協が開発した「白神まいたけキッシュ」も登録生が製造を担い、初年度で450万円の売り上げを記録。2015年には、「讃岐生まれの白神育ち・こみっとうどん」を製品化して、食事処で提供し始めます。

このような活動が、地域づくり・地域福祉の先駆的事例として全国から注目を浴びるようになりました。

誰もが活躍できる風土づくり

こみっとの活動の背景には、「結婚できるくらいの収入がほしい」「人にバカにされない職業に就きたい」という至極まっとうな感情を受け止め、それを実現するお手伝いをするべきだ、という社協の覚悟がありました。「福祉業界の人間は、最低限の暮らしまで引き上げればよいと考えがち。しかし、本人たちは、『福祉のほどこしはらない』と言い、もっと上を目指していることに気づきました」と菊池さんは話します。狭義の「福祉」を越えた藤里町社協の試みは、誰もが活躍できる風土を開拓していきます。

こみっとには、登録生だけでなく、共同事務所や食事処を利用する地域の人も出入りします。誰が職員なのか利用者なのかわからないまま、顔見知りになります。当初「地域の人が怖い」と言っていた登録生が、「あのお婆さんは、おせっかいだけどいい人ですよ」と話すような関係性が育まれます。調理を手伝うシルバーバンクの人も、同じ調理場を使う仲間として登録生と出会い、協力し合う関係を築いています。

そして、「白神まいたけキッシュ」の初年度450万円の売り上げが、町民の意識や偏見を変えていきました。それまでは、「こみっとにお誘いしたい人はいますか？」と地域の人に声をかけると、「家族が隠そ



こみっと内の共同事務所

うとしているのに、暴くような真似をしたくない」「そっとしておきなさい」という意見が多くありました。それが、キッシュの売り上げを境に、彼らは活躍をする場がなかっただけで、本来活躍できる人なんだという考えが実感をもって広がり、「学校にも職場にも所属していないなら、こみっとに行って手伝って来なさいよ」と気軽に声をかける風潮に転換したのです。

こみっとの登録生は次々と卒業し、就職していきます。素晴らしいことですが、こみっとバンクの人手が足りなくなって、受けられない依頼もでてきました。

プラチナバンクで「地域の役に立ちたい」

そして、冒頭に紹介した「プラチナバンク」の立ち上げにつながります。藤里町では2015年度から「生涯現役のまちづくり」を掲げ、人づくり・仕事づくり・若者支援を3本柱に、弱者と呼ばれる人たちが担い手になる地方創生に取り組んでいます。プラチナバンクは人づくり事業に位置付けられます。

実施にあたっては、各地区の老人クラブなどへ説明に回り、「足腰が弱くなったという人には、手で参加できる仕事を、さらに口でできる仕事を社協が探してきます」と口説いたそうです。

プラチナバンクは、収入、仕事時間、やる気、経験などの項目をもとに登録区分があり、無償、有償、ポイント制とさまざまな活動形態があります。社協の就労的活動支援コーディネーター3人と、有志の住民リーダー（民生児童委員や社協理事など）10人を中心に運営されています。

実際に、100歳近い人が「私でも役立つことがあるの」と喜んで登録。住民同士で得意分野の講師役となり交流する「まち自慢クラブ」で、口での参加として、ダム湖に沈んだ出身集落について講話しました。当日は、社協の送迎付きで、風呂敷3つ分の資料を持参。体調を崩して入院した際には、「また私に仕事を頼んでくれる？」と退院へのモチベーションにするほど、生きがいとなっています。

プラチナバンク事業の展開

年度	登録会員数 (人)	活動件数 (件)	活動延人数 (人)	活動収入金額 (円)
2015	(121)	(307)	(3,872)	(11,235,690)
2016	301	346	3,773	11,159,621
2017	342	442	7,024	24,529,621
2018	362	411	6,107	26,267,362
2019	385	520	7,006	41,650,187
2020	390	543	10,507	38,700,870



こみっとうどん 季節のセット (税込 500 円)



おいしそうな山菜料理

現在、プラチナバンクで活躍している人は100人ほど。就労的活動支援コーディネーターは、就職をする支援ではなく、住民の「地域のお役に立ちたい」という思いを受け止めて、応える役割があると考えていますが、登録者数に対して仕事づくりやマッチングが追いついておらず、試行錯誤が続いています。

プラチナバンク働き方登録票

分野	番号	働くかたち		働き方
A 収入	4	8万以上	仕事優先 なんでもやります型	定額の収入を得たい。
	3	3~8万	自分の希望優先 職人型	仕事を選んで、少額でも収入を得たい。
	2	分からない	余暇優先型	金額にはこだわらない。できる時に仕事をしたい
	1	ポイント	支援付	ポイントで受取る。
B 仕事時間	4	6時間以上	仕事優先 なんでもやります型	受けた仕事の時間働きます。
	3	3時間未満	自分の希望優先 職人型	選んだ仕事の時間働きます。
	2	1時間	余暇優先型	短時間なら働きます。
	1	不定	支援付	支援付で仕事します
C やる気	4	なんでもひとりで できます	仕事優先 なんでもやります型	いろいろな仕事に全力でチャレンジします
	3	得意分野はひとりで できます	自分の希望優先 職人型	登録した職種なら、なんでもやります
	2	誰かと一緒ならで きます	余暇優先型	誰かと一緒に仕事をします
	1	支援があればでき ます	支援付	支援をうけながら仕事をします
D 経験	4	仕事の経験があり ます	仕事優先 なんでもやります型	仕事の経験を土台になんでも仕事をします
	3	得意な仕事があり ます	自分の希望優先 職人型	仕事の経験を活かして仕事ができます
	2	仕事はしたことが あります	余暇優先型	仕事はしたことがあります
	1	仕事の経験があり ません	支援付	仕事の経験はありません

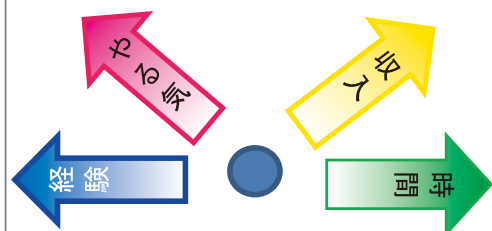
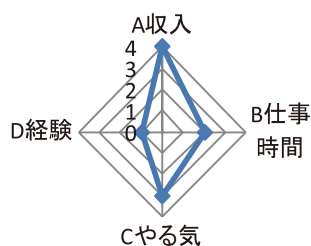
※団体登録とは：老人クラブ、婦人会、PTA、スポーツ少年団、むじん、デイサービス等で登録し、作業しポイントを取得します。

※仕事にポイントがついています。ポイントは〇〇券と引き換えできます。例。入浴券、こみっとお食事券等

自分のスタイル

A収入	4
B仕事時間	2
Cやる気	3
D経験	1
合計	10

しごとのスタイル



特産品づくりで活躍



山の作業はお手のもの

リエーション活動には目もくれず作業に没頭し、きちんと後始末をしてデイサービスを帰られたそうです。「何もできない人はいない」ということを、日々、職員のほうが気づかされています、と菊池さんは話します。

根っこビジネスや山菜の製品化の拠点は、まち自慢クラブと同じ建物にあり、まち自慢クラブに参加したついでに、加工作業も手伝えるような工夫をしています。衰退する地区老人クラブを応援するため、活動の一環としてまち自慢クラブに参加したり、加工の仕事をする仕組みもつくりました。

事務局長代理の門田真さんは、「一緒に山に入り、山菜採りやワラビ掘りをすると、住民の皆さんの知識と経験に圧倒されます。自分の福祉資格は役に立たず、指導を受ける側です。みんな弱い部分を補えば活躍できる人なのだ、と腑に落ちて、いまでは菊池会長だけでなく、プラチナバンクのリーダー10人が僕の上司です」と目を輝かせます。山の作業の合間にするお茶飲みは、みんなのお楽しみ。「何も言わなくても、勝手に用意されています」（門田さん）。

弱者ではなく、活躍する人材という考え方のベースには、「生活する力への絶対的な信頼感」を大事にする社協の思いがあります。

生活に根差した取り組み

社協では、町外の若者が藤里町の暮らしを体験するプログラムを用意しています。町内の高齢者からフキの皮むきを教わり、一緒に山に入って山菜や根っこ掘りを体験します。山の斜面を自在に動く高齢者に、若者はついていくのが精一杯になりながらも、「つくら

社協では、プラチナバンクとともに、町民の活躍の場づくりとして、特産品づくりにも取り組んでいます。「根っこビジネス」はその一つ。徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」に着想を得て、葛やワラビの根っこを掘り出し、原料粉やわらび餅などを生産しています。また、地元の山菜を活用した伝統の味シリーズ「藤里グットデリ」を商品化しました。

社協のデイサービスを利用していた高齢者のみなさんに、山で採ったフキを持ち込んで皮むきをお願いしたら、レク



力を合わせて作業中



気持ちは乙女



山道も慣れた足取りで

実現できないことのほうが多いです。そのたびに、あなたの声は町に届けるからねと伝えてきました。あきらめないことが大事」（菊池さん）。事業を個別にこなすのではなく、「生活に根差した取り組み」として面で展開する姿勢が、藤里町の地域共生社会づくりの根底にあります。

れた田舎体験」ではないリアルを肌で感じます。「輪になって山菜の皮むきをするのが楽しかった」「高齢者が格好良かった」という若者たちの感想が、生涯現役・活躍の醍醐味を伝えます。

コロナ下での大きな影響は、開発した商品の売上げが落ちたこと。それまでは、年間50～60組の視察を受け入れ、お土産に商品を買ってくださっていたものが途絶えました。「完売で在庫がありません！」という現場のうれしい悲鳴を聞けなくなり、地道に営業をされています。

また、住民の山での活動はできるだけ止めないように支援し、「合間のお茶飲みを短時間にするなど縮小しました」と門田さんは話します。

事業を通じて地域の声を拾い、次なる必要な手立てを考え、時間がかかっても形にしてきた藤里町社協。「相談を受けても、すぐに



みんなでフキの皮むき作業

孤立を防ぐ「地域づくり」実践 藤里町社会福祉協議会 2023年1月17日開催号

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」

発行元：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1階

TEL 022-727-8731 FAX 022-727-8737

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修「全世代の活躍支援」

開催日 2023年1月17日(火) 14:00～16:30

開催方法 Zoomによるオンライン研修

申込者数 個人参加 51人、グループ参加 39団体

登壇者

ゲスト

藤里町社会福祉協議会 会長 菊池 まゆみ

藤里町社会福祉協議会 事務局長代理 門田 真

コメンテーター

一般社団法人釧路社会的企業創造協議会 代表理事 櫛部 武俊

コーディネーター

全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

プログラム

14:00～14:03	開会・趣旨説明
14:03～14:35	実践発表
14:35～14:55	菊池氏、門田氏、櫛部氏、池田氏によるディスカッション
14:55～15:05	休憩
15:05～15:35	参加者によるグループワーク
15:35～15:55	グループ発表
15:55～16:15	発表へのコメント
16:15～16:30	まとめ
16:30	閉会

委員からのコメント

櫛部武俊委員（一般社団法人釧路社会的企業創造協議会 代表理事／北海道）

2022年12月の社会保障審議会で、「生活困窮者自立支援制度および生活保護制度の見直しに関するこれまでの議論の整理」の中間とりまとめがなされました。いままで言われてきた「就労によって保護をやめることが自立の助長」と言われていた自立の概念が、「経済的自立」だけでなく、生活保護を受けながらも社会生活や日常生活の自立がある、という議論になっています。つまり、経済的自立だけではなく、社会のなかで活躍することが大事ということで、藤里町の実践はまさにそれを体現したものです。

池田昌弘委員（NPO法人全国コミュニティライフサポートセンター 理事長／宮城県）

門田さんが、「住民が私の上司」と言われるように、徹底して住民の皆さんが楽しく生きる、活躍できるようなことを支えておられます。それが結果として住民の皆さんの生きる力になっていたり、つながる力になっています。

ディスカッション

榑部武俊 私は、その人の自尊心や自己肯定感、笑顔などをたいせつにする取り組みは何よりもたいせつだと考えて、釧路市で生活保護受給世帯の自立支援を続けています。2011年に藤里町に見学に行った際、菊池会長は「ひきこもり支援にスポットがあたっているが、そうではない」と言っていたことが印象的でした。居場所もたいせつですが、特産品のまいたけキツシュの完成度が高いことから、藤里町ではそこにある作業や労働という機能の重要性、つまり、地域づくりや仕事おこしを重視されていたと感じました。

日本の就労支援の多くは、研修や訓練型が重視され、一般就労につないでいくか、働けないならば居場所でお茶を飲む、というかたちで、就労か居場所かという二者択一の発想です。これでは、働きづらさや生きづらさを抱えている人にとってはなかなか厳しいと考えます。地域で仕事のネタを興して、その人だけでなく地域の人と一緒に取り組む活躍支援のたいせつさに改めて気づかされました。

門田真 コロナの間も、私たちはなるべく活動は止めないように、皆さんが参加できる場はなるべくなくさないように頑張ってきてきました。プラチナバンクでは、作業の合間に「一服」という自由な時間があり、皆さんそれを楽しみにされています。コロナで飲食や会食の制限が起き、それだけが唯一、縮小せざるを得ないところでしたが、私たちの目の届かないところでこっそりやっているところもあったようです。

榑部 一般的には、ひきこもりの人の行く場所をつくり、製品をつくって、収入に結びつくところで終結となりますが、藤里町ではここから本題。プラチナバンク、全世代の活躍支援へと展開していきます。その要素はいったいなんでしょうか。

菊池まゆみ 藤里町には、ひきこもりのこみつとバンクの人と、高齢者のシルバーバンクのシルバーさんがおられます。たとえば、地域から「雪かきしてほしい」という要望には、経験のあるシルバーさんと力のあるひきこもり者との組み合わせで派遣することで、うまくまわっていきました。

ひきこもっていた方々が社会復帰を果たせるようになると、一般の会社への就職を選択される人が多いのですが、そうすると、ずっとひきこもっていた人に新たに仕事を覚えていってもらうこととなります。キツシュづくりなどではどうしても技術差が生じてしまいます。その穴を埋めてくれたのがシルバーバンクでした。最初から協力し合っていたので、「シルバーバンク」「こみつとバンク」と分けるほうが不都合だったので、全世代で対応できる仕組みにしました。高齢者が役割を持って生き生きと暮らし、ときには若い人たちにも指導が入ります。どちらが支援する人、される人かわからないけれど、そのほうがいいんだと思っています。

池田昌弘 福祉の世界で当たり前なことが、地域では当たり前ではなかったのかもしれない、もちろんその逆もあります。そうしたことに気づくこともたいせつですね。

参加者によるグループワーク発表（一部抜粋）

◎

作業場などの居場所づくりや、活躍できる場をつくりたい、という意見が出た。「社協がしっかりしているね」という意見をグループ参加者からいただいた。今回の研修会を主催した社協として、頑張っていかなければならないと思った。（市、市社協、地域包括支援センター、住民によるグループ参加）

◎

若者と高齢者の相性がいいというキーワードが心に残った。高齢者の方たちが培ったものを若者に伝え、若者が得意なものを高齢者に伝えるといった支える側と支えられる側どちらにもなれるという活躍の場ができるといいと思った。（市町村／個人参加）

◎

相談があったときに「社会資源につなぐ」という考えはあったが、「仕事をつくる」という発想がなかった。グループ内で「全世代の相談を受ける際、包括職員はさまざまな組織等とつながることが重要だと思うが、情報をどこで得ればよいか分からない」という感想に対し、「中間支援組織や社協、行政などが情報を共有できるネットワークが重要である」という意見があった。（町社協／個人参加）

◎

事例報告を聞いて、わが村ではどのようなことができるかを話し合った。藤里町での特産品を活かした製品づくりについて、どのように取り組んでいたかをもっと聞きたい。わが村では特産品も少なく、就労先も少ないが、そうしたなかでもどのようにつなげていくかが今後の課題だという話をした。（村、村社協、地域支え合い推進員によるグループ参加）

◎

「困ったことは何ですか？」と聞くと、困ったこと以外が話せなくなってしまう。活躍支援を行う場合は別の声かけや関わりが必要だと考えさせられました。個別支援からこみっとにつなげる際、法人内や関係機関でどのように連携していたのか気になったという意見がありました。また、自分たちの地域にある付加価値のあるものとは何なのか考えさせられました。（町社協によるグループ参加）

◎

自治体の規模としては大きいところで山があるわけではないが、私たちの地域でもまだまだできることがあるのではないかと話し合いました。私たちは、町会を1か所ずつまわって、住民の取り組みを聞くことを続けています。住民のなかには非常に力のある方もいるし、住民相互のつながりもまだまだあります。私たちができることとして、ネットワークを把握してつなげていくこと、見つけていくことと同時に、ネットワークに入っていない孤立している人と直接つながっていくことも大事だと話し合いました。すべて場を整えて居場所をつくったりサービスをつくってそこに当てはめようとする視点になっているのではないかと、という反省もしました。（地域包括支援センター、ランチ、地域福祉コーディネーターによるグループ参加）

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修『全世代の活躍支援』アンケート結果

(2023年1月17日)

設問1 あなたのことについてお尋ねします。

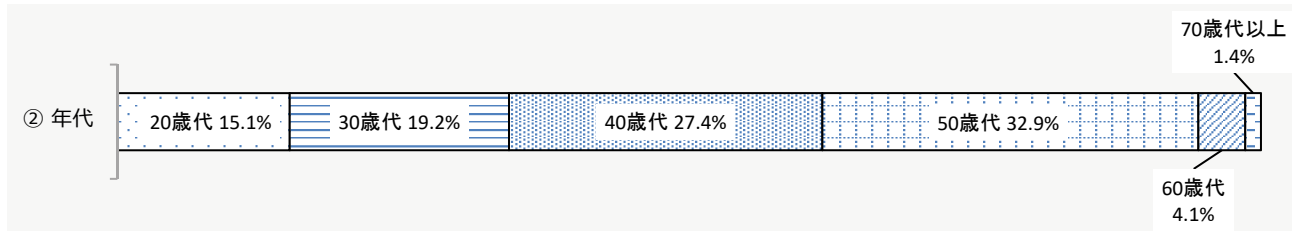
①お住まいの都道府県を教えてください

48件の回答

都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数
北海道	4	福島県	2	東京都	1	岐阜県	2	京都府	2	広島県	1
岩手県	1	栃木県	1	新潟県	1	静岡県	1	大阪府	2	福岡県	1
宮城県	2	群馬県	1	石川県	1	愛知県	1	兵庫県	10	熊本県	2
秋田県	2	千葉県	3	長野県	2	三重県	1	和歌山県	2	沖縄県	2

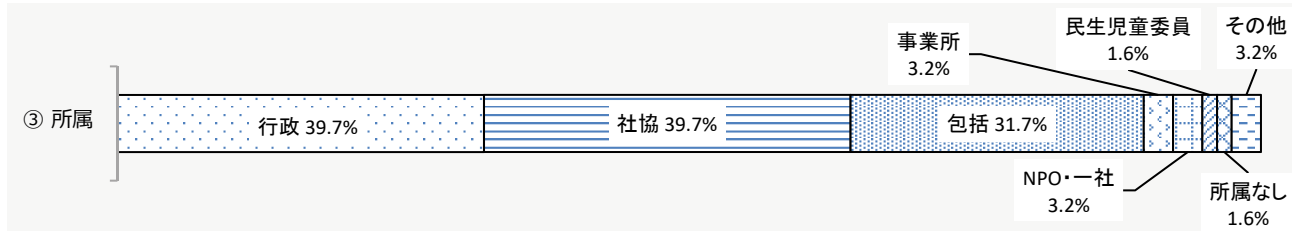
②あなたの年代を教えてください。グループ参加の方はメンバーの年齢構成をチェックしてください（複数選択可）。

48件の回答（総回答数73件）



③あなたの所属を教えてください。グループ参加の方はメンバーの所属構成をチェックしてください（複数選択可）。

48件の回答（総回答数65件）



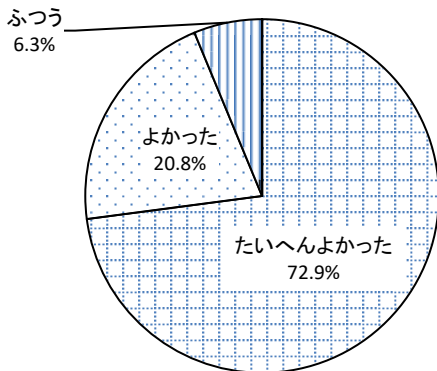
その他回答【2回答（各1件）】

[介護予防センター、居宅、包括、第2層と参加メンバーは所属が違っている]、フリーランス

設問2 本日の研修内容についてご意見をお聞かせください

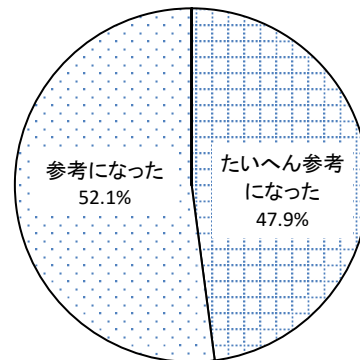
①今回の研修に参加されてよかったですか。

48件の回答



②研修の開催資料は参考になりましたか。

48件の回答



●研修や資料のなかで参考になったことや役立ったことを教えてください。 (自由記述／一部抜粋)

- 「困っていることはないか？」ではなく、「こうすることで助けてもらえないか」という声かけがとても大事だと実感しました。「ひきこもり」という言葉に抵抗を抱く人も多いと思うので、カテゴリーを外して、同じ目線でのかわり方が重要だと思いました。
- 人口も高齢化率も似た町の事例を聞くことができ良かった。高齢者が多い＝元気のない町ではない。アイに通っている＝なにもできない人ではない。先入観を取っ払うと、さまざまな可能性が見えてくると感じた。
- プラチナバンクやひきこもり支援、また活躍支援という視点など、研修全体をとおしてたいへん学びがありました。「困ったことはありますか？」と聞いたら困ったことしか言えないということについて、活躍支援を行う場合はどのような声かけを行ったらよいかなど、支援を行う姿勢についても考えさせられました。
- 藤里町の実践については、迷いながら、やってみながら形を変えていくことをおそれずに進んでいく姿勢（覚悟）がすばらしく、理解はできますが、実際に自分の職場でやることはとても骨の折れることだと感じました。進んでいくためにあきらめず、粘り強くがんばる気持ちに触れることができ、小さなことからでも自分の職場でがんばりたいと思いました。
- 支援する側、される側という視点を変えるということをお聞きし、目が覚める思いでした。また、「ひきこもり」ではなく、「どこにも所属していない人」を探すということで、いろいろなところにチラシをまいたことで情報が集まったということにも、そういう方法があったのか！ と思いました。「できない！無理！」ではなく、何かできるかもしれないという思いで仕事に励むという姿勢に背中を押された思いがします。
- 専門職の見方として、対象者が助けの必要な人であると当たり前のように定義づけしてしまっていることに気づかされました。
- 「個別ケアはできているが、地域課題に結びついていない」まさにそのとおりと感じています。福祉でまちづくり、地域トータルケアを推進されていること、町の資源をどのように結びつけていくか、考えさせられました。

●運営についてのご意見やお気づきの点がございましたら教えてください。 (自由記述／一部抜粋)

- 立派な話を聞いて終わりではなく、グループトークを取り入れ、返していただくことで、具体的な調査や活動など流れのイメージがつかめることにつながる研修なので、嬉しいです。
- 運営はいつも通りで安定していて、池田理事長の深掘りの仕方も、聞きたいことが聞けて満足しています。
- 多くの方が参加できるオンライン研修を企画くださり、ありがとうございます。
- グループワーク発表時間が長いように感じます。講師の講義や取り組み内容をもう少し詳しく聞きたいです。
- いろいろな地域の人たちとオンラインでつながり、すばらしい話を聞かせていただくことができました。また来年もあるようであれば、ほかの職員にも受けてもらうように勧めたいと思います。

●その他のご意見や感想などがございましたらお聞かせください。(自由記述／一部抜粋)

- 発表者の力強い言葉に、社協職員としての活力をもらいました。ありがとうございました。
- 菊池さんのお話は心に染みる内容であふれてました。ありがとうございました。できないこともあるが「あなたの声は必ず届けるから」胸に刻んでがんばります。
- 全世代対象に活躍支援が行われていることに感動しました。いいことだけでなく、苦労したお話も聞けて参考になりました。生きがいつくりや、活躍の場をつくることのたいせつさを再認識したとともに、根本である「生きてるなあ」と感じて生活できるようにお手伝いしたいと思いました。
- 今回のグループワークは行政職員が多いように感じました。行政職員は行政職員同士で意見交換をされたほうが実りのある内容になったのではないかと感じました。

フォローアップ意見交換会

日時 2023年1月19日(木) 16:00～16:30

開催方法 Zoomによるオンライン

参加者 **長** 市町村社会福祉協議会(長野県)
第2層生活支援コーディネーターで参加
和 市社会福祉協議会(和歌山県)
市社協、住民と参加

●研修を受けて、参加者の反応は？

長 藤里町社協の「全世代型の活躍支援」について、そこに至るまでの努力の積み重ねに感服しました。今回は生活支援コーディネーターのメンバーで参加したこともあり、生活支援体制整備事業の枠組みのなかで話し合いが進められました。介護保険財源の事業ですので、本市では高齢者のみを対象としているため、ひきこもりの人や子育て中の人を対象にした活動には理解を得られないところが苦しいところです。また、農業についても対象ではないと言われており、打開することが難しい状況です。

ですが、次年度より重層的支援体制整備事業に取り組むこともあり、連携した横のつながりのなかで新しいことができないか、期待をしています。

和 以前に藤里町社協の取り組みを学ぶ機会があり、研修を楽しみにしていました。藤里町は、入口から出口まで支援を積み重ねているのは、住民の皆さんと対話を重ねているからだと思いました。みんなが「やりたい」と思えるような自然な言葉かけや気配り、心配りも多く、地域を盛りあげていこうという人はそうしたタイプが多いのかもしれませんが。

反面、組織として取り組まれていくには、計画、予算、制度やほかの仕事とのバランスなどさまざまなことがあるなかで実施するのは、そのタイミングを見計らうという意識を持ちながらおられたのではないかと思います。

市内の第2層協議体自体も多くはなく、それぞれのメンバーもまだ少ないです。協議体の横のつながりをつくれるように地域組織を増やしていきたいと思っています。

●今後について

長 本市での生活支援コーディネーターの仕事は、①民生委員や本人から直接くる相談・困りごとを、資源につなぐ、②つどいの場を支援、③地区に必要なつどいの場を立ち上げる、という三本柱です。全地区に市の出先として「地域づくりセンター」と「福祉ひろば」があり、生活支援コーディネーターの担当地区とも重なっています。各地区で民生委員・児童委員や保健師と協働しながら、地区ごとに連携をはかれる方法を模索しています。

私は、40年経つ団地エリアを担当しており、そこには65～75歳の高齢者が多く住んでいます。藤里町社協のプラチナバンクを目標として、まずは住民の皆さんの能力や趣味を活かす方法を考えていきたいと思っています。

和 本市では、第1層(1人)と第2層(3人)の生活支援コーディネーターを市社協が受託しています。住民の皆さんに熱心な方が多く、学ばれたことを私たちが教えてもらうこともしばしばです。

同じお話を聞いても、とらえ方は人それぞれで、それがいいのだと思っています。そのとらえ方が同じときもあれば、違うときもありますが、それを話し合うことがとても大事で、今回の研修でもワークの時間でさらに深め合うことができました。

住民有志でサービスを開発することは必要ですし、スピーディーな課題解決につながりますが、その前に住民がつながらなければ機能しないということが共通認識です。研修をとおしてつながり方を学び、情熱をもらっています。つながり方は、地域地域でさまざまです。地域にあるつながりに着目しながら進めて行ければと思っています。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践

福岡県久留米市

2023年1月20日開催号

若い世代のつながりづくり (NPO法人久留米10万人女子会)



水天宮にてトークン&ウォーキングに参加の皆さん

コミュニティセンターでのラボ会



目次

久留米 10 万人女子会が目指すこと	2
自分たちの地域暮らしの研究	4
人と出会い、身近な地域の魅力を再発見	6
それぞれの物語	8

《講座のご案内》

2023年1月20日(金) 14:00 ~ 16:30

「若い世代のつながりづくり」

ゲスト……NPO 法人久留米 10 万人女子会 代表理事 國 武 ゆかり
コメンテーター……NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長 池 谷 啓 介
コーディネーター……宝塚市社会福祉協議会 地域支援部長 兼 企画経営部長 山 本 信 也

久留米市で暮らす成人女性 13 万人のうち、10 万人が 10 年後につながり合えば、自分の望む地域暮らしが実現するのではないかと考えた 30 ~ 40 歳代が中心となり、2018 年発足。市内 46 小学校区ごとに月 1 回、20 ~ 80 歳代が交流。若い世代が「わくわくドキドキ」する企画で地域デビューにつなげ、顔の見える関係づくり、支え合いの循環を目指しています。

お申込み方法は
こちらから ➡

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>



久留米 10 万人女子会が目指すこと

福岡県南西部に位置する久留米市は、肥沃な土地に恵まれて全国的にも早い時期より稲作が始まりました。さらに筑後国府が設置され、北部九州の行政・交通の要衝となりました。江戸時代後期に 13 歳の少女が考案した久留米絁によって、木綿絁産地として発展してきました。産業と交通が発達し、紡績や足袋会社が設立され、第 1 次世界大戦後の恐慌による慢性的不況下でも、綿糸関係工業が中核を成し、女性雇用が増大しています。戦後、地下足袋やゴム靴の海外輸出のほか、プリズトンタイヤ株式会社が創立され、高度成長期にはゴム産業が飛躍的な発展をみせていきます。昭和 40 年代前半には、都市基盤の整備が進み、ニュータウンの建設などが推進されています。

【2022年12月1日】

人口 302,523人

世帯数 140,304世帯

高齢化率 27.8%

年少人口率 13.7%

特定非営利活動法人久留米10万人女子会 〒830-0037 福岡県久留米市諏訪野町1692番地59
URL <https://100000kurume.localinfo.jp/>

100 人女子会を開きたい！

NPO 法人久留米 10 万人女子会は、10 年後の久留米市で 10 万人の女性がつながる社会の実現を目指して、「わたしのことはわたしたちのこと」を合言葉に活動をしています。

代表理事の國武ゆかりさんは、10 万人女子会の設立から中心メンバーの一人として活動をしてきました。「市の協働推進課が主催する勉強会で聞いた他自治体の事例に、『これだ！』と思ったんです」と振り返ります。その勉強会で招かれたのは、京都市未来まちづくり 100 人委員会（2015 年度終了）。市民参加によって、まちづくり全体に関するテーマを話し合う委員会で、「まちの人たちと、みんなで自分たちのこと、何かやりたいこと、まちにとってやりたいことを考える機会をつくってみたい。自分 1 人だけでは難しくても、誰かと一緒ならできるかもしれない」と考えたと言います。

おりしも、2016 年 7 月に、久留米市の中心部にシティプラザという公共施設がオープンすることとなり、市民向けに広く利用を呼びかけていました。そこで、國武さんたちは「100 人女子会をしたい！」と手を挙げることとなります。

100 人から 1,000 人、そして 10 万人女子会へ

2016 年から始まった久留米 100 人女子会では、久留米市の 46 校区から 2 人ずつを公募。集まった女性たちは、「わたしにできること×《マチ》≒わたしの夢」方程式ワークショップを実施しました。「100 人の女性と一緒に、自分たちのまちがどんなまちになったらいいかな、どんなことしたいかなということを考えました。そのなかで、自分たちができることに、何をかけあわせたら夢に近づくかなということを考えた、かけ算ワークショップです」と國武さんは振り返ります。すると、参加者のうちの 8 割が「人とのつながりや人との出会いがあれば夢に近づくし、もしかしたら夢がかなうかもしれない」と答えたのです。

それならば、人とのつながりや出会いの場をつくろうと、2017 年には 100 人女子会を改め、たくさんの人の出会いとつながりの場となることを願い、久留米 1000 人女子会を開催することになりました。女

子会はすべて実行委員形式で行い、参加した人のなかから「やってみたい」と思った人たちと一緒に運営をしたりしながら、規模を大きくしてきました。

2018年にも1000人女子会を開催し、計3回の女子会で多くの人と人の出会いが生まれました。そのなかで、「この人に会えてよかった」「一緒に新しい仕事をしましょう」「学生時代にやっていたフットサルを子どもと一緒にできるようにになった」など、たくさんの声が寄せられるようになりました。

ですが、そんな活動のなかで、しだいに「違和感を覚えるようになってきた」と言います。規模が大きくなるにつれ、注目されるのは「何人が集まったのか」「どのくらいの集客ができたのか」という数であることや、そもそも人とのつながりや出会いの場をつくりたいという思いで始めた女子会が、イベントという位置づけになってしまっていることに気づいたのです。「このまま女子会を続けていくと、人を集めることを目的としたイベント屋になってしまう。もっと自分たちの足元にあるつながりや、日常のなかでつながろうと思ってもつながれていないということに丁寧に目を向けていきたい」という思いを実行委員と再確認しました。

そして、自分たちが暮らしていくということに必要なつながりを考えた結果、「久留米の人口が約30万人、そのうちの18歳以上の女性は約13万人。10年後に10万人の女性たちが、たどればたどりつくようなつながりをつくりたい。そんな豊かなつながり願って、久留米10万人女子会が立ち上がりました。

特定非営利活動法人

久留米10万人女子会

NPO Kurume a hundred thousand people

おしゃべりラボ会

月に1回自分たちの住むエリアでおしゃべり会(以後ラボ会という)を実施。2021.12.25現在21校区9か所で実施。日常会話を楽しみ、お互いの日常を知る事で、いざという時に声を掛け合い、助け合える関係をつくっていく。身近な場所でのつながりを育む場。





↑子供は宿題&大人はおしゃべり後半はお楽しみゲームラボ会



↑水害に備えて、校区内の危険箇所を見回る、お散歩ラボ会



↑キッズスペースがある地元店でランチラボ会



↑ラボ会メンバーさんが親子で楽しめるビーズづくり体験会を開催

自分や、お休み、長続きできず...7歳子で楽しめず何やってもない

コロナの予備軍のアレコレ

最近、毎年のように多量な雨が心配。状況把握できず辛い。

子どもで遊んでくれていいし、何処にも行っていない...

転勤で久留米へ、近所に友達が少ない

子供が学校に行かなくて買い出し...できずやア

おしゃべりラボ会

コロナでも繋がりをとどさないように工夫して、オンラインも取り入れている。高齢者には使い方を教えて70代の人も参加できた。私たちの手法としては、話す内容は決めないで参加者の自覚性を大切にしている。そうすることで、本当に必要な地域課題を知ることが出来る。

自分の近くで買い物したい

高齢の親と、子育てを両方でも生活している、買い物はいいのが、大抵、近くに店がなかったりいる

身近な場所に集まる場所が欲しい

地域に買い物する場所が少ないもってか高がまったくない

親が最近、介護が必要もって来た

高齢者をもう数回子供分たまででできずにいなくなってしまう。もって知っててもうできず良い

車を壊していきと実店舗には遠距離には行けないので、キャンプゼグカーを購入した

ラボ会では、自主企業で参加費を徴収したり、地元企業さんに協力してもらったりと、自分たちで運営・継続していく事に取り組んでいる。

↑ラボ会の様子

↑リアル参加とオンライン参加で参加者の状況によって柔軟に対応

↑コロナ禍ではオンラインラボ会

↑地元企業さんによるプチ講座ラボ会

CONTINUE

地域暮らし研究

ラボ会の中で出来た「こんなのがあったらいいね」を、楽しくみんなが研究するイメージで取り組む事業。地域課題の解決のきっかけを作る。

・地域暮らし研究(おしゃべり移動販売)



近所はスーパーもなく、買い物に困っている人たちの住む地域の一角で、おしゃべりの場を開き、食べたいもの、あったら助かる食材などのニーズを把握し一緒に販売する。

自分たちの地域暮らしの研究

自分たちの暮らしを考えるラボ会がスタート

10万人女子会のスタートにあたり、「自分たちが暮らしていくなかで必要なことは何かを実行委員のなかで何度も話し合いました」と國武さん。そこで、10万人女子会の1年目は、「自分たちの地域とは」「地域とはそもそもなんだろう」というテーマで、校区ごとのおしゃべりの会「ラボ会」を立ち上げました。

2年目からは、テーマを決めずに、場所に集まった人が何を話してもいい、その場で出たテーマや、話題提供のあったことに対してみんなでおしゃべりする会になっていきました。しゃべりたくないけれど誰かと会いたい、誰かと一緒にいたい、1人で過ごすのがちょっと寂しい人が誰かと一緒にいられる、そんな場になっていきました。

「女子会」と銘打っていますが、参加資格は女性には限っていません。男性や、性別について話したくないという人も参加しています。自身の性別への違和感をカミングアウトする人もいれば、言いたくない人もいます。また、校区ごとにラボ会があっても、必ずしも自分の住む校区でなければ参加できないというわけではなく、「知り合いがいないほうが居心地がいい」という人は、別の校区のラボ会に参加しています。

参加にあたっては、予約の必要もなく、出席も取らず、「行きたい」と思った人がふらりと来ることをたいせつにしています。だから、始まってみたら2人だけしかいなかったというときもあれば、コロナ下で密を避けるようにと言われているのに10人くらい集まってしまって、急遽屋外で開催となったこともあるといいます。

いろいろなラボ会のかたち

現在、久留米市内の21校区で開催されているラボ会。そのかたちはさまざまで、開催場所や形態は、校区それぞれの特徴があります。

たとえば、コミュニティセンターで開催している校区では、毎回誰かがお菓子やお茶を持参してきておしゃべりを楽しんでいます。

別の校区では、おもに子どもの長期休みのときに開催するラボ会があります。長期休みのときは、子どもたちが集まり、「宿題の丸つけをしよう！」とテーマを決めて開催しています。子どもたちも、「一人で丸つけするのはたいへんだけど、誰かとおしゃべりしながらならできるよね」と話しているとのこと。ラボ会の日までに宿題を終わらせて集まろう、という子どもたちの目標にもなっていますが、終わっていない子どもはラボ会に持参して宿題に取りかか



コミュニティセンターでのラボ会



夏休みのラボ会



毎回誰かがお菓子やお茶を持参

ることもあるようです。

さらに別の校区では、公文教室を借りて、教室が休みの日や、子どもたちが帰ったあとの夜、20時ごろから開催をしています。こちらも毎回誰かがお菓子やお茶を持参しますが、そのほかに毎回100円貯金を実施しています。2年がたち、貯金箱を開封したところ、まとまった金額になっていたとのことで、そのお金で忘年会を開催しています。

コロナ下では、オンラインのラボ会を開催する校区もありました。オンラインのメリットを生かし、家族介護中の人や、自宅を離れることが難しい人、忙しくて参加できない人ともつながりが続きました。オンラインもいいけれどリアルでも会いたいと、自宅を離れることが難しい人が、「我が家の暖炉を囲んでおしゃべりしませんか？」と呼びかけ、久しぶりのリアルラボ会を楽しんだひとときもありました。

「子ども、高齢者など、分野を特化していない分、10万人女子会が何をしている団体かよくわからない、と言われることもあります。ですが、暮らしを考えると分野はなく、いろいろな人が混じり合っています。そこからつながっていくことや、今まで地域に無関心だった人たちが自分たちの住むまちに愛着を持つことが、結局は自分たちの家族だけじゃなくて誰かを思う気持ち、思いを馳せることにつながるんだと思っています」と國武さんは話します。

地域暮らし研究で夢をかなえる

ラボ会で出た、「地域でこんなことをやってみたい」「こんなことで困っている」「こんなときはどうしたらいいんだろう？」というつぶやき。これを聞き漏らさず、そこから掘り下げ、自分たちでできることはどんなことだろう、と考えることを、10万人女子会では「地域暮らし研究」という事業として取り組んでいます。

國武さんは、「10万女子会の運営メンバーが何かしてあげる、ということではなく、主役はラボ会に参加の皆さん。皆さんが『こんなことやりたい』ということ、運営メンバーがサポート。たとえば、『場所を借りたい』『どうしたらできるだろうか?』とそれぞれが把握している情報をもとに関係者に相談をするような役割です」と話します。

そうして企画された地域暮らし研究は、テーマも分野もさまざまです。若年性認知症について学ぶ講習会であったり、バスツアーであったり、婚活イベントであったり、移動販売であったり。

地域暮らし研究の参加者はラボ会の参加者に限定せず、広く募っています。「こうしたイベントをとおして、10万人女子会を知ってくれた人同士がゆるやかに繋がったり、いつかラボ会に行ってみようかな、と思ってもらえれば」と國武さん。イベントから何人がラボ会につながったか、ではなく、地域にはつながれる場があるんだということを、たとえ1年後でもふと思い出してくれたら、と考えています。



暖炉を囲んで

人と出会い、身近な地域の魅力を再発見

自分たちの地域を知ってほしいという思いを

2022年11月23日には、京町校区で「まちあるき トーキン&ウォーキン」というイベントが開催されました。

京町校区のラボ会のメンバーの1人が、「自分たちの住むまちをもっと知ってほしい」と話していたことが発端です。その方は、茶道の講師をしており、伝統文化を子どもたちに伝えていきたい、気軽に多くの人に触れてほしい、という思いも持っていました。

そこで、身近な地域を歩いて地域の魅力を再発見するとともに、いろいろな人とおしゃべりをして、ちょっと心が軽くなっていけるように、と企画をしたのが今回です。

地域を歩いて魅力を再発見

当日は、13時にJR久留米駅に集合。13時30分に出発し、坂本繫二郎生家、日輪寺古墳、水天宮を歩いてめぐります。久留米駅から徒歩10分圏内の3か所ですが、ガイドや宮司の説明を聞いたり、普段は公開されていない古

墳の周辺を見学したりすることで、参加者からは「近くをよく通っていたけれど、実際に来てみたのは初めて」「こんな身近にこんなところがあるなんて」という声があがりました。

歩きながらも参加者同士が、「このあたりは昔はこんなお店が立ち並んでいた」と話したり、大学生が就職についてのちょっとした悩みごとを話したり、子育ての悩みをわかちあったり、そんな姿があちこちで見られました。



集合の目印



久留米駅前に集合



スタッフがまちあるきを先導

お抹茶体験～自己紹介

約1時間30分をかけて地域歩きをしたあとは、コミュニティセンターで茶道体験の時間です。このイベントのもう1つの思い、「伝統文化に気軽に触れてほしい」という思いのもと、作法がわからなくても抹茶とお菓子を楽しむ時間となりました。

抹茶とお菓子をお運びするのは、小学校の課外学習で茶道を学んでいる6人の小学生。このイベントを企画し



抹茶とお菓子を運ぶ



みんなで自己紹介タイム

たメンバーの教え子たちです。地元の和菓子屋の季節の生菓子が添えられ、参加者はひとときのティータイムを楽しみました。

その後は、自己紹介の時間に。二重の円座になり、時間が来たら円の内側の人がいっせいに隣の席へ。こうして約半数の人との自己紹介ができることとなります。自己紹介のなかには、未就学児を連れた母親が小学生に小学校の様子を聞いたり、近所に住んでいることがわかり、「連絡先を交換しよう」と盛り上がる人がいたり。新たな出会いでにぎやかなひとときとなりました。

地域のいいところを話そう！

その後は、今日のイベントを振り返り、ワークの時間となりました。

テーブルに用意された2色の付箋紙。1つには、「今日楽しかったこと」を書き、ホワイトボードに貼りだしました。発見したまちの魅力、改めて感じた地域の歴史、新たな出会いなど、それぞれの思いが書かれた付箋紙が次々と貼り出されていきます。

そして、もう1つには、「こんなところにもう少しの工夫があったらもっと良くなるな、と思ったこと」。地域の課題ではなく、もっと魅力的なまちにするための声かけに、イベントや地域の魅力をもっと発信してほしい、という意見が目立ちました。



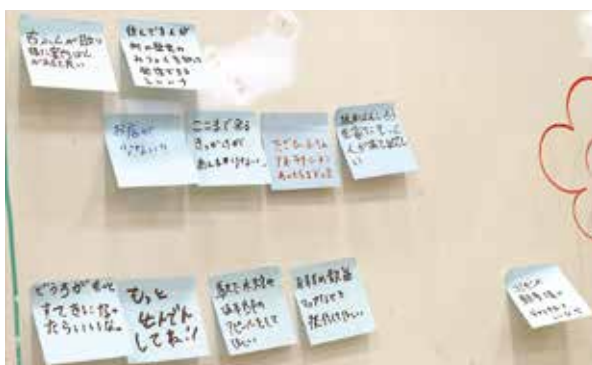
地域のいいところを書く



参加者が寄せた「今日楽しかったこと」

最後に、抹茶と一緒にいただいた地元の和菓子屋を訪問。「このお店のこのお菓子がオススメ」という声が変わるなか、思い思いのお土産を購入して解散となりました。

参加者からは、「駅からすぐ近くのエリアにこんなに見どころがあったなんて」という声が聞かれたり、スタッフも「自分の校区でもこうしたまち歩きをしてみたい」という思いを伺うことができました。



参加者が寄せた「一工夫でもっとよくなる場所」



宮司から水天宮の歴史を聞く

それぞれの物語

それぞれの関わり方

イベントの場では、率先して話せる人もいれば、そうでない人もいます。本当は話したかったけれど話せない、誰かに聞いてほしかったけれど言えなかった、そうした思いを「取りこぼしてはいけない」と國武さんは言います。

家庭の悩みを抱えて我慢をしていた人が、10万人女子会に関わり、ぽつぽつと自分のことを話し始めると、「それは違う。あなたが我慢していればいいことではない」と言ってくれる人がいました。その一言で、我慢してはいけないうこと、我慢していたことで子どもにもっと我慢をさせていたことに気づいた、ということも。「一歩踏み出してくれたことで、日常の関わりからこちらも一歩踏み込んでいける。だからこそもっとたくさんの人に関わってほしいし、関わる機会、出会う機会をつくりたい」と國武さんは意気込みます。

「このまちで暮らし、生きていくということは、華やかさだけではありません。『しんどい』と言いたくなるときに言える相手がいないと、ますます孤独で孤立していってしまいます。ここに来れば誰かがそれを受け止めてくれる。そうした場であり、つながりでありたい」。

小さな物語をたいせつにする

子育て中の母親が転居して、友人もいなく、ラボ会に参加していました。ラボ会で知り合った人とたまたま近所のスーパーで出会うことがあり、「荷物を持っていてあげるから、その間に車のカギを開けておいで」と言われたときに、その場で泣き出してしまったそうです。「その人は、自分がしんどいこともわからないまま、一人でいろいろ抱えてきてしまっていた。そこに、『あなたが持っているたくさんの荷物はとても重いものだよ』と気づき、共感してくれる人がいたことで、『私が本当はしんどいということを知っていてくれる人がいる』ということに、自身が気づいたんです。そんなことを出会ったときに涙ながらに話してくださった。こうしたなにげない思いやりのひとことが誰かを救っているということ、ちゃんと伝えていきたい」と話します。

ラボ会で出会った人が、災害時に「この先の道路が通れなくなっている」「ご飯を持っていきましょうか？」という声かけをし合っていたり、避難所に行った女性に毛布や生理用品を届けていたり。そんなつながりが、身近な地域で生まれてきています。

國武さんは、こうした小さな物語をもっと広く伝えていきたいと考えています。つながりのなかから困りごとを解決できたり、夢を叶えていったり、いろいろな出会いのエピソードがあります。「地域では目立つ人や活動ばかりではないんです。地域で本当に頑張っていたり、地域に根差した活動やつながりは、なかなか目に見えません。だからこそ、そこにフォーカスしていきたい」と。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践 NPO法人久留米10万人女子会 2023年1月20日開催号

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」

発行元：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1階

TEL 022-727-8731 FAX 022-727-8737

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修「若い世代のつながりづくり」

開催日 2023年1月20日(金) 14:00～16:30

開催方法 Zoomによるオンライン研修

申込者数 個人参加 51人、グループ参加 39団体

登壇者

ゲスト

NPO法人久留米10万人女子会 代表理事 國武 ゆかり

コメンテーター

NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長 池谷 啓介

コーディネーター

宝塚市社会福祉協議会 地域支援部長兼企画経営部長 山本 信也

プログラム

14:00～14:03	開会・趣旨説明
14:03～14:35	國武氏による実践発表
14:35～14:55	國武氏、池谷氏、山本氏によるディスカッション
14:55～15:05	休憩
15:05～15:35	参加者によるグループワーク
15:35～15:55	グループ発表
15:55～16:15	発表へのコメント
16:15～16:30	まとめ
16:30	閉会

委員からのコメント

池谷啓介委員（NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長／大阪府）

國武さんの報告のなかで、「『わたし』のことは『わたしたち』のこと」という言葉がありました。僕は「生活当事者」という言葉を大事にしています。その意識を社会のなかでどれだけ持てるか。集団が大きくなればなるほどマジョリティ側に優位性があることを忘れがちで、マイノリティからすると、それが参加のハードルを上げてしまうことになります。優位性を持つ側が、生活当事者という意識を持ち、そこを意識できるかどうかがちにとって非常に大事で、それが10万人女子会のなかにあることがキーポイントになっています。

ディスカッション

山本信也 「メンバーの皆さんの思いや得意なことを組み合わせていけば夢が叶う」とお話しいただきました。具体的なエピソードを教えてください。

國武ゆかり 「このまちで暮らす」ことを考えたときに、「夢が叶った」と感じられるのは、しんどさを言える関係性ができた、人と人とのつながりができたということです。たとえば、子育て中や介護中の人たちが、抱えているしんどさを言えるようになったのですが、私たちが本当にやりたかったことは、そのしんどさに気づいたり、それをわけ合ったり、もちろんうれしいことを一緒に喜んだり、そんな関係性をつくっていくところにあっただと思っています。

池谷啓介 10万人女子会の活動のポイントは、①身近、②ニーズの掘り起こし、③参加のハードルを下げる、という3点にあります。

1点目は、校区を単位として、少人数で展開されているということです。身近な場面で、自分たちの暮らしに引き寄せる場所をつくり、自分が住んでいる地域に対しての愛着やアイデンティティを持つこと、そしてそのしかけを丁寧に考えておられます。

2点目は、それぞれのラボ会が、ニーズの掘り起こしになっているということです。会話のなかで誰かが困っていることに気づくということは、10万人女子会にニーズの掘り起こしの役割があるのだということです。

3点目は、Instagramを活用したり、イベントで知り合い関係性をつくっていくなど、新しく参加する人にも参加しやすい雰囲気づくりを心掛けておられます。それは参加のハードルを下げているということですね。

國武 Instagramは、素人感満載ですが、それが身近なゆるさではないかなと思っています。きれいな映えた写真、華やかに見えるイベントでは、華やかな人しか行けないんだ、と思ってしまいます。「私は華やかではないから行けない」「参加するためには自分自身を華やかに見せなければならない」というのでは、自分たちの暮らしではないと思っています。

池谷 コロナ下では、オンラインを活用したラボ会をされていると話しておられました。特に高齢者にとっては苦手な分野ですが、どのようにされていましたか？

國武 高齢の参加者からは、「オンラインはわからない。やめておきます」という声もありました。「月に1回会っていたのができなくなったから、近況報告をしようよ」というラボ会の皆さんからの声かけで、玄関先でアプリを入れて、使い方を紙に書いて教え合っていました。いままでのつながりを断ちたくない、誰かに会いたい、誰かと話したい、という思いを形にしたということだと思っています。

山本 ハードルを下げるということは、社会参加を促進するという意味でも非常に大事なキーワードです。委託事業や補助事業では、実績を期待されるあまりに数字を意識しがちですが、10万人女子会では「実績」よりも「実践」で見えてくるものを非常に大事にされています。「住む」ではなく「暮らす」ことにこだわり、一人ひとりの物語をたいせつにされているんですね。

参加者によるグループワーク発表（一部抜粋）

◎

「気づいたこと」として、楽しそうな実践をされている。國武さんがその実践を楽しそうにお話されていて素敵。周りの人を巻き込む力がすごい。実践が福祉福祉していない、福祉一色でない感じがいい、という話が出ました。また、「取り入れたいこと」として、活動がおしゃれ。若い同世代の人が参加できるイベント、SNSの活用などが挙げられました。また、成果指標についても話し合われ、数値以外の指標も必要なため提言していくことが必要、という意見が出ました。（市町村社会福祉協議会／個人参加）

◎

普段の暮らしの中でのつながりをとらえていく視点と、エピソードを物語として広めていく役割があると気づいた。皆さん、自身の仕事等の事業と絡めながら重ねてとり入れたいことを話してくれていました。ハードルを低くし、だれでも来れるように参考にしたい、困りごとを共有できる場づくりをしたい、参加しやすい場をつくりたい、という意見が出ました。（市町村社会福祉協議会／個人参加）

◎

災害が起きてからではなく、平時からのつながりの関係があると助け合うことができると思った。今の段階でやっていくことを取り入れたいと思った。（市町村社会福祉協議会によるグループ参加）

◎

以前は地域で若妻会や婦人会で集まりがあって出やすかったが、今は子ども会や育成会も停滞し、出る機会が少なくなっているため、ラボ会が出かける機会と人と出会える機会になっている。女性に視点を当てていることがすばらしい。（市町村・市町村社会福祉協議会によるグループ参加）

◎

支えたい人が心を開いてくれる…周りの人も「この地域良いな」と思える。支え・支えられてお互い様、安心できる。地域の会長の顔写真・QRコード良かった。取り入れたい。楽しい、わかりやすい、印象に残る。子どもにもわかりやすい。顔が見えることで見守りにも。（市町村社会福祉協議会によるグループ参加）

◎

國武さんが、「人工的なつどいの場、組織」という言葉が心に残っています。行政はどうしても人工的に組織や集まりの場をつくりがちで、社協もそうしてしまう、と話していました。人工的に組織や場をつくってしまうと、長続きをしない、存続しないことが課題になりがちです。今後、住民の方、地域の方が自主的につながっていくこと、日常の延長線上に暮らす、ということがヒントになると学ばせていただきました。（市町村・市町村社会福祉協議会によるグループ参加）

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修『若い世代のつながりづくり』アンケート結果

(2023年1月20日)

設問1 あなたのことについてお尋ねします。

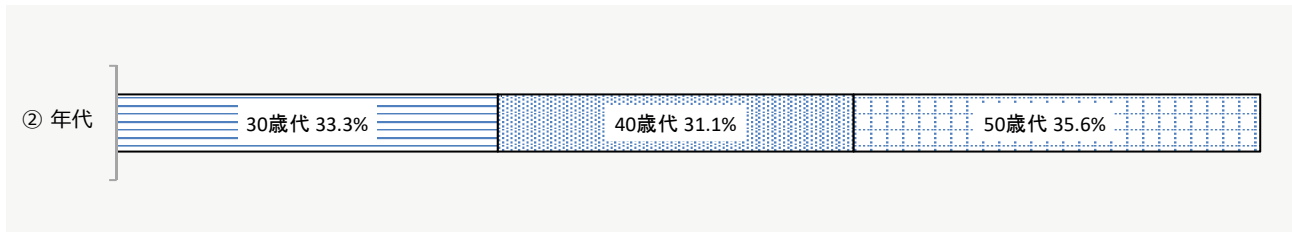
①お住まいの都道府県を教えてください

43件の回答

都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数
北海道	3	栃木県	1	新潟県	1	愛知県	2	和歌山県	2	福岡県	1
宮城県	2	群馬県	2	石川県	1	京都府	2	広島県	1	鹿児島県	1
秋田県	1	千葉県	1	長野県	1	大阪府	1	香川県	1	沖縄県	1
福島県	1	神奈川県	1	岐阜県	1	兵庫県	14	高知県	1		

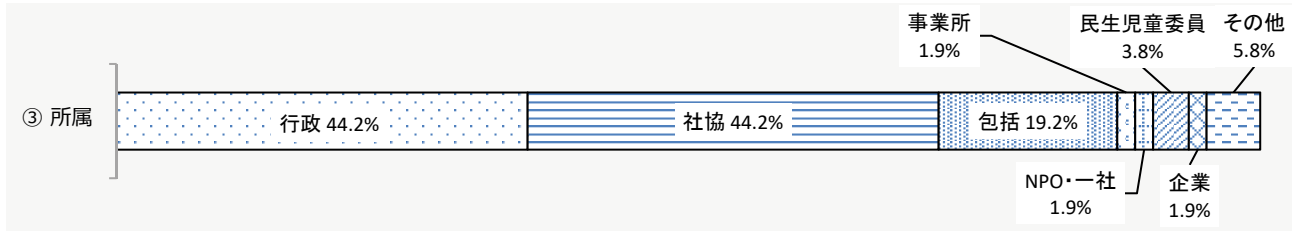
②あなたの年代を教えてください。グループ参加の方はメンバーの年齢構成をチェックしてください（複数選択可）。

43件の回答（総回答数45件）



③あなたの所属を教えてください。グループ参加の方はメンバーの所属構成をチェックしてください（複数選択可）。

43件の回答（総回答数52件）



その他回答【3回答（各1件）】

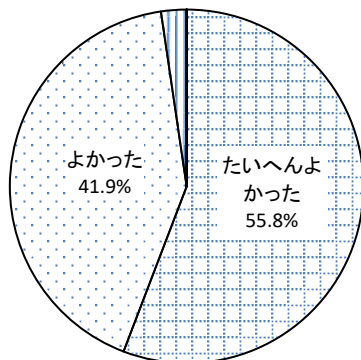
札幌市介護予防センター、協議体、生活支援コーディネーター

設問2 本日の研修内容についてご意見をお聞かせください

①今回の研修に参加されてよかったですか。

43件の回答

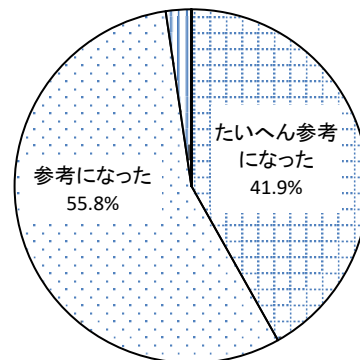
ふつう
2.3%



②研修の開催資料は参考になりましたか。

43件の回答

ふつう
2.3%



●**研修や資料のなかで参考になったことや役立ったことを教えてください。**
 (自由記述／一部抜粋)

- 中心はラボ会の皆さんで、みんなで暮らしをつくるという言葉が印象に残りました。実績よりは実践とのお話もとても心に響き、活躍支援を支援していく立場としての心持ちが変わりました。とても有意義な時間でした。
- 「つながり」は第三者（行政、社協など）がつくるものではなく、自分たち（住民）が「つながりたい」と思って行動した結果であり、今回の実践はまさにそのような事例だったと思います。第三者の役割は「つながりたい」と考えている人同士が会う場をどのように作るか、または「つながる」ことの価値を上手に伝えていくことであり、今回の研修はたいへん参考になるものでした。
- 校区に地域の人が自由に集まり、そこで出たやりたいことを実現するための取り組みがとても参考になりました。また、できない課題を見つけることからスタートしてしまうけれど、その前段階で対処することが必要だということがたいへん勉強になりました。
- 楽しいことを軸にした「関心縁」と、生きづらさなど解決を軸にした「課題縁」のところがたいへん分かりやすく、理解することができました。生活支援コーディネーターと専門員の役割に置き換えて、それぞれのあて先を整理することができました。
- 中心にいる人たちが、「自分たちのやりたいこと、目指すところ」をぶれずに進めていく。ラボ会に参加していても影となって声を拾うことを徹底しているところ。コーディネーターとして参加している自分はどうしても自分が前に立って前のめりで聞きに行ってしまうので……。若い世代の参加や新しいメンバーといった部分へのアプローチについて、もう少し考えたいと思いました。
- 若い世代の参加を促す「しかけ」ばかりに目がいってしまっており、どうやったら巻き込むことができるのかという風に今まで考えてしまっていました。巻き込むでは人は集まらないという言葉に、今後の地域へのかかわり方を変えていかないといけないと考えさせられました。
- 地域づくりについて、行政がやることによってどうしても結果を求められ、事業を実施することだけにとらわれやすくなってしまっているということに気づいた。自分もそのようになってしまっているなと共感しました。大きな規模の都市でも、このような女子会が展開できるということを学び、自分の市では何ができるのか改めて考えさせられました。

●**運営についてのご意見やお気づきの点がございましたら教えてください。**
 (自由記述／一部抜粋)

- 共有の際の発表は2～3グループでよいかと思う。その分質疑応答の時間などを入れてほしかった。
- グループがあらかじめ名簿に示してあり、分かりやすくてよかったです。
- 発表者さんのPPT資料があると助かります。zoom画面からだけでは見えづらさがあります。先方の意向もあるとは思いますが、ご検討ください。

●**その他のご意見や感想などがございましたらお聞かせください。**(自由記述／一部抜粋)

- 場所は違えど、同じ思いを持って仕事をしている仲間が全国にこれだけいるのだという励ましや勇気をいただけます。このような研修会が今後も定期的に開催されることをご期待申し上げます。
- 数字にとらわれず、その人のストーリーや内容に目を向けることについて話がありましたが、行政に報告するときには数字で示さないといけないためジレンマを感じていたところでしたので、たいへん共感できました。
- 高齢者だけではなく、さまざまな世代で交流の場を必要としていることに気づかされました。役所での横の関係を意識していくことがたいせつなのだと思います。
- アンケートの回答を回答フォームから入力できない場合にも対応できるよう、事前にエクセルファイルでの回答フォームも送付していただきたい。

フォローアップ意見交換会

日時 2023年1月24日(火) 16:30～17:00

開催方法 Zoomによるオンライン

参加者 **岐** 市社会福祉協議会(岐阜県)

第2層生活支援コーディネーター6人で参加

広 地域包括支援センター(広島県)

センター内の看護師、社会福祉士と参加

●研修を受けて、参加者の反応は？

岐 毎回、地域の方とつながりながら活動していくという視点が共通しているのでとても勉強になっています。

私たちは、「地域のいいところ、できているところはなにか。不都合なところがあるとしたらなにが不都合なのかを、地域の方と一緒に考えていく」というスタンスで動いています。人と人のつながりの場合は「〇〇サロン」と名前がつくものばかりではありません。お隣同士で支え合っていたり、お茶飲み友だちが元気づけ合っていたりという細かい部分をたくさん拾って地域の中の資源としてとらえていきたいと思っています。

研修では、「地域とつながり、人とつながるという視点は一緒」という話をしながら受講をさせていただきました。また、そうしたつながりをたいせつにしながら動いていた自分たちの視点も「間違っていなかったよね」と自信にすることができています。今回、グループで受講したことで、その場の空気感を同時にみんなで感じることができて仲間意識がより高まっています。

広 今回の研修では、みんなが地域でつながって、その後、生活課題に気づいたり見つけたりしていく過程を興味深く聞きました。

地域包括支援センターの業務では、高齢者との関わりが多く、若い人とつながる機会がなかなかつくれずにいます。児童や障害、国際支援など、分野に特化したNPOと出会う機会がありますが、地域のプラットフォーム・多世代交流のNPOには出会えていません。

演習では、個人参加のグループに入りました。「SNSの上手な活用、発信の仕方が参考になる」「町内会長の全身写真入りマップは親しみやすい。若い人とつながるツールに活用できるのではないか?」「組織のつくり方がピラミッドではなく、輪の形なのが素敵」という意見が出ました。

●今後について

岐 今後、地域の企業や地元のお店ともつながりながら地域づくりを進めていきたいと考えていますが、なかなか前に進めていませんでした。地元の皆さんとのつながり方のヒントをいただいたので、自分たちも広げていけるのではないかと考えています。

地区社協で開催している子育てサロンの場にお邪魔して、サロンが終わってから区長さんが入れてくださるコーヒーと一緒に飲みながら、子育てサロンに関わっている皆さんと地域の話をしています。「こんな体験をさせてもらってうれしい。だからまた次も手伝おうと思える」という声を聞かせてもらい、私たちが「住民主体」という言葉を出さなくても、地域の皆さんはすでに気づいているということを私たちが学ばせてもらっています。これからもそうしたことをたいせつにしながら日々の活動をしていこうと思います。

広 久留米10万人女子会では、サービスをどうつくるか、どうあてはめていくか、という話ではなく、自分たちのまちの暮らしの質・豊かさに焦点をあてていることが印象的でした。

私たちの包括のエリアは、40年経つ団地と新興住宅地がまざりあっていて、学生や子育て世代もいるのですが、日中は高齢者にしか出会えません。そんななかでも、普段のつながりのたいせつさについては非常に参考になり、今後着目していきたいと思っています。

また、高齢者＝支援する対象者ではなく、リスペクトする「レジェンド」という表現がいいなと思い、私も使うようにしています。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践

熊本県西原村

2023年2月10日開催号

就労支援と地域支援 (NPO法人にしはらたんぽぽハウス)



たんぽぽハウスの仲間たち



たんぽぽハウスの仲間たち2



目次

「ない・ない」から生まれたたんぽぽハウス	2
たんぽぽハウスの1日	4
熊本地震からの地域支援	6
これからの地域のために	8

《講座のご案内》

2023年2月10日(金) 14:00 ~ 16:30

「就労支援と地域支援」

ゲスト……………NPO 法人にしはらたんぽぽハウス 副理事長 上 村 加代子
施設長 廣 瀬 るみ子
コメンテーター……社会福祉法人湘南学園 専務理事 塚 本 秀 一
コーディネーター…淡路市社会福祉協議会 事務局長 凧 保 憲

2005年の西原村民参画ワークショップをきっかけに、障害のある人の居場所&仕事づくりとして、農産物加工を開始。生活困窮者や出所者なども集い、2016年熊本地震では被災者への支援も行いました。農家や住民の協力のもと、食堂・移動販売による食の支援や交流、子どもの居場所づくりなど、共生の地域づくりに取り組んでいます。

お申し込み方法は
こちらから →

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>



「ない・ない」から生まれたたんぽぽハウス

西原村は、熊本市から東に20キロメートル、大津町、御船町、山都町に隣接しています。北西部は阿蘇くまもと空港に接し、東部は阿蘇外輪山の西麓に位置する、南阿蘇観光の玄関口でもあります。阿蘇山から吹き下ろす東風を、西原では「まつぼり風」と呼びます。

1960年に山西村と河原村が合併し、自治体の一文字ずつを合わせた西原村が誕生しました。2016年4月16日に発災した平成28年熊本地震では、震度7を観測し、村内も大きな被害を受けました。

一方で、移住者が増えるなどしたこともあり、「令和4年（2022年）版熊本県推計人口調査結果報告」によると、西原村は県内の人口増加率トップ（+2.48%）となっています。

【2023年1月1日】

人口	6,885人
世帯数	2,862世帯
高齢化率	32.1%
年少人口率	13.5%

特定非営利活動法人にしはらたんぽぽハウス 〒861-2402 熊本県阿蘇郡西原村小森3264
URL <http://www.13.plala.or.jp/tanpopo-imacoco/>

にしはらたんぽぽハウスの設立

NPO法人にしはらたんぽぽハウス（以下、たんぽぽハウス）は、西原村役場の敷地内にある就労継続支援B型と地域活動支援センターの機能をあわせもつ事業所です。身体・知的・精神に障がいのある人、アルコール依存症の人、認知症の人、出所者、生活保護受給者、生活困窮者などいろいろな人が集まり、日中の時間を過ごしています。

たんぽぽハウスの誕生は、2004年にさかのぼります。2004年から2005年にかけて、西原村社会福祉協議会が、障がいのある人の暮らしについて村民が考えるワークショップを計4回開催しました。当事者、家族、民生委員、小中学校の教員、保育園、行政、社協、地域住民など約50人が参加し、「バリアのないまちづくり」について考え合いました。

当時、西原村で障がいのある人の暮らしは、「働く場所がない」「居場所がない」「理解がない」「どこにも属していない」という課題意識がありました。なにもすることがないため家にひきこもっていたり、働く先が村内にないため近隣市町村の作業所や施設に通ったりする人がいたのです。

仕事づくり、居場所づくり、心づくり、

そこで、障がいのある人の自立を考える「仕事づくり」、働ける場や集える場を考える「居場所づくり」、障がいについて住民に伝え、理解を広げるための「心づくり」という3つのテーマを設定し、ワークショップで話し合われました。

当時、西原村社会福祉協議会で会計や障がい者福祉部門を担当していた上村加代子さんが一念発起し、そうした3つの機能をあわせもつ事業所を地域に立ち上げました。地域住民の理解を広げるために、立ち上げまでに話し合いの場を持ち、2005年に障害者自立支援センター「にしはらたんぽぽハウス」を設立、4人の利用者との活動が始まりました。建物は、旧社会福祉協議会。ここを拠点として、居場所づくりがスタートしました。

仕事づくりとして、住民から提供してもらった農地で無肥料・無農薬にこだわった自然農法による米、大豆、落花生などを栽培。収穫した農作物を味噌や落花生あえのもとに加工し、販売もしています。なかでも、小豆を栽培・収穫し、昔ながらの製法を守り抜く和菓子店に加工依頼をして販売する羊羹や、地元

の農家から規格外品のイチゴやクリ、ユズなどを譲り受けて、ジャムやドライイチゴ、栗の甘露煮やマロンパウダー、柚子胡椒などを製造。そのほかにも、阿蘇の赤牛や熊本県産のタマネギをふんだんに使ったレトルトカレーの製造、販売なども手がけ、たんぼぼハウスのほか物産館などでも販売しています。いずれもたんぼぼハウスの看板商品として、たんぼぼハウスの財源となっています。ほかにも、住民に呼びかけてアルミ缶や新聞を提供してもらい、それを回収することで地域と顔の見えるつながりづくりにも努めています。

心つくりとして、社協の座談会などで障がいについて話し合う場を設けるなどをしながら地域住民への理解も進めており、地域の福祉教育の場にもなっています。地域住民を「たんぼぼハウスの応援団」として関係づくりを積み重ねてきた結果、いまではボランティアとして多くの人が活動を手伝ったり、「栗をたくさんもらったから」と届けてくれたり、たんぼぼハウスを気にかけて、立ち寄ってくれるようになりました。

2008年にNPO法人格を取得し、地域活動支援センター「にしはらたんぼぼハウス」を開設。2012年には就労継続支援B型「ナチュラルファームいまここ」を開設し、現在のかたちとなりました。

組織及び施設概要

名 称	NPO法人にしはらたんぼぼハウス	
施 設	就労継続支援B型 「ナチュラルファームいまここ」 地域活動支援センター 「にしはらたんぼぼハウス」	
通所人員	就労継続支援B型 20名 地域活動支援センター 10名	
開所日時	火曜日～土曜日 週5日（日曜・月曜・祭日休み） 午前9時～午後4時（夏場はフレックスタイム制） 夏季休暇・冬期休暇あり	
作業種目	【下請け作業】 ①フルーツキャップ内職 ②施設環境整備 ③昼食作り ④除草作業 ⑤加工委託作業	【自主製品】 ①農作業 ②農産加工業 ③アルミ缶回収 ④古紙回収 ⑤弁当・惣菜・菓子製造販売 ⑥各種模擬店出店
訓練重点目標	【生活支援】 ①身辺習慣の習得（服装など） ②生活習慣の習得（時間の認識・交通機関の利用・食事のマナー等） ③コミュニケーション（挨拶・言葉遣い・連絡等）	【作業支援】 作業を通して集中力や責任感を高めるとともに作業従事を通して働く自信を習得することを目標とする。
行 事 等	①地域交流 夏祭り等の地域のふれあいに参加（模擬店など） ②小中学校との交流 ③その他いろいろな行事を計画中！	
工 賃	作業で得た収入はご利用された方への工賃としてお渡しします。	
役 割	①利用者一人一人の健康管理及び体調変化の早期発見 ②行政・社協・病院等の関係機関との連携 ③利用者・家族の相談 ④障がい者への理解促進・啓発 ⑤家族的な雰囲気の中で心身ともに充実し就労できるようにする	

たんぽぽハウスの1日

1日3食を提供

「たんぽぽの綿毛が風に舞い、広がっていくように福祉の心が広がってほしいという願いを込めて」名づけられたたんぽぽハウス。ここでは、利用者を「仲間」と呼びます。仲間たちの背景は、精神・知的・身体などの障がいのほか、軽度の認知症の人や生活に困窮している人など。以前は、アルコール依存症の人や出所者なども受け入れています。

上村さんは、「知的や精神に障がいのある人には、生活に困窮している人が多いんです。ある仲間が、『生活保護に頼らないで自分は頑張りたい。たんぽぽハウスで食事を提供してもらえれば頑張れる』という意見があって、それから一日3食、希望する人に提供しています」と話します。食費は1日あたり300円で、たんぽぽハウスがお休みの日曜、月曜は各自で食事をとってもらっています。

「たんぽぽハウスは、できるだけ断らないことが信条」と話すのは、施設長の廣瀬るみ子さん。たとえば、アルコール依存症の人は就労支援B型事業にも地域活動支援センターにも該当する対象者ではありません。それでも、「ボランティアとして来てもらうことで、1日3食をここでとってもらえるだけでなく、仲間たちや地域の人たちとつながりながら、見守りや関わりが続けられています」と話します。

胃袋をつかめ！

料理自慢のたんぽぽハウスは、昼食の品数も驚くほど、そしてすべてが手づくりで温かく、おいしい食事が提供されます。来た人にはまず胃袋をつかむために昼食を食べてもらい、「これはおいしい」と感じてもらったら、「毎日来る人のために、朝ご飯も昼ご飯も夕ご飯も作っているんですよ」と話をしています。すると、「ちょっと行ってみようかな」と言って、定期的にたんぽぽハウスに来るようになると言います。

昼食を提供しているのは仲間たちだけではなく、弁当の受注もあれば、目の前の村役場や地域包括支援



大好評！たんぽぽハウスのお弁当



おにぎりも分業制

センターの職員が訪れて一緒に食事をすることも。にしはら地域包括支援センターのセンター長、中村洋行さんは、「ここで食事をしながら情報交換が自然とできていたりします。包括の対象者はおもに高齢者ですが、たんぽぽハウスで出会った人に包括の支援が必要ならばつなげてもらいますし、包括の業務や、既存の制度・サービスで対応できない人に出会ったときはたんぽぽハウスにつなげています」と話します。

年末には、毎年、身寄りのない一人暮らしの人に

おせちを渡しています。「年中行事の日は、一人暮らしの孤独な寂しさはいつそう募ってきます。特に、一人での年越しは骨身にこたえます。せめておせちがあれば、おいしいものを食べれば心が温かくなるのかなという思いで、おせちづくりを続けています」と上村さん。

おいしい料理に誘われてたんぼぼハウスを訪れるのは、仲間たちだけでなく、連携機関や応援団の地域住民、そして西原村だけでなく全国からもたんぼぼハウスのファンが訪れているのです。



自然農法にこだわった米づくり

仕事をおしてつながりを

開設当初から、農業とリサイクル事業を進めてきたたんぼぼハウス。農業では、繁忙期には仲間たちだけでなく、応援団なども駆けつけ、一緒に収穫作業を行うこともあります。

近隣の農家から、「もう廃棄するしかない」という話を聞いて引き取ったイチゴは、乾燥させてドライイチゴ「いちごいちえ」に製品化。ドライフルーツと思えないジューシーさとさっぱりとした甘みが好評のオリジナル商品になりました。また、放置竹林でタケノコ掘り、水煮加工したのちにレトルトパックに詰めて商品に。たんぼぼハウスによる6次産業が、地域の農家や竹林の「ちょっと困った」の大きな力になっています。

リサイクル事業では、地域住民に「アルミ缶や新聞をたんぼぼハウスに出してください」とお願いし、たんぼぼで集めています。



みんなでイチゴの収穫

関わりが暮らしを支える

離婚し、知的障がいのある2人の子どもを育てていた父親が、退職後に気になる行動が増え、受診をすると認知症の疑いを指摘されました。糖尿病を併発し、徐々に運転が難しくなり、家事も冷凍食品を温める程度しかできなくなっています。

本人の従妹が通院の手伝いを、家のなかのことはおもに長女が担っていましたが、負担が大きく、うつが再発してしまいます。長男は金銭管理ができず、本人と長男のケース会議が開かれ、それぞれ必要な制度を利用することになりました。

たんぼぼハウスでは、制度では対応できない、長男の朝・昼の服薬確認や食事のサポートに加え、毎日洗濯をしているかなどの状況把握のほか、従妹や長女への相談を行うなどの支援を続けています。

制度だけでは支えきれない日常をちょっと気かけ、必要なときは手伝いをする、そうすることでこの一家は住み慣れた家で暮らし続けられているのです。

熊本地震からの地域支援

災害支援拠点となる

2016年4月16日。西原村を震度7の大きな地震が襲いました。たんぼぼハウスの建物も一部損壊という被害を受けながらも、全国から来たボランティアや支援物資の拠点としてたんぼぼハウスに集まりました。たんぼぼハウスは、障がいのある人の避難場所であるだけでなく、各地から来たボランティアの宿泊場所に、また、民間の支援物資の受け入れ先ともなり、ニーズマッチングが始まりました。



たんぼぼハウス外観

たんぼぼハウスでは、毎日約300食の炊き出しを無料で実施。週に2日は食堂の運営をし、金曜日はラーメンの日、土曜日は子ども食堂として地域に開放をし、さまざまな人が出会い、温かい食事とともに時間を過ごす地域の居場所としての重要性が再認識されました。

また、住民に向けたアンケート調査や、仮設住宅にひきこもりがちなお年寄りなどを支援するために仮設住宅への訪問などを行っていきます。

その男性は、ひとり暮らしでアルコール依存症。借金もあり、生活苦のため村社協に相談をしました。障がい者手帳を持っていなかったため、たんぼぼハウスではボランティアと一緒に作業をするようになりました。「自宅にいるとお酒を飲んでしまうけれど、ここに来れば仲間たちと一緒にユズの皮むきなど、いろいろな作業ができる」と言い、一緒に過ごすことで食事支援、アルコールをなくす、タバコを控えるなどの体調管理が可能となりました。すると、たんぼぼハウスから支給される謝金で生活ができるようになり、社協の権利擁護支援を受け、自立に向けて踏み出していけるようになったと言います。

落ち着き、くつろいで過ごせる場所

災害直後、発達障害の人のなかには、大人数での避難所生活が合わずに自家用車に避難をし、車中泊をしているという実態がありました。

周囲に気兼ねすることなく、落ち着いた環境で過ごすことが必要と、たんぼぼハウスでは支援を受けて、たんぼぼハウスから車で5分ほどの場所に「ふわり」を建設しました。



ふわりの前で、子どもたちと一緒に

その後、ふわりのすぐ隣の別棟



ゲルのようなテントで語らう

住居のゲルに似せた建物を建て、見学に来た大学生たちが語り合う場となったり、広大な敷地に生い茂る雑木林には、大学生がブランコやツリーハウスなどをつくり、「こどもの森」と名づけられました。自然のなかで、子どもが笑い、大人がくつろげる居場所になっています。

つながりがアンテナに

地域住民を応援団として、日ごろから丁寧に地域との関わりを続けてきたことが、災害の際に功を奏したことは言うまでもありません。もちろん、災害支援をとおして地域の絆がいつそう強くなり、地域での困りごと、気にかかることがたんぽぽハウスに寄せられる機会も増えてきました。



こどものもりの入口で



みんなで乾杯！

では、1人暮らしの練習をしたいという人が過ごし、そこから通ってきています。また、緊急受け入れが必要なときはふわりで寝泊まりをすることも可能です。現在は週1回、地域活動支援センターの仲間たちがここで過ごしています。

さらに、モンゴル遊牧民の

たとえば、学習塾の先生から、「塾代が支払えずに塾を辞めるという子どもがいる。生活に困っているのではないか」、コンビニエンスストアから「子どもが虐待を受けているようだ」など。情報を受けたら、配食のついでにちょっとおかずを1品持って訪ねることもあると言います。

上村さんは、「NPO 法人だからこそ、多様性や柔軟性があります。やろうと思ったらすぐにできるし、関わりたいと思ったらすぐに関わられる。それはとてもいいことだと思っています」と話します。

これからの地域のために

移動販売で気にかける

熊本地震発災後、仮設住宅を巡る移動販売を実施していたたんぼぼハウス。コロナ下で、「特に中山間地域の高齢者の暮らしがより気にかかるようになった」と、移動販売を始めました。コロナ下でサロンなど集まる場が休止となるなか、買い物に来る様子から見守りや声かけをし、そこにつどうことでミニサロンのような役割になることを目指しています。



たんぼぼハウスの移動販売車



お惣菜を選ぶ

「久しぶり」「元気だった？」という会話をしながら、そこでお茶を飲みながら地域の様子を見聞きして、気になる人がいれば話を聞きに行くなど、小さなつづやきから地域のニーズを拾いあげたいと考えています。

移動販売には、地域包括支援センターの職員が同乗することも。買い物の場が、専門職にとってもゆるやかな見守りや情報交換の場になっているのです。

いろいろな人がいるからおもしろい

当初から、「障がいのある人のいるところと学童はわけてほしい」という声が保護者から上がったり、出所者が来たときには「うちの子は通わせられない」という親がいたり、たんぼぼハウスを理解する声ばかりがあるわけではありませんでした。

それでも、その人と出会ってみるととてもまじめで、認知症高齢者に優しく接している姿を目の当たりにしたり、他人に関心を示さないと考えていた人が一緒に作業をしていると仲間のことをとても気にかけていたり、穏やかな性格がゆえ、その人がいるだけで場がなごむ人がいたり。「その人がここにいることに意味があるんです。いろいろな人がいる。ごちゃまぜだから、おもしろいんですよね」と上村さんと廣瀬さんは微笑みます。

※編集部注 本誌に掲載した写真の多くは、コロナ以前の活動の様子をたんぼぼハウスよりご提供いただきました。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践 NPO法人にしはらたんぼぼハウス

2023年2月10日開催号

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」

発行元：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1階

TEL 022-727-8731 FAX 022-727-8737

<https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修「就労支援と地域支援」

開催日 2023年2月10日(金)14:00～16:30

開催方法 Zoomによるオンライン研修

申込者数 個人参加 51人、グループ参加 39団体

登壇者

ゲスト

NPO法人にしはらたんぽぽハウス 副理事長 上村 加代子

NPO法人にしはらたんぽぽハウス 施設長 廣瀬 るみ子

コメンテーター

社会福祉法人湘南学園 専務理事 塚本 秀一

コーディネーター

淡路市社会福祉協議会 事務局長 凧 保憲

プログラム

- | | |
|-------------|----------------------------|
| 14:00～14:03 | 開会・趣旨説明 |
| 14:03～14:35 | 上村加代子氏、廣瀬るみ子氏による実践発表 |
| 14:35～14:55 | 上村氏、廣瀬氏、塚本氏、池田氏によるディスカッション |
| 14:55～15:05 | 休憩 |
| 15:05～15:35 | 参加者によるグループワーク |
| 15:35～15:45 | グループ発表 |
| 15:45～16:30 | 発表へのコメント、質疑応答、まとめ |
| 16:30 | 閉会 |

委員からのコメント

塚本秀一委員（社会福祉法人湘南学園 専務理事／滋賀県）

社会は「ごちゃまぜ」で、いろいろな人がいて当たり前です。福祉ももともとは「ごちゃまぜ」で、障がいのある人、高齢の人、子どもたちは一緒にケアをしていました。それが、ケアする側の都合、つまり集めてケアをしたほうがやりやすいという理由でわけていく、「ごちゃまぜらない」ケアをするようになりました。

いろいろな人がいてこそその社会で、たんぽぽハウスはそうした原点に戻っているのだと思います。社会に近い構成比、お年寄りも子どもも、障がいのある人もない人も、男性も女性も、一緒に助け合うということが実現すると、地域の福祉力が上がっていくのだということをたんぽぽハウスの取り組みから改めて学ばせていただきました。

ディスカッション

眞保憲 たんぽぽハウスの取り組みのなかでも、いわゆる地域共生社会が目指すところである、受け手と支え手という関係を超えるということがお話からも出てきました。そういう社会が特別なことではない、そのことの正当性をしっかりと意識することが必要だと私自身も気づかせていただきました。

たんぽぽハウスと西原村地域包括支援センターがすぐ近くという立地条件もありますが、具体的に包括職員の皆さんとの関わりの部分をもう少し詳しくお聞かせください。

上村加代子 生活に困窮している人がおられて、包括から「その人の食材費がないので、ヘルパーさんが持っていけるような食べ物はなにかありませんか？」と連絡を受けました。たんぽぽハウスはいろいろなところからいろいろなものをもらったりするので、それを包括からヘルパー事業所に連絡をしてもらい、取りにきてもらって野菜や食材を無料でお渡ししました。

移動販売でも、見守りが必要な人がいると聞くと、「今度移動販売に同乗して、その人に会ってみたい」ということがあって一緒に行く、ということをしています。

また、利用者さんの父親が認知症になられた場合などにはどうしたらいいとか、利用者さんの親御さんが体調を崩されてちょっと見に行ってもらいたいときとか、そういうときには私たちから包括にお願いをしています。

眞 地域包括支援センターと就労継続支援 B 型の事業所とは、制度が縦割りということを考えてと直接かかわる機会はなかなかつくれないのではないかと思います。西原村では制度の枠を超えておたがいに持ちつ持たれつ関係を構築されています。

塚本秀一 地域には、福祉にかかわる役割を担う方がたくさんいます。行政の担当者だけでなく、自治会の福祉委員、民生委員児童委員、学校、社協、そして私たちのような社会福祉法人など、いろいろな地域の資源があるのですが、なかなか有機的な関係がつくれていません。それぞれではかかわりが持てても、有機的に地域のなかでつながることが難しいのです。なぜ西原村でできているのかを考えました。それは、上村さんや廣瀬さんが、ニーズに応えることを最優先にしているからではないでしょうか。ニーズをまずつかんで、それにどう応えていくか、みんなで知恵を出し合うことで、有機的なつながりができると思いました。

上村 たんぽぽハウスでは、「断らない」し、「前例がないからできない」とは言いません。いろいろなニーズに対しても地域の人たちと考えながら、「どうにかしてやってみよう」と思っています。

廣瀬るみ子 たんぽぽハウスに入った当初、「こんなにたいへんなことも断らないのか」と驚くこともありましたが、それが上村さんのいいところで、その考えは間違っていない。それはたんぽぽハウスで引き継いでいかなければならないことだと思っています。

塚本 「ごちゃまぜ」とおっしゃいましたが、いろいろな人がいるからおもしろい、というその発想なんですよ。

眞 たんぽぽハウスに行くと安心できる、という人たちが、またそのなかで自分の役割や活躍できる場を見つけたいける、そしてごちゃまぜが連鎖していくのかもしれないね。

参加者によるグループワーク発表（一部抜粋）

◎

「ごちゃまぜ」というキーワードが素敵でした。就労継続支援B型という障がい者を対象とした事業所でもいろいろな人を受けとめてくれるのは、地域包括支援センターとしても心強いと思いました。また、「仲間」という呼び方が温かくて、いろいろな壁などがなくなっていくのかな、自分たちの地域でも分け隔てなく集まれるような居場所がほしいな、という意見が出ました。（地域包括支援センター／個人参加）

◎

ごちゃまぜがすごい、というのが最初の感想でした。介護保険法、生活困窮者自立支援法、心神喪失者等医療監察法など、制度上の縦割りのなかで支援を展開する必要もありますが、たんぼぼハウスではそうした法制度をまたいだ工夫のなかでいまのかたちを実現されているということに興味を持ちました。地域のなかで障がいのある人、出所された人などに対して偏見を持たないような地域づくりをどのようにされてきたのか、工夫されている点をもっとお聞きしたかったです。（地域包括支援センターによるグループ参加）

◎

感想として、「利用者からつながる見守り」「前例がないと言わずにチャレンジしていきたい」「ごちゃまぜな居場所にゆるい人がいてもいいんだな」などが出ました。施設や行政、地域がつながるためにワークショップを行っても、働く場所が少ないという現状もあります。「就労支援」という言葉を使いますが、それでは働くという印象が強く、活躍の場という呼び方も良いなという意見が出ました。（社会福祉法人／個人参加）

◎

当事者の方の自立と居場所と周囲の理解を深めながらさまざまな取り組みをされてきたことがすごい、という感想がたくさん出ました。本市では、いま、生活支援体制整備事業を受託して小学校区程度で第2層協議体を設置しています。そのなかで障がいの事業所と連携して地域住民や民生委員などを巻き込みながらつどいの場を進めていこうという動きがありますが、住民の視点としては、精神に障がいのある人と関わることに不安を持つなど、難しさも課題として残っています。どのように対処されながら理解を進めていかれたのかをお聞きしたいです。（市役所によるグループ参加）

◎

とてもうらやましい、という感想があった。高齢者だけでなく障がいがある人、出所者の人がごちゃまぜであることがいいことという意見が多かった。地域性にもよるが、個人情報への壁がどの地域にも課題としてあるので、その壁をうまく取り払えるような工夫が必要ではないか。そのために、古紙の回収やアルミ缶の回収など、普段からの交流を重視されているところが信頼につながっているという意見もあった。（市社協／個人参加）

孤立を防ぐ「地域づくり」人材養成研修『就労支援と地域支援』アンケート結果

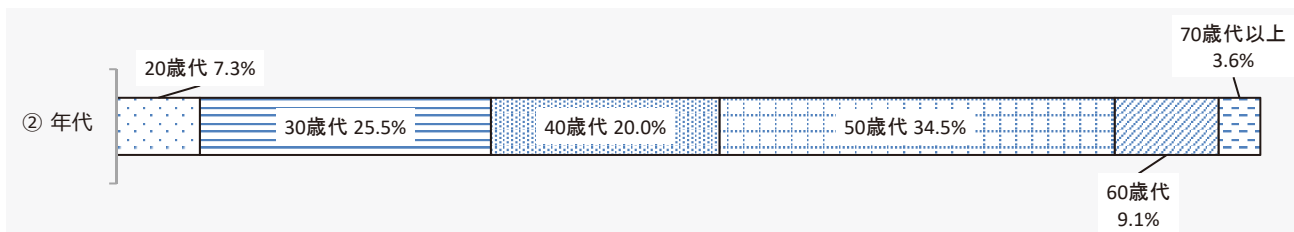
(2023年2月10日)

設問1 あなたのことについてお尋ねします。

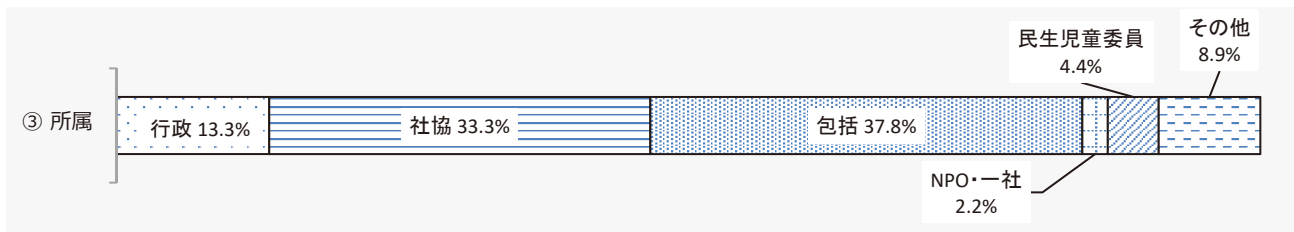
①お住まいの都道府県を教えてください
33件の回答

都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数	都道府県	回答数
北海道	3	栃木県	1	神奈川県	1	長野県	1	大阪府	2	愛媛県	2
青森県	1	群馬県	2	新潟県	1	岐阜府	1	兵庫県	9	鹿児島県	2
岩手県	1	東京都	1	石川県	1	京都府	1	和歌山県	1	沖縄県	1
福島県	1										

②あなたの年代を教えてください。グループ参加の方はメンバーの年齢構成をチェックしてください（複数選択可）。
33件の回答（総回答数55件）



③あなたの所属を教えてください。グループ参加の方はメンバーの所属構成をチェックしてください（複数選択可）。
33件の回答（総回答数45件）

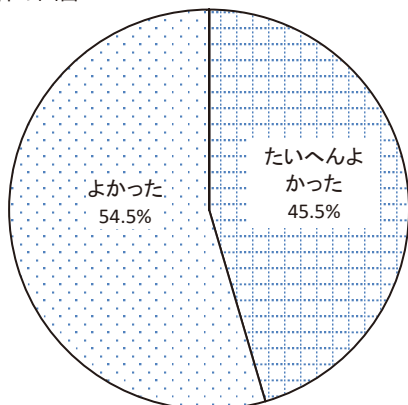


その他回答【4回答（各1件）】

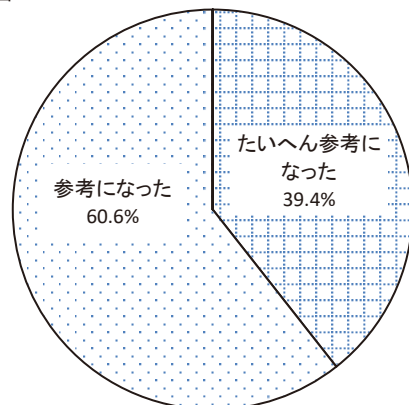
社会福祉法人、【介護予防センター、生活整備体制事業所（各札幌市特有のもの）】、有志、地区社協

設問2 本日の研修内容についてご意見をお聞かせください

①今回の研修に参加されてよかったですか。
33件の回答



②研修の開催資料は参考になりましたか。
33件の回答



● **研修や資料のなかで参考になったことや役立ったことを教えてください。**
(自由記述／一部抜粋)

- 実践の内容とともに、たんぼぼハウスのお二人や塚本さんの言葉が本当にあたたかくて、人間って良いな、地域で暮らすことってすばらしいな、と感動しました。地域のなかには孤立している人がたくさんいます。その人たちの孤独は言葉にできないほどつらいもので、そのなかで自死を選ぶ人もあれば、ある日突然いなくなってしまう人もいます。都会のなかで、人と人がつながるあたたかさをどうすれば少しでもつくっていただけるのか。難しい課題ですが、取り組んでいきたいです。
- 本来の福祉のとらえ方、当たり前の地域のあり方を再確認できた。
- 年齢、障害の有無など関係なく、いろいろな人が地域で活躍できる。地域に根差した活躍の場があることで、例えば認知症のAさんではなく、お弁当づくりのAさんと呼ばれ、差別や偏見がなくなるのだと改めて考えられました。
- 活動からより地域共生社会の具現化のイメージがつかえました。
- 福祉制度にとらわれず、いろいろな人たちが集まって「ごちゃまぜ」で活動しているのが新鮮で、まさに地域福祉だと感じた。
- 社会資源の活用、地域を巻き込んだ活動をされていることが分かりやすかったです。どうしても福祉分野のカテゴリーで分けながら考えてしまいがちですが、固定された考え方だけではなく、一度そのカテゴリーを外して考えてみることも必要だなと考えました。
- たんぼぼハウスには、震災のときに半日だけボランティアをさせていただいたことがありました。そのときは、地域住民のみならず、全国各地から大勢のボランティアが来られており、その統制をとられていたのが上村さんでした。たんぼぼハウスの仲間だけでなく、地域の人たちにお弁当を届けるために、ハウスの内外で多くの人が一丸となって食事の提供をされていました。湘南学園の塚本さんは、「縦割りはケアする側の都合で、勝手に分けられた。もともと社会は、年寄りも子どもも障がいのある人もいろいろな人がいて当たり前で、ごちゃまぜだった」と言われていました。共生社会の構築をめざし、縦割りを超えて横のつながりを再びつくっていくことを立場や役職を越えて目指していきたいと感じました。
- たんぼぼハウスの支援を行うなかでさまざまなニーズに応えてきたからこそ、制度の枠を超えた“お互いさま”の関係が構成されていると感じた。

● **運営についてのご意見やお気づきの点がございましたら教えてください。**
(自由記述／一部抜粋)

- このような参加しやすいオンライン研修を企画運営してくださり、全国各地の先進的な取り組みから学ばせていただくことができました。
- 回を重ねるごとに、気づきも重ねることができました。
- これまで、5回の研修を受けさせていただきましたが、どれもすばらしい取り組みで、本当に参考にさせていただきました。しかし、参加者のなかには、成功例ばかりをお話しいただきましたが、そこまでのプロセス、失敗例などの紹介もしてほしいという意見もありました。

● **その他のご意見や感想などがございましたらお聞かせください。(自由記述／一部抜粋)**

- 今回は3回参加させていただきました。地域包括の職員として大きな感銘を受ける内容でした。ありがとうございました。
- 今後の専門職としての目標や役割が見えた。
- 全国の実践者の話をグループで聞ける機会をいただき、ありがとうございました。多様な活動者とともに、学びを深める機会を積み重ねていかないといけないと感じました。
- どの地域でも孤立や孤独の問題があると思いますので、その人たちにどのようにアプローチが必要であるかをこれかも学び続けたいと思います。

フォローアップ意見交換会

日時 2023年2月14日(火) 15:00～15:30

開催方法 Zoomによるオンライン

参加者 **兵** 市社会福祉協議会(兵庫県)

市、市社協のグループで参加

鹿 市町村(鹿児島県)

生活困窮者自立支援の担当(個人参加)

社 社会福祉法人(鹿児島県)

社会福祉法人および医療法人で参加

●研修を受けて、参加者の反応は？

兵 いままで、行政の方と社協職員が同じ研修を受講して意見交換をするという機会はなかなかありませんでした。今回の研修をとおして、行政と社協の意識のすり合わせができるようになったと思っています。行政の方からは、「今まで、高齢、障がい、児童といった属性ごとに見てきてしまっていたけれど、『地域』という区切りで考えなければいけないね」とおっしゃっていただきました。社協が目指しているものと同じ、と意識統一ができたと感じています。

鹿 研修を受けて、私自身に、「分野でわかる」という見え方の癖があることに気づかされました。困窮の相談に来られる方は、分野や属性は関係なく、いろいろな困りごとを抱えている人も多くいます。そのため、分野を問わずにいろいろな支援者とのつながりをつくろうと思っていたのですが、たんぼぼハウスから「ごちゃまぜ」というキーワードをいただき、これから胸に刻みつけていかなければいけないなと思っています。

社 事業所間の交流や、地域の行事などで交流のある医療法人とともに参加をしました。場所も近いため、法人同士で意見交換をする機会はもともとありましたが、法人の高齢者施設のなかでの取り組みや、医療法人での取り組みを確認し合い、その先の展開を考えています。

今回の研修では、必ずしも整った環境ではないにもかかわらず、いろいろな人とのつながりによってニーズに応じていく活動が参考になりました。これまで、私たちの法人では、既存事業の専門的な視点から地域に貢献できることを考え、介護予防などに取り組んできましたが、その取り組みが地域のニーズに即していたかどうかを考えています。高齢者だけでなく、いろいろなニーズを抱えている幅広い年齢層の人のニーズをどのように探っていくのか、また、それぞれの法人の強みを活かしてどんなことができるのかを話し合いました。

●今後について

兵 第1回から5回まで参加をしました。回を重ねるにつれ、行政と社協との間で関係性が深まり、「こういう方向で考えてみてはどうだろうか」「こんなことができるんじゃないか」と前向きに、夢を語り合えるようになりました。実現に向けて、連携の大きな一歩を踏み出せたと思っています。

鹿 自分たちの業務の見直しや、「今こういうことはできているけれど、こういうことはできていないよね」という意見を出し合う機会になりました。業務の改善点や工夫できる点を考えて話し合うきっかけになったので、今後の業務にも生かしていきたいです。

社 近所の困りごとや悩みごとは、今後もさまざまな形で発生していくと思います。そうしたときに、気づき、相談できることが近所で当たり前になるような仕組みを法人として考えていくために、今後も学びを深めていきたいと思っています。

また、行政担当者が声をかけて、居場所づくりのためのネットワークが生まれています。今後、このつながりを活かしてさまざまな活動が予定されています。暮らしやすいまちづくりになるように貢献するだけでなく、法人の垣根を越えて居場所づくりに取り組んでいきたいと考えています。

事業実施状況一覧

1. 委員会の開催

本事業全体の方向性や実施する研修の内容、作成するガイドブックについて検討するための委員会を設置し、4回開催した。

第1回	2022年7月22日(金) WEB会議	① 事業の概要説明 ② 研修内容の検討	委員長・委員7人 事務局3人
第2回	2022年10月31日(月) WEB会議	① 研修準備の進捗及び今後の研修の 進め方の検討	委員長・委員8人 事務局3人
第3回	2022年12月16日(金) WEB会議	① 研修の進捗報告 ② ガイドブック構成案の検討	委員長・委員8人 事務局3人
第4回	2023年2月24日(金) WEB会議	① 研修の報告 ② ガイドブックの検討	委員長・委員8人 事務局3人

2. 研修事業

地域で孤立・孤独に陥ることを防ぐために、誰もが地域で役割をもち、活躍する場づくりに取り組む全国各地の実践を学ぶことを目的とし、テーマの異なる5回のオンライン研修を実施した。事前にゲストの実践をまとめた資料を受講者の皆様に読んでいただいたうえで、本研修にご参加いただき学び深めたとともに、自治体単位のグループ参加を推奨し、研修で得たヒントを地域で実行に移す契機となることをねらいとした。研修内容は、後日アーカイブでの視聴も可能とした。

(1) 研修事前資料(ゲストの実践紹介)作成のためのヒアリング

2022年8月30日(火)～31日(水)

上士幌町地域包括支援センター、ママHOTステーション(北海道)訪問/事務局1

2022年10月5日(水)

藤里町社会福祉協議会(秋田県)訪問/委員1、事務局1

2022年10月5日(水)～6日(木)

にしはらたんぼぼハウス(熊本県)訪問/委員長1、事務局1

2022年10月19日(水)

上士幌町社会福祉協議会、ママHOTステーション(北海道)オンライン/委員1、事務局1

2022年10月21日(金)

久留米10万人女子会(福岡県)オンライン/委員2、事務局1

2022年11月1日(火)

東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”(滋賀県)訪問/委員長・委員2、事務局1

2022年11月23日(水)

久留米10万人女子会(福岡県)訪問/委員2、事務局1

(2) 研修の実施状況

2022年12月15日(木)

「就労支援と地域支援」東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”(滋賀県)野々村センター長、尻委員長、森田委員/個人申込51、グループ申込38、合計申込89

2022年12月20日(火)

「生活支援体制整備事業から多世代交流へ」上士幌町社会福祉協議会・ママHOTステーション(北海道)上士幌町社会福祉協議会 小泉氏、ママHOTステーション 倉嶋氏、山本委員、池田委員/個人申込67、グループ申込47、合計申込114

2023年1月17日(火)

「全世代の活躍支援」藤里町社会福祉協議会(秋田県)菊池会長、門田事務局代理、櫛部委員、池田委員/個人申込51、グループ申込39、合計申込90

2023年1月20日(金)

「若い世代のつながりづくり」久留米10万人女子会(福岡県)國武委員、山本委員、池谷委員/個人申込51、グループ申込39、合計申込90

2023年2月10日(金)

「就労支援と地域支援」にしはらたんぼぼハウス(熊本県)上村副理事長、廣瀬施設長、凧委員長、塚本委員/個人申込51、グループ申込39、合計申込90

(3) フォローアップの実施状況

2022年12月19日(月) 「就労支援と地域支援」(参加者3、委員3、事務局1)

2022年12月26日(月) 「生活支援体制整備事業から多世代交流へ」(参加者4、委員2、事務局2)

2023年1月19日(木) 「全世代の活躍支援」(参加者3、事務局2)

2023年1月24日(火) 「若い世代のつながりづくり」(参加者2、委員2、事務局2)

2023年2月14日(火) 「就労支援と地域支援」(参加者3、委員長・委員2、事務局2)

委員からのご意見

●情報紙について

- 各組織や、それぞれで展開されている事業が、(活用しているのであれば)どんな助成金によるものなのか記してあると、参加者にとってより参考になるものになったのではないかと。(池谷啓介委員)

●研修について

- 当日の実践報告の内容や、参加者アンケートの結果より、地域性は違っても「いろいろな人がいてこそ社会」ということが理解でき、伝えられたのではないかと。(塚本秀一委員)
- 「もっと話を聞きたかった」「もっと深掘りしてほしい」という意見が見受けられる。オンライン研修の限界もあるが、一方通行にならないように、参加者の知りたい部分をどうフォローしていくかをディスカッションできるといい。(國武ゆかり委員)
- 地元で声をかけたところ、さまざまな立場でグループを組んで参加してくれて、それをきっかけに別の学びの場を設けられるようになった。(森田真希委員)

●フォローアップについて

- あらためて後日に振り返るといった意義は一定あるものの、設定時間が短く、ひととおりの感想を聞く程度に終始してしまっていたように感じる。(凧保憲委員長)
- フォローアップの焦点が定まっておらず、参加者自身が話したいことや確認したいことを発言しやすいような工夫が必要だったのではないかと。(池谷啓介委員)
- 「この講師だからできる」「この地域だからできる」のではなく、そのエッセンスをどう自分たちの地域でどう取り組むのか、ということが大事。研修を受講して、自分たちのまちで何をどうやっていきたいのか、どう変化させていこうと思えたのか、それを聞けるような設定をする必要があったのではないかと。(國武ゆかり委員)

●今後について

- 受講者から、「閉塞感のなかで光を感じる」という感想を寄せられた。制度の枠を超えられずに悩んでいる姿を見聞きし、制度研修ばかりではなく、自分たちのまちのつながりを一緒に考え、地域の未来を考える必要性を感じている。(池田昌弘委員)
- コロナ下で、いろいろな部分で「メッキがはがれた」と感じることもある。「つながりましょう」と言っても簡単につながりができる時代ではないが、つながり続けたいせつさや、そのセンスを今後も強く訴え続ける必要がある。(櫛部武俊委員)

オンライン
開催
参加費無料!

孤立を防ぐ「地域づくり」 人材養成研修 2022年12月～2023年2月開講 (全5回)

地域共生社会に向けた地域づくりや参加支援について、先駆的実践を学びます。

事前に、先駆的実践をまとめた情報紙をWEB発行し、お届けします。

対象は自治体職員、専門職、住民の皆さんまで、幅広くグループでご参加いただけます。

自治体単位で参加し、演習を行うことで、研修を通じて共通の認識をもつことができます。

目 的

- 地域で孤立・孤独に陥ることを防ぐために、誰もが地域で役割を持ち、活躍する場づくりに取り組む全国の先駆的実践を学び合う研修を開催します (全5回)。
- 孤立させない地域づくりにつながるポイントを知り、受講者がわがまちでの取り組みに活かせる視点を学びます。事前に、先駆的実践をまとめた情報紙を一読したうえで、研修で実践者と意見交換を行い、視野を広げることができます。
- 同一自治体から参加した仲間と共通理解を深め、次の展開につなげる契機となることを期待し、「自治体単位のグループ参加」を推奨します。地域共生社会の包括的支援体制の構築に向けた関係者勉強会や庁内連携・キックオフの契機としてご活用ください。

実施 方法

オンライン
(Zoom ミーティングを利用します)



対象

地域づくりや参加支援 (生活困窮者等の支援を含む) に携わる市町村等の自治体職員や専門職、自治会長や民生・児童委員、地域づくり・地域福祉実践者、商工会、集落支援員・地域おこし協力隊等。



参加方法

①グループ参加、または、②個人参加の2種類があります。

グループ参加を推奨します。

グループ参加は5人以上とし、構成メンバーは自由です。

人数の上限はありませんので、例えば30人規模でのご参加も可能です(演習を行いますので、5～6人前後のグループをつくることを推奨します)。

福祉の専門職だけでなく、住民や福祉分野以外の方がメンバーに加わると演習が深まります。

例1

行政(地域づくり部署)
行政(生活困窮者支援)
行政(高齢者福祉)
社協(生活支援コーディネーター)
福祉専門職(児童福祉)

例2

行政(福祉部署)
地域包括支援センター
福祉専門職(障害福祉)
地域おこし協力隊or集落支援員
公民館長
農協or生協or企業

例3

行政
社協
地域包括支援センター
地区社協 or まちづくり協議会
(複数人)

※このほか、民生・児童委員、福祉委員の研修会や協議体メンバーの勉強会としても活用いただけます。

プログラム

2022年12月15日(木) 14:00～16:30 「就労支援と地域支援」

◇ゲスト 東近江圏域働き・暮らし応援センター Tekito- センター長 野々村 光子

◇コメンテーター NPO法人地域の寄り合い所また明日 代表 森田 眞希

◇コーディネーター 淡路市社会福祉協議会 事務局長 凧 保憲

▶東近江圏域働き・暮らし応援センター Tekito- (滋賀県)

480社に及ぶ企業・事業所と連携し、障害のある人やひきこもりの人の就労と生活の支援を行っています。市民活動が活発な東近江市の地域性を活かし、さまざまな企業・事務所・市民活動との出会いから、障害分野以外の地域課題にも取り組んでいるのが特徴です。「その人の適当を大切に。すべての人がその人らしく働き・暮らせること」が信条。



2022年12月20日(火) 14:00～16:30 「生活支援体制整備事業から多世代交流へ」

◇ゲスト 上士幌町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター 小泉 彰宏

ママのHOTステーション 生活支援コーディネーター 倉嶋 香菜子

◇コメンテーター 宝塚市社会福祉協議会 地域支援部長 兼 企画経営部長 山本 信也

◇コーディネーター 全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

▶上士幌町(北海道)

生活支援体制整備事業は無限大!高齢者の居場所、子育てママたちの居場所、そして双方が交わってまちが元気に。長年暮らす住民も、移住者も、まじわりながら楽しいまちのかたちが見えてきた!子育て支援が高齢者の介護予防に、高齢者の生きがいや役割が子どもたちの未来のために、そんな実践を北海道上士幌町からお届けします。



2023年1月17日(火) 14:00~16:30

「全世代の活躍支援」

◇ゲスト 藤里町社会福祉協議会 会長 菊池 まゆみ

事務局長代理 門田 真



◇コメンテーター 一般社団法人釧路社会的企業創造協議会 代表理事 櫛部 武俊

◇コーディネーター 全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

▶藤里町社会福祉協議会（秋田県）

ひきこもり者への支援や独自の特産品開発で知られる藤里町では、高齢化率が50%を超えるなか、「生涯現役のまちづくり」を目標に掲げ、2017年に全世代対象の「プラチナバンク」をスタートさせました。足腰が弱くなっても、誰もが活躍し出番のある地域を目指して、人づくり・仕事づくり・若者支援に取り組んでいます。

2023年1月20日(金) 14:00~16:30

「若い世代のつながりづくり」

◇ゲスト NPO法人久留米10万人女子会 代表理事 國武 ゆかり

◇コメンテーター NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長 池谷 啓介

◇コーディネーター 宝塚市社会福祉協議会 地域支援部長 兼 企画経営部長 山本 信也

▶NPO法人久留米10万人女子会（福岡県）

久留米市で暮らす成人女性13万人のうち、10万人が10年後につながり合えば、自分の望む地域暮らしが実現するのではないかと考えた30~40歳代が中心となり、2018年発足。市内46小学校区ごとに月1回、20~80歳代が交流。若い世代が「わくわくドキドキ」する企画で地域デビューにつなげ、顔の見える関係づくり、支え合いの循環を目指しています。

2023年2月10日(金) 14:00~16:30

「就労支援と地域支援」

◇ゲスト NPO法人にしはらたんぽぽハウス 副理事長 上村 加代子

施設長 廣瀬 るみ子

◇コメンテーター 社会福祉法人湘南学園 専務理事 塚本 秀一

◇コーディネーター 淡路市社会福祉協議会 事務局長 凧 保憲

▶NPO法人にしはらたんぽぽハウス（熊本県）

2005年の西原村民参画ワークショップをきっかけに、障害のある人の居場所&仕事づくりとして、農産物加工を開始。生活困窮者や出所者なども集い、2016年熊本地震では被災者への支援も行いました。農家や住民の協力のもと、食堂・移動販売による食の支援や交流、子どもの居場所づくりなど、共生の地域づくりに取り組んでいます。



参加エントリー&受講の流れ

①専用サイトから各研修にお申込みください。

URL <https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>

参加方法は、①グループ参加と、②個人参加の2種類から選択してください。

グループ参加の場合、参加人数・参加者名が明確になっていない段階でのエントリーで結構です。

②事前に、先駆的実践の内容をまとめた資料を、申込者にEメールでご案内いたします。

研修当日までにご一読の上、ご参加ください。

③開催日の2日前までに、Zoomの入室用URLをEメールでご案内いたします。

オンライン環境を整えて、当日ご参加ください。

なお、開催後に希望者とのフォローアップの場を設ける予定です。



注意事項

○本研修はZoomミーティングを利用します。当日までにご自身で受講環境を整備し、パソコン等の端末から受講ください。Zoomを初めてご利用される方は、Zoomヘルプセンターなどで基本的な利用方法をご確認ください。

○研修中は、講師に参加者が見えるようカメラをオンにしてご参加ください。

○オンライン受講の際、同じ部屋で複数の機器を使用して参加した場合ハウリングが生じます。1台で参加者全員が聞き取れるスピーカーを用意するなどの対策を事前に講じてください。

○本研修の映像、音声、画像、資料の一部およびすべてを無断で複製（録音・録画を含む）、転載、送信、放送、配布、貸与、翻訳、変造することは禁止します。

○今後の参考のため、配信中はZoom画面の録画を事務局で行います。

○第三者との「Zoom招待メール」のURLの共有や貸与、SNSを含む他の媒体への転載は固くお断りいたします。



<主催・お問い合わせ先>



特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

担当：小野寺知子、田村洋介、宇城絵美

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1F

TEL 022-727-8731 FAX 022-727-8737

専用サイト <https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop>

専用メールアドレス clc_online@clc-japan.com

独立行政法人福祉医療機構 令和4年度 社会福祉振興助成事業
「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」
運営委員会 委員名簿

	所 属	役 職	氏 名
委員長	淡路市社会福祉協議会（兵庫県）	事務局長	凧 保 憲
委員	釧路社会的企業創造協議会（北海道）	代表理事	櫛 部 武 俊
委員	NPO 法人地域の寄り合い所また明日（東京都）	代 表	森 田 真 希
委員	社会福祉法人 湘南学園（滋賀県）	専務理事	塚 本 秀 一
委員	NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝（大阪府）	事務局長	池 谷 啓 介
委員	宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）	地域支援部長 兼企画経営部長	山 本 信 也
委員	NPO 法人久留米10万人女子会（福岡県）	代表理事	國 武 ゆかり
委員	全国コミュニティライフサポートセンター	理 事 長	池 田 昌 弘

事務局:全国コミュニティライフサポートセンター 小野寺知子・宇城絵美・田村洋介・橋本泰典

孤立を防ぐ「地域づくり」ガイドブック

独立行政法人福祉医療機構 令和4年度 社会福祉振興助成事業
「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」報告書

2023年3月



特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1F

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

<https://www.clc-japan.com/>



だれもが地域で普通に